

# 通類掘

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年一月廿一日印刷(毎月一日)  
昭和六年二月一日發行(回發行)

梶原平三

第六集

二月号



素好画  
北溟画

眼鏡印

# 肝油



ボクラノ營養

ボクラノ肝油  
...

ビタミンA及Dの含有量第一

● 全国著名薬店にあり

大塚道修町  
伊藤千太郎商店



風味必ず御氣に召す

天ふら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽  
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋





道頓堀 昭和六年二月號

第六年 第五十三輯

◆中座東西大歌舞伎◇「勸進帳」鷹治郎・富樫左衛門◇「假名手本忠臣蔵」山科閑居の場、福助戸無瀬・扇雀小浪・幸四郎加古川本藏・長三郎力彌・魁車妻お石・延若由良之助◇「お富の貞操」延若村上新三郎・魁車お富◇「石切梶原試名劍」鷹治郎梶原平三景時・市藏六郎太夫・同舞臺面◇「勸進帳」クラフ◇「延享五人男」我童辨天小僧・扇雀赤星十三郎・魁車奴小萬・右衛門次南郷力丸・壽三郎忠信利平◇「紅葉狩」舞臺面・幸四郎鬼女・我童將軍維茂浪花座・家庭劇◇「榮光の蔭に泣く」小織香屋新太・石井八重梅◇「女人禁制」天外高橋・賀川波野◇「目と耳と口」十吾惣吉・天外幸一・石井百合子◇「風車」天外酒井・村田妻さよ子・賀川友人吉川◇「白」手の指輪」十吾濱口・小織小田切・石井小奴◇「榮光の蔭に泣く」天外中川・石井八重梅◇松竹座「天レビユッ」ヴァニチフエアの各場面◇文樂座淨瑠璃◇「一の谷嫩軍記」玉幸平山・扇太郎玉藏姫・榮三熊谷◇「鶴山古跡松」舞臺面・文五郎中將姫角座・新聲劇◇「南國大平記」和歌浦お由羅・伊川笑右衛門・新田庵主義觀・山口小太郎小波庄吉・辻野益滿林之助・福岡深雪・八郎太◇「木賊の秋」藤本信造・富士軒お六・山口馬吉◇成美園（神戸松竹劇場）妻吉物語「藤村吉とん・木下おさん・石河妻吉・梅田千代吉・三好お榮・伊志井巳之吉・都築伴次郎・高田龜太郎

◇表紙……………（石切梶原古版畫）……………

石切梶原雜話……………高安 吸江（二）

感激の鷹治郎丈の石切……………入江 來布（八）

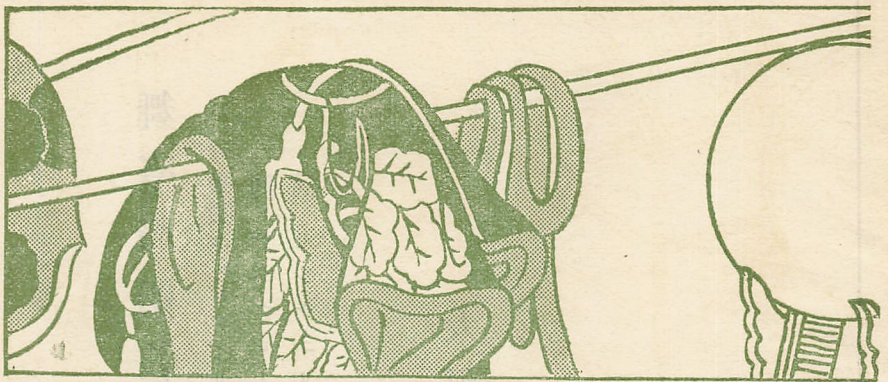
淨化 鷹治郎の切味「石切」からの劇界幻想……………富田 泰彦（五）

石切梶原の演技……………高 谷 伸（一〇）

石切梶原の綿繪美……………倉田 啓明（二三）

◆九段目漫筆……………西尾 福三郎（一八）

◆九段目を樂んで語りました……………竹本土佐太夫（二三）



<b>映 畫 欄</b>	
銀	河(誌上封切)..... 浦田 映畫..... (三二)
向日葵夫人(誌上封切).....	帝キネ映畫..... (三六)
嘆きの天使(誌上封切).....	ウフア映畫..... (三八)
スタデイオ・ニユース.....	..... (三四)

◆ 喫 煙 室.....	..... (四〇)
◆ 勸進帳に就て.....	松本幸四郎..... (二六)

◆ 芥川さんのお富の貞操.....	森田 信義..... (二四)
◆ さて新聲劇は.....	徳田 純宏..... (四二)

誌 上 舞 臺	假名手本忠臣藏(山科閑居の場)..... 二月中座..... (一九)
	梶原平三試名劔(星合寺の場)..... 同..... (一五)
	南國太平記(五幕十三場)..... 二月角座..... (四四)

◆ 延享五人男(文獻二篇).....	..... (二六)
◆ 歌舞伎座新築に寄せる.....	..... 家 (四四)
◆ 劇 壇 往 來.....	..... 諸 (五〇)

<b>特 輯</b>	
上 演 脚 本	お富の貞操..... 芥川龍之介原作..... (五二)
	延享五人男..... 食満南北脚色..... (六〇)
	大森痴雪..... (六〇)

◆ 挿 繪.....	田中滿彦..... (七二)
◆ 編 輯 後 記.....	..... (七二)

舞臺照明裝置及設計

米國ユニヴァーサル電氣舞臺照明會社  
同ヂスプレー電氣舞臺照明會社 製品  
同センチュリー電氣舞臺照明會社

大阪市東區京橋前ノ町三

バグナル株式會社

電話東(94)五二〇〇二番

劇場・常設館・電氣設備  
 トーキー電氣設備  
 舞臺照明機械製作  
 電燈器具製作  
 ネオンサイン廣告物 出願建設  
 電飾點滅廣告物  
 材料各種・並ニ照明用品・販賣

スロツトライト・並ニ・ステーションライト各種設計製作  
 特別電氣工事設計請負

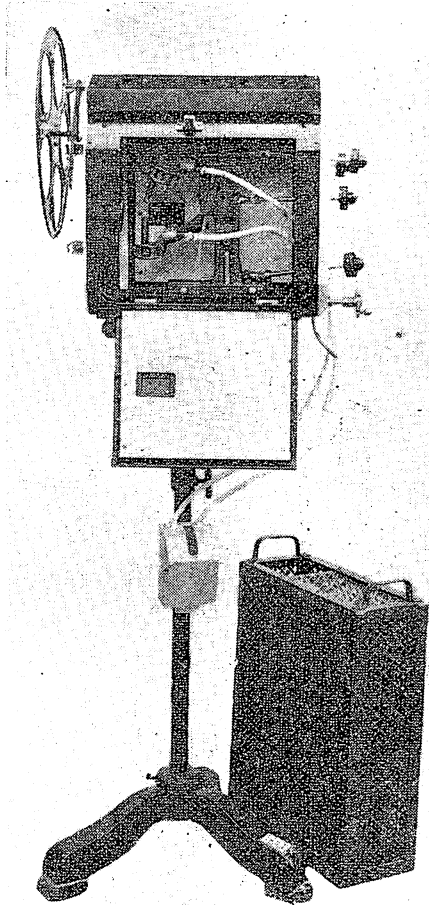
松竹土地建物興業株式會社御用達



# 岡本電機工業所

岡本嘉澄

營業所 大阪市天王寺區生玉町三番地  
 電話南(75)三六九(二番)  
 工場 大阪市東成區東田町一〇六一



輸入品に比し優ることも

毫も劣らぬ國産品

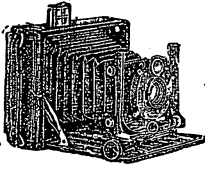
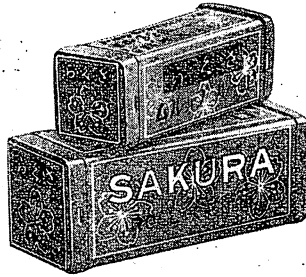
リリーカメラ  
パールカメラ  
アイデアカメラ  
パーレットカメラ

さくら

ロールフィルム

各判完成

(カタログ進呈)



カメラは優良國産品を!

寫真機及小型活動寫真機

小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋



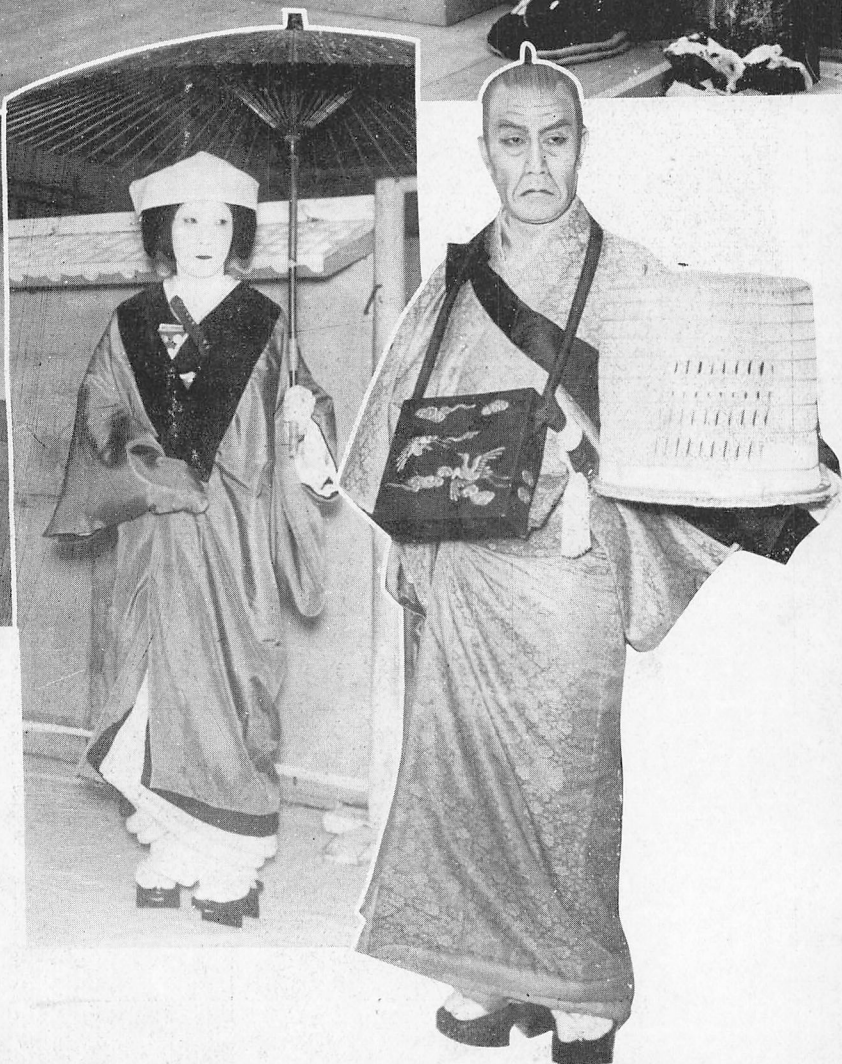


“ 勸  
進  
帳  
”

富樫左衛門……中村鴈治郎



座 中 ・ 月 二



“行道”

戸無瀬

福助

小浪

扇雀

加古川本藏

幸四郎

# 假名手本忠臣蔵

道行より山科閑居まで

二日月・中座上場



大星由良之助

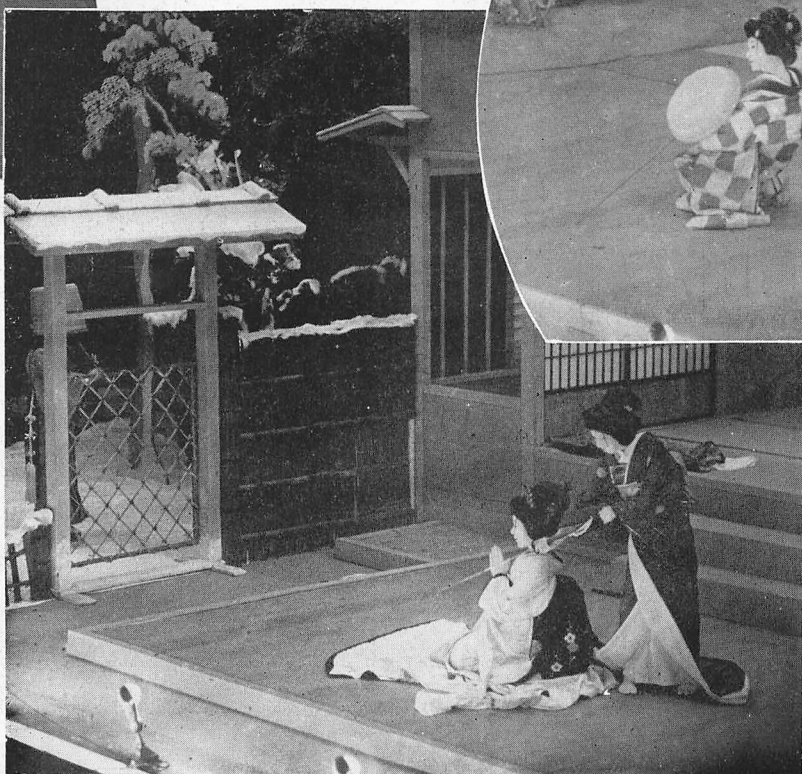
力 彌

妻 お 石

延 若

長 三 郎

魁 車



假名手本忠臣藏

道行よ閑居まで

二月・中座



力	小	戸
彌	浪	無
長	扇	瀬
三	雀	福
郎		助



# 牛 肉 實 來 煮

健やかなる……

31年は

實來煮から

株式會社 松下商社

大阪 高麗橋

松下商社 京都店 出所

京都 市 醒 井 五 條

劇廣宣圖裝  
畫告傳案飾



阿久田號

神戶市水通三丁目六一  
電話漢(5)二四〇番



小道具  
裂具  
貸衣裳

- ・素人演藝會・宴會の催物・
- ・春秋溫習會・婚禮の衣裳・

松竹衣裳部

本店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番

東京支店

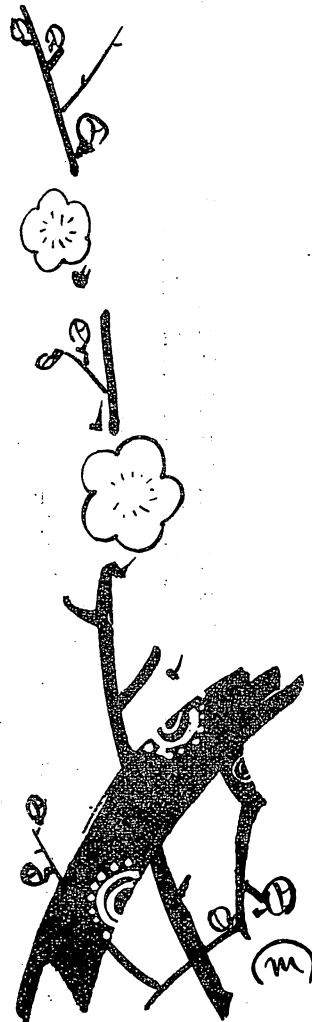
東京市淺草區並木町十五  
圓電話 淺草 五 五 九 九 番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい、  
御來客の御相談に應じ便利よく取計ひます）

庭園の雅趣都下一

風味・情緒・設備

斷然斯界の第一位



名代  
製作  
電氣  
氣

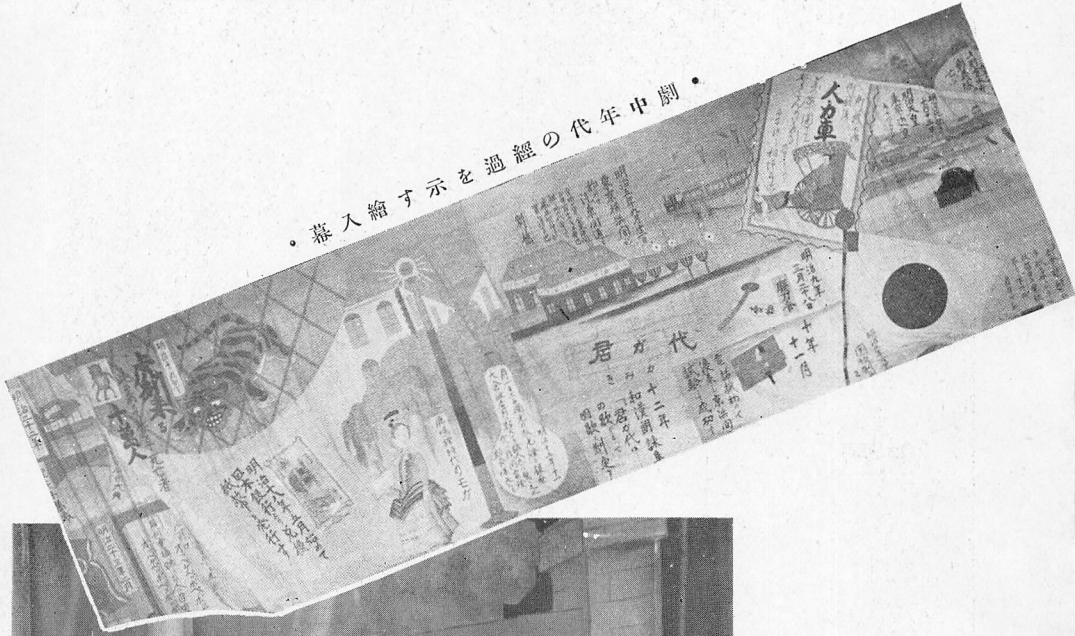
天王寺公園

Tennoji Park, Osaka.

Tel. Nos. Ebisu {1334. 1335. 1413.  
1336. 1337.



・劇年中の経過を示す縮入幕・



お富の貞操

お 村上新三郎  
富 富

魁 延若  
車 若

二月・中座



— 石切梶原試名劍 —

星合寺の場・三平原景時・鷹治郎

# 全國著名遊覽地御案內

御料理旅館

むろしし

奈良三笠山麓  
電話 七二〇〇番  
七三〇〇番

大垣公園城畔高台

本店 吉岡樓  
電話 一〇八二七九番

支店 千歲樓

別館 流芳閣  
電話 一八二〇番

全感呼亭  
最モ光榮アル歴史ヲ有シ、櫻楓並月四季眺望  
絶佳。諸官廳指定高級旅館トシテ諸紳翁完全

備



設

完

全

關西線笠置驛ヨリ三丁

笠置館

御料理旅館 笠置温泉  
京都府笠置(木津川畔)  
電話 四五五番  
六番

賀片山津温泉  
一、本館ハ皆様方ノ別荘デアリ  
マス御遠慮ナク御利用下サイ

内湯 あらや

別館 聴濤閣  
電話 十七番  
電話 五十二番

一、湖岸ニ突出風景第一  
新時代ニ最モ適シテキマス  
(カタクワ増呈)

城崎温泉

ゆこうや旅館  
電話 二六番

湯治とスキーに……

新春の初旅に……

御参宮のおかへりには  
山田より電車で約二時間  
最も便利になりました  
北勢の仙境湯の山温泉

内湯 壽亭  
電話 菰野一六番

◇御報次第營業案内進呈

出雲大社

鐵道省指定

旅館 竹野屋  
長電話 七番

別府温泉

海岸砂湯前

旅館 菊水

宿泊至便 電話 七三〇〇番  
七三九四番

眺望絶佳

理想ノ避寒好適地

相州湯河原温泉

伊豆屋旅館  
電話湯河原園二三番

全別館  
電話 一二三番

地震には絶對安全

東海道に尤も近き山の温泉

別天 地

伊豆新古奈温泉

松仙閣 白石館  
電話伊豆長岡二九番

三島驛、沼津驛より自動車、電車  
にても廿分 地震の絶對安全地帯

本欄ノ廣告ハ左記ニ  
御申込下サイ

「道頓堀」廣告取扱所

劇場廣告社 中江三省

大阪市住吉區阪南町東三  
東京市赤坂區靈南坂町八

アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキヤラメル

チョコ  
レート キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94) 一六六一番  
二〇一三番





に粧化淡な楚・清

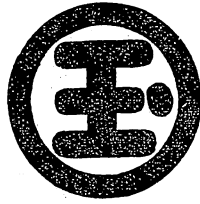
# 粉白水圓御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



園蝶胡東伊 鋪本



# 吳服雜貨

歡樂境の中心

◆御買上品に對しては新舊市内御届致舛

◆御觀劇の御歸りに是非御立寄りを

目下冬物大見切品充溢

丸玉

川石

大阪道頓堀



面臺舞場の寺合星 “切石”

青  
貝  
師  
六  
郎  
太  
夫

市

藏



帳進勸

フラゲ

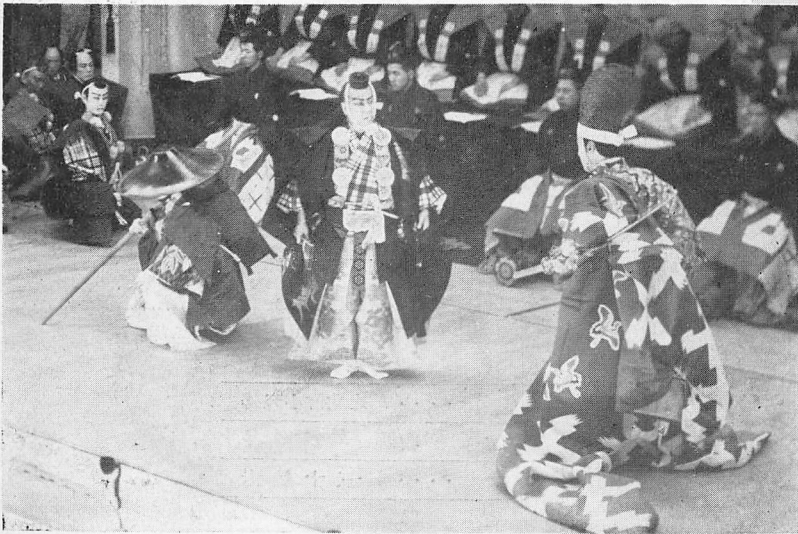
武藏坊辨慶  
九郎判官義經  
富樫左衛門

福幸  
四郎  
雁治助  
郎

◇舞臺面各種◇







座 中




---

延 享 五 人 男

---

二 月 中 座

---



---

辨 天 小 僧 菊 之 助

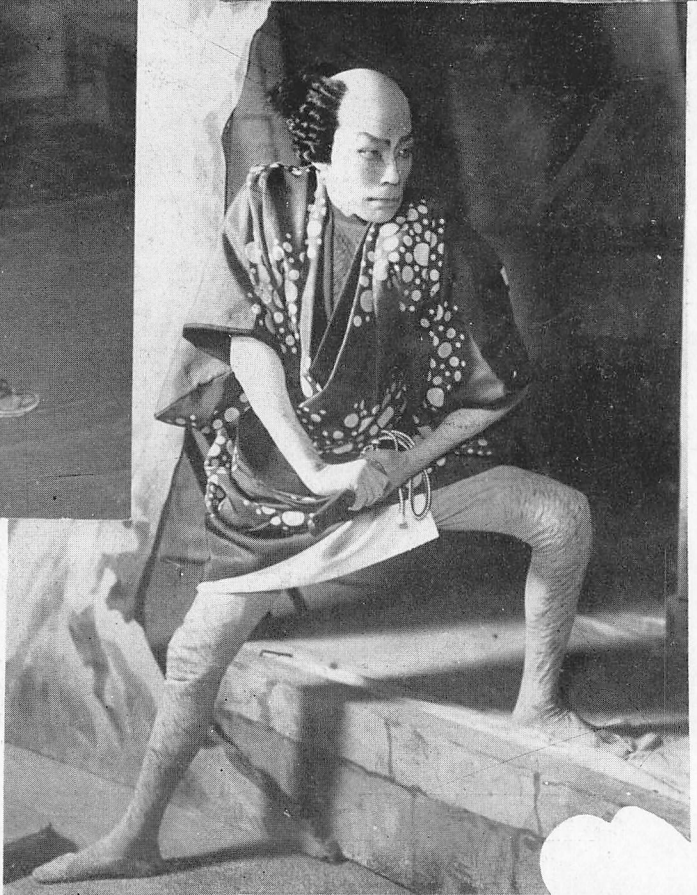
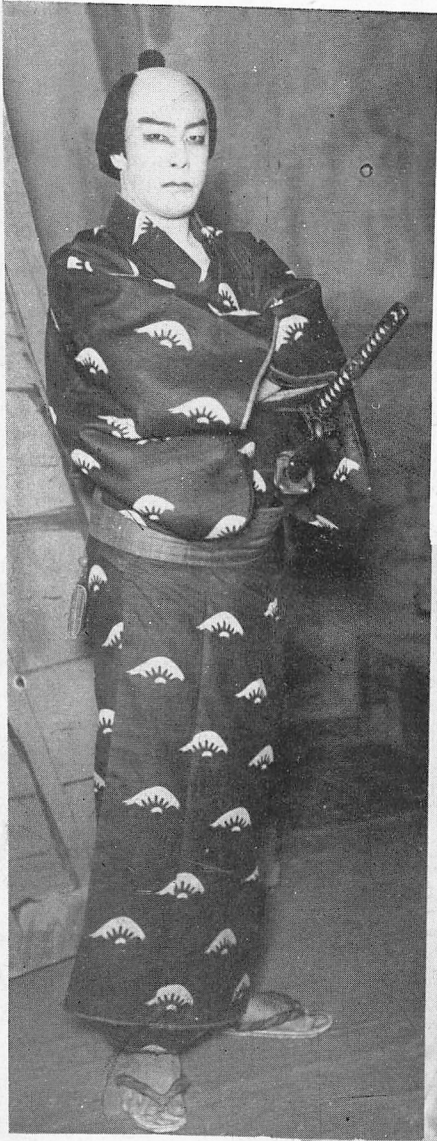
童 我

---

赤 星 三 十 郎

雀 扇

---



やつの小萬……

……魁車

南郷力丸……

……右團次

忠信利平……

……壽三郎



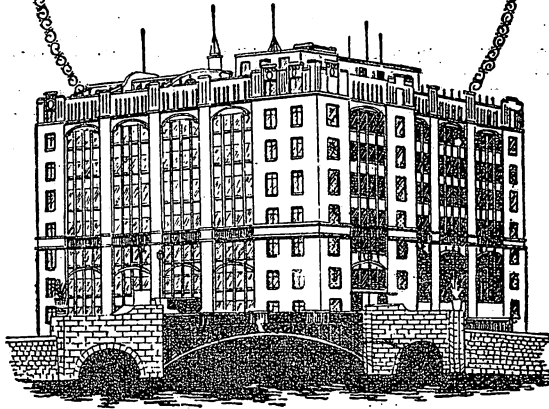
座中・月二・“狩葉紅”

童 我 茂維軍將吾余・郎四幸 女鬼は實姫科更



# 大同生命

堅實本位なる  
そして貯金に勝る  
累加配當付 特別養老保險



大阪 土佐堀

規則書送呈

＝ 切 封 々 愈 ＝

てで出りよ「スラダラテス」篇名  
 !る優に「スラダラテス」

んれが注に篇一の此涙の下天  
 演主の涙子合百英・曲悲性母の上以「給女」

ん じ ふ り わ ま ひ  
 日 朝 京 東 日 過  
 一 場 満 ち 於

に「會の薦推畫映ゝい」るせ催開てに堂講日朝京東日過  
 かりた得ち贏を光榮のるす決に「篇名」致一場満てい於

督 監 弘 南 印 才 鬼

曉 義 宮 二 影 撮

小川秀麿

小宮一晃

近衛公子

助演

供

提



ネ キ 帝



# 新聞

# 廣告は電通

本社 東京 日本電報通信社

支 主  
局 ナル

南 北 釜 下 金 至 古 州  
 京 平 山 關 津 沼  
 舞 天 京 長 京 函  
 青 津 城 崎 部 館  
 巴 脊 幸 區 神 札  
 星 島 天 岡 戸 横  
 倫 濱 大 船 岡 齊  
 敦 口 連 幸 山 森  
 桑 上 哈 鹿 廣 仙  
 港 海 資 島 島 登  
 經 廣 臺 大 総 長  
 府 東 北 分 山 野

大阪市北區中之島三丁目

新 傳 代 通 運 識 大 阪 電 報 通 信 社

電 掛 五 五 九 九  
 本 局 一 九 一 六 六 三  
 九 九 二 一 五 五  
 六 〇 三 八 四 三  
 三 二 六 六 〇 〇  
 九 九 二 〇 二 五 四  
 二 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇

スピード時代の

御化粧には是非

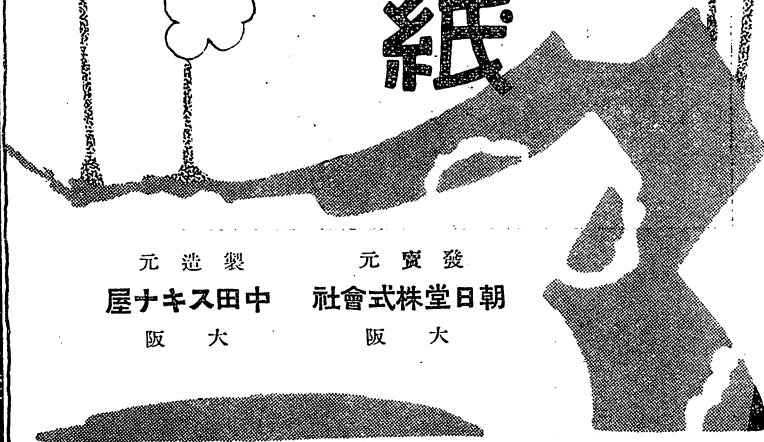
「スキナ」のアブラ取紙を……

# スキナあぶら取紙

各地の化粧品店石鹸店に於て販賣、尙道頓堀  
各座、賣店にても常備したして居ります。

元 造 製  
屋ナキ又田中  
阪 大

元 賣 發  
社會式株堂日朝  
阪 大







“榮光の蔭に泣く”

石井の八重梅  
小織の着屋新太

“女人禁制”

賀天  
川外の  
のの  
波高  
野橋

・劇庭家・

月二・座花浪



“目と耳と口”

十吾の惣吉・天外の幸一・石井の百合子



“風車”

天外の酒井・村田の妻さよ子

賀川の酒井の友人吉川





👤 "白い手の指輪"

十吾の濱口・小織の小田切・石井の小奴

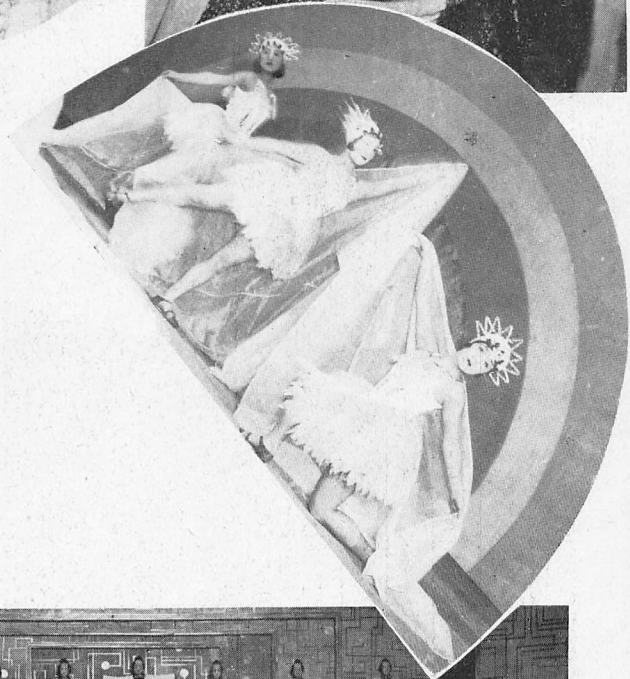
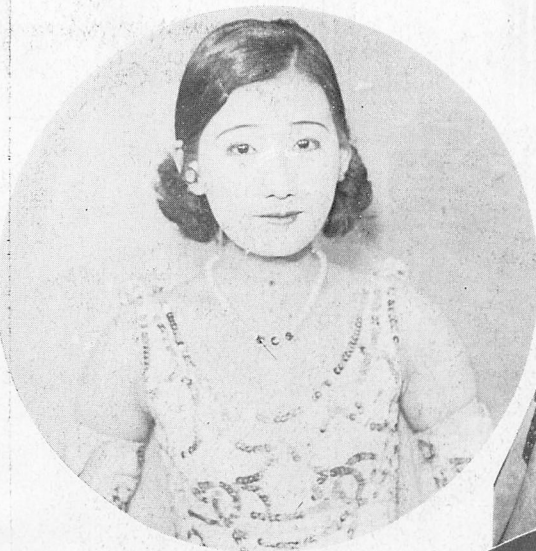
浪花座 二月興行……松竹家庭劇



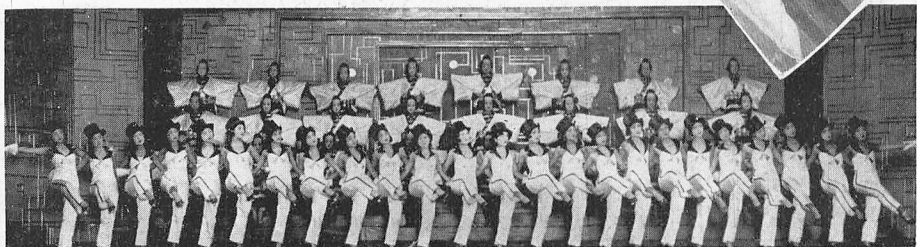
野球 "榮光の蔭に泣く"

秘話  
天外の中川・石井の八重梅





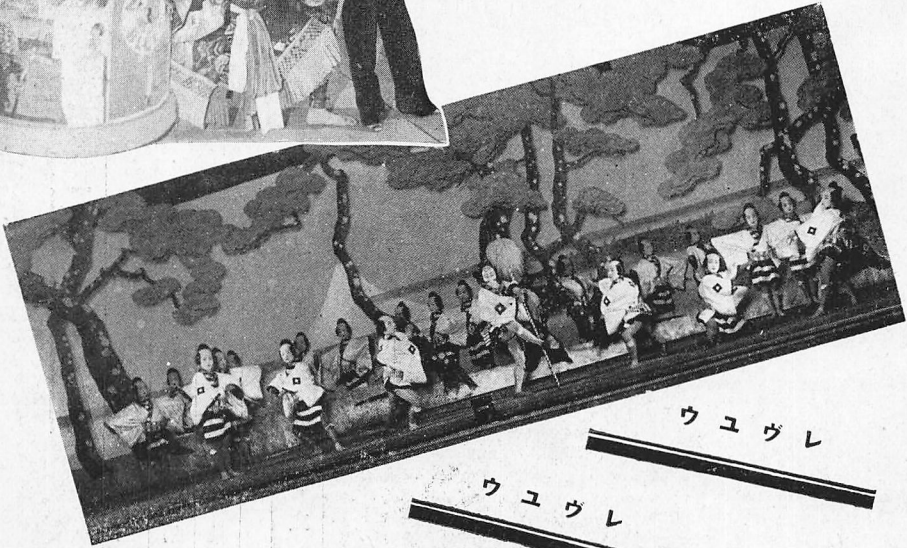
ヴァニテイ  
フエア



(上右) 帝キネから返り咲いた香椎園子の「戀の緋鹿子」お七の醜姿・(上左) 松竹ガクゲキ部の中堅... 吾等のタキ・スミ・(上左) 唄と踊「ジャズダンサー」和製ジョセフィン・ベエカーのエロ・ダロ・(中右) 春...

# 松竹ガケキ

竹松  
大ウユレ



ウユレ

ウユレ

春「頭春」の踊・(中左)「暗黒街」これは不思議、アバツシユと石川五衛門の出会い・(下右)足・足・足の舞列、足の魅惑「ファイナル」(下左)「うかれやつ」の寛潤振り、そのかみのおもひで。



一の谷嫩軍記

平山武者所

玉織姫

熊谷次郎眞實

玉幸

扇太郎

榮三

二月・文樂座



鷗山古跡松

舞臺面

中將姫

文五郎



木賊の秋

村長村井信造

妹 拵 六

村人馬吉

藤 本

富 士 野

山 口

二 月 ・ 角 座





南國太平記

仙波八郎太	妹深雪	仙波小太郎	盆滿休之助
伊川	福岡	山口	辻野



愛妾 右衛門  
家老 右衛門

伊和 歌浦  
川



仙波 小太郎  
庵主 義觀  
巾着切 庄吉

小新 山

波田 口



右から梅田の千代造  
石河の妻吉・木下の  
おきん・藤村の吉どん



木下のおきんと石河の妻吉

浪花座正月興行  
神松竹劇場二月興行

成美團

鳥江鏡也新作

堀江物語

(妻吉自叙傳より)

堀江物語



三好のお榮と  
伊志井の巳之助



都築の伴次郎と高田の龜太郎

# 御饗料理

蘇架

お芝居の

お帰り

せいおま

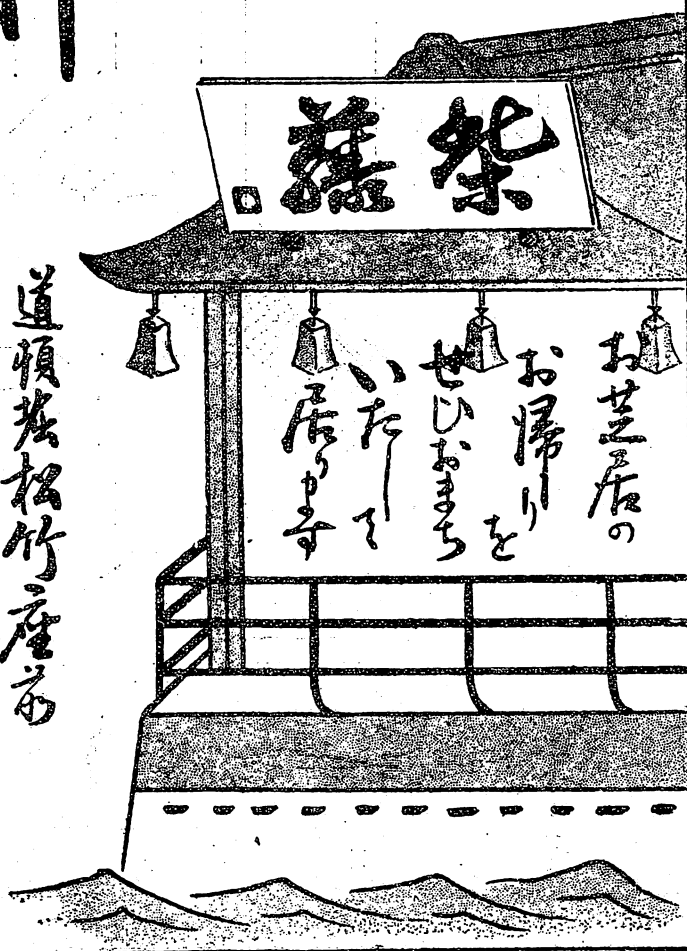
いた

居り

道頓堀松竹産前

電話南

四九四  
八八五  
四二〇



の地心使なかや爽

# 磨歯煉ブラク

力ある健康の歡  
びは朝と食後の  
クラブ歯磨から



## 子刷歯ブラク

ロルセ産國  
の柄製ドイ

誌雜・秀研劇演・刊月

二月號

# 通類編

第六年

第五十三輯



# 石切梶原雑話

高安吸江

二月の中座は久しぶりに石切梶原が出るそうですが、此狂言は御承知の如く長谷川千四、文耕堂合作「三浦大助紅梅袴」の三段目の切でありまして、京では安永四年、江戸では寛政七年初演となつて居りますが、大阪では享保十五年二月十五日に竹本座の人形浄るりに出た其年の八月十四日から道頓堀の角で演つたのが始り、今から丁度二百年前に當ります。

次で明和七年六月に文政四年三月、これは三代目中村歌右衛門が古今の大當をとつた時で、此時から「梶原平三紅梅袴」と改題しました。其後玉助となつた此歌右衛門梅玉は天保九年五月の中芝居で此役を生涯のお名残として同七月にあの世へ旅立ち、翌十年には其追善として養子芝翫によつて同狂言が上演せられて居ます。以後嘉永二年（七代目白猿）同七年（芝翫追善

として實子玉七の梶原）など、再々演ぜられて居るのでした。

元來此狂言は外題に見る通り百六歳の三浦大助とその一族を中心とし、それに平家を去つて源氏へ味方する畠山と梶原を入れ交へたもので、三ノ切即石切の場へ出る青貝屋六郎太夫は大助の庶子、娘梢はその孫に當ります。玉藻の前を退治せよとの勅をうけた大助が那須野の原に逗留中、里の女と契つて出来たのが此六郎大夫で、後の證と残しに置いたのが問題の名刀でした。梢の許婚の夫文藏は石橋山の戦に侯野と組んで討たれた眞田與市の家來で、此與市も大助の孫にあたるのですから重々深い因縁になつて居ります。

此場の主役梶原平三景時は正史に據ると、頼朝の歿後まもなく頼朝の諸臣六十餘人の彈劾によつて鎌倉を退去し京へ上る途



中、駿州高橋の邊で一族郎黨全部殺されても、積惡の報と更に同情するものも無い程、奸佞邪智の定評ある者ですが、和歌を嗜み風流氣が多少あつたせいか千本櫻の鮎屋では立役の腹で使はれ、此石切となるとモウすつかり善良な役柄になつて居るのも妙です。デモ流石に氣が咎めるかして「當時平家に與すれども、先祖の古主に返忠（中略）假し夫故に世に疎まれ、佞人讒者と指さ、れ、死後の惡名受けるとも、いつかないかな厭はぬ所存」とか「鎌倉殿の政務の沙汰、萬の下知をなしつる故、名をひぢく」と云はうれど、誠は武士の鏡とも、世に輝きし男子也」など、作者も中々辯明にとめて居ります。然し他の信賴を裏切つて鑑定を偽り、ウマ／＼と名劍をせしめる狡猾さ、それも主親などの爲め是非必要の品といふでもなく、ほんの私情にその本性を隠しお、せぬ自然の妙には誰しも思はず微笑を禁じ得ないでしやう。

丸本によれば場面は早合寺の小松原「弓箭取る身は殊更に歩みを運ぶ」絃掛の觀音ですが、此れを八幡宮にしたのは上述の歌右衛門で、今日でも吉右衛門は此背景を用ひて居ります。但し理屈は別としても興がつまつて背景の壓迫を感じ、小兵の役者などは事に貧弱に見えて損ですから、旁原作通りの方がよいと思はれます。

此歌右衛門の時は前にも云つた通り、大明神とか親玉とか、今日ならさしづめ大統領の連發でしやうが、とにかく非常な好

評でしたが、本文にある此馬場先の松風を釜の沸りと聞做しての茶の湯、此れは北野大茶湯の様を見せた趣好でしたのを、茶は東山以後の遊びだとの理屈から酒にかへ、幕切が淋しいからと大庭、俣野が出て軍謀を問ふなどの蛇足を加へました。西澤一鳳の傳奇作書に載て居る當時の古老魚大翁の説によれば「衆評の良いのは官同前で、此方の評は論にかゝらず。すべて小利口で大名とは思はれず、與力同心の心持である」など、さんざんであります。

尙一鳳は「梅玉の狂言となりて仕様を知らず、星合寺を官となし、手水鉢變じて駒犬と化す。役者はもとより見物の目も其時々にかはるなるべし」と附記して居ますが、此駒犬を切つたのは七代目白猿で、此れは嘉永二年九月角での事です。何しろ役者後見惣親玉の稱ある成田屋海老藏のことで、道具萬端、大名は大部屋一流惣出、舞臺は古今の花やかと頗る高評ではありましたが、此駒犬を切つた事と、籠の梅を手折つて本形での立廻の内「粹八代目へ傳へ、未代家の譽とせん」といふ臺辭だけは悪評で、北條は九代だが梶原の八代は無い筈と笑はれたそうです。

笑ひ序にお話しますが、此狂言打上の日に土間から白い襦袢に紺足袋の立出の者が舞臺へ飛上り、白猿に向つて「殺さなければぬ事なれば、彼を助けて我を殺せ、義によりて捨る命は惜うない」と大見得をきつたので見物一統大笑だつたそうです。

それから二ツ胴ですが、此正月に出た青江下坂の大曼寺堤と同じ文耕堂の作で、今度は真に二ツ胴を試めその偶然だから面白い事です。昔は罪人の首を切て其切味を鑑定しました。かの満仲の鬚切や膝丸などが其最古の例です。ズツ後に織田の家臣谷大膳亮が鷹野で思ひ附いて土段据切といふ事を始めてから、慶長前後はよほど流行しましたが、徳川期になつて將軍の佩刀を試めす据物切と云ふのは中々嚴格な形式の下に行はれたそうで、後には据物家なる専門的名稱さへ出来ました。

二ツ胴、三ツ胴、釣胴など、種々に試みられましたが、これ等の記録は何れも切味の標準として尊重せられたものらしく、私が先年知人の許で拜見した大刀には、延寶頃の日附で二ツ胴其他を幾回試みたと麗々しく刀身に刻してありました。

しかし殺伐な武家時代とはかく、市場の飾を見るやうに血腥い胴切を舞臺の上でマザ／＼と見せられるのは、あまり愉快なものではありません。幸に近來は出来るだけ手際よく屍體を隠すやう努められて居ますので大分助かります。

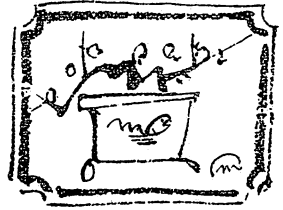
デ此二ツ胴と手水鉢で梶原が二度手練を見せますが、一ツは眞の試し切で腕のびえを見せるのだから先ツよしとして、一ツは尺餘の青めの石、いかに名劔、いかな切人でもスツバと切れる筈もなく、それを切るのが虚實の氣合でつまり狂言綺語の妙がそこにあるわけです。それでも此切る形にも種々で、或は後ろ向きになつたり、又は遠慮してか端の方をチョッピリ切るも

のもあり、それに業々しく下げ緒を柄に巻きつけるなど、何れも細工過ぎて器が小さくなりますが、やはり此處では堂々と正面からやるに限りません。

鷹治郎の梶原は古い處で明治二十九年十一月に一回演つて居ます外一寸見つかりませんが、又本人に尋ねてもわかり兼ねました。此時は始め中座で鹽原多助を勤めるについて小平の役で齎入と意志の疎通を缺き、遂に浪花座の我童(今の仁左衛門)の一座へ入りましたが、外題が忠臣蔵に石切と廓文章で、鷹治郎は判官、定九郎、竹森喜多八、梶原、夕霧と勤めました。此時の判官師直の葛藤がやがて鷹仁兩優の不和の基となつたのであります。

最近では大正四年十月(浪花座)同十五年正月(中)から今回が三度目です。盛綱や實盛に比べてそれ程の深味はなく共、擧る表面的な技巧本位とも云ふべき荒唐な歌舞伎劇の一標本として、鷹治郎の如き典型的な舊劇俳優の演出によつて更に興味ある記録をつくることでありまじやう。





# 鴈治郎の切れ味

『石切』からの劇界幻想

富田泰彦

歌舞伎から二三の人々が、叛旗を翻して新興劇へと走る——それが如何にも新人らしく世間からもヤンヤと騒がれる——アさうした現象は結構なことであると云つて終へばそれまでですが、眞の歌舞伎道から見て、是れを藝術的に批判する場合に果して勝者であらうか、敗者であらうかと云ふことになる、私には大に異論がある積りなのです。

それは一體何故か、誰しもこの私議を謬見なりとして、咎めることでせう。——それほどに大向う受けのせぬ迷説？を前提として、鴈治郎の「石切梶原」の價値を、一般歌舞伎愛好家に吹聴したいのです。

勿論歌舞伎の本質を廣義に解するならば、そこに見解の分歧

點も、ハツキリしないであらうが、勢くとも歌舞伎の教養を受けながら、時代の潮流に捨身となつて、抜手を切らうと云ふことは、表面如何にも、華々しくもあり、悲壯なやうなやうでもあるが、卒直に云へば歌舞伎の落伍者であるとも云へぬことはないでせう。

所謂マルクスボーイのやうな、生嚼りな熟しきれない思想と、その實生活とが矛盾してゐるやうな歌舞伎役者が、今更イデオロギーは、何うの、新興劇は斯うのと、開き直ること既に、滑稽な世間師を見るやうな心地がするではありませんか——勿論脚本の主題とか、その人物の道德觀とかには、近代人の相容れられないものは、あるにはあるが、その代りに完成された古典藝術としての貴さが、演者の力量の如何に依つて、猶我々の胸

をうつ感激があるのです。

歌舞伎は、今更らしく開き直るまでもなく往昔民衆藝術として、發達したものです。私達の祖先は、皆その精美に魂まで打ち込むほどに陶醉し、讃仰し、而して正しき評註（クリティカル・ノート）さへ心得てゐた。それなのに、それなのに今の民衆の歌舞伎に對する敬養のなさ加減——映畫にしろ、レヴェウにしろ、謂はゞ一種の見世物として大衆の興味を繋いでゐるのです。

趣味の墮落（尤も時代がさうさせた）と云へば、映畫ファンなどは、ムキになつて怒るでせう、併し何んと云つても、歌舞伎は映畫よりも難解である。——それだけ好尚であり、高級です。だが人々には向上心を持たぬものはない。我々の生活を豊かにしようと云ふ念願、さうした努力は、要するにブル的生活への欲望であると思ひます。従つてその趣味性も常に昇進することになります。

映畫よりも、新劇よりも、歌舞伎はハイクラスなものであるだけに、藝術的である要素は多分に持つてゐる——是れは我國民性に立脚しての斷定ですが——尠くとも映畫の如き科學的な効果をかつてゐないだけでもです。さうして趣味性は一年生が

ら二年生へ、三年生四年生と進むにつれて、より藝術的なものを要求することは、寧ろ當然の趨勢と云へます。私の歌舞伎不滅論と、名優尊重主義とが、即ち、こゝから出發してゐます。

街頭の三文畫家の描く鯉も、昨年の院展で名高かつた川端龍子の「魚紋」も、竹内栖鳳の松魚も、それらに表現意欲は持つてゐるが、その製作品の上での、氣品とか、迫真力とか云つたものに、恐ろしい懸隔を持つてゐるようと思ひます。鯉位は誰でも描く、だが其處に自と、斯うした大家の筆觸とに違ふものはなくてはならない。

それが藝術價値なのです。

早い話が鷹治郎と、猿之助とに「石切梶原」を競演させたと假定して下さい。——而して本格的な歌舞伎に對する批評眼を以つて見て下さい。「アジアの嵐」のやうな映畫の粉本を以つて舞臺に再製——ぢやないイミテーションする器用さは、今の若い歌舞伎役者に多少は持合せてゐても、鷹治郎ほどの條件の總てに完備した「石切梶原」の再製は、鳥渡覺束ないだらうと思ひます。

三宅周太郎氏は嘗つて「四人の石切梶原」と題して、吉右衛門、羽左衛門、鷹治郎、故又五郎の四人に就ての比較評を試み

て居ます。無論吉右衛門黨の氏のことであるから、鷹治郎の演出を實際に見たのであらうか、何うかと思ふほどの獨斷的な批評の下に、散々やツツけて、吉右衛門第一と云ふ折紙をつけてゐます。

私は、今こゝにそれを難詰すべく、一々その條項を擧げるの煩にも堪えず、また實際人々には、各自の立脚地もあるし、その俳優に對する好き嫌ひと云ふものがあるから止むを得ないが果して鷹治郎が、吉右衛門に劣るであらうか、敢てこゝに鯉の例を引くまでもない。

吉右衛門は、大正十五年十一月中座で、この「石切梶原」を出してゐるから、猶好劇家の記憶にあるものがあらうと思ひます。

「石切」は芝居としての内容とか、所謂腹とかを主眼にしない、技巧本位の芝居なのでせうか、「一眼二調子三に顔」と云ふ三宅氏が、古い歌舞伎役者の標準を引用して、鷹治郎の舞臺が——その目千兩以上に働く、心持の表現が、不可ないと誰か信じられませうか、昔、團菊左の大歌舞伎で「梶原平三情石切」と名題を据えたほどの、この星合寺の演出に、腹を無視して可いのだらうか、「劍も劍切り手も切り手」の乗り地に、劍の舞？と見做すほどの輕薄な動きを見せた吉右衛門なればこそだ——

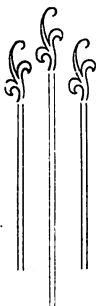
百聞は一見に如かず。——天下一品と折紙を付ける鷹治郎の今度の舞臺を見て、成程本格的な歌舞伎の王座にある優としての藝術價値を知つて貰ひ度い。

盛綱や實盛であれだけの至藝を示してゐる鷹治郎の梶原は、刀の鑑定、俣野との應酬、二つ胴の試し切りの型、物語りからクライマックスの石切りへと、是れほど歌舞伎情緒の豊かな、さうして一抹の哀愁さへ浸み出ながら、潔い、痛快な狂言は鳥渡他に見當らない。

私は飽迄斷言して置きます。恐らく鷹治郎としては、昭和六年度の劇壇を飾る唯一のものであると云ふことを——。

私は最後に云ふ——歌舞伎の價値は、その舞臺から醸し出される感激の容積です。その名優から描き出される神秘の迫力です。

(六・一・二八)



の

淨

化

# 鷹治郎丈の『石切梶原』

入 江 來 布

激

感

「梶原平三 試名劍」即ち「石切梶原」は、まことに如月芝居らしい芝居である、たとへば星合寺の寶前に馥郁たるあの紅梅白梅のやうに、華やかで、氣高く、さうして引き締つた、心持のよい芝居である、これを鷹治郎丈の藝より觀ても、その

特技として「紙治」や「梅忠」の軟かい心中ものに昭應して更によくその氣品の高い特徴を發揮する爽快なものである。これからの鷹治郎丈は「治兵衛」や「忠兵衛」型の軟派に於てよりも「盛綱」「熊谷」「主税」型の硬派(?)に、より多くの旺盛期を迎ふべきであらうから、その方面に於て「石切梶原」は最上級に適應したる好壇場である。

「石切梶原」の芝居が、最もいゝところは、恰もそれが如月の季感のやうに、きり、と引締つてゐることである。趣向が淡泊で潔ぎよく、滯滞したところがないことである。この芝居は矢張り舊劇の通有性を免れず、見物の手に汗を握らせな

がら、途端場で、倏ちその意表に出て、形勢を一變し、痛快な團圓を結ぶといふ例の行き方であつて、即ち二つ胴試し斬りの犠牲に運命は定まり、舞臺の上の六郎太夫、娘梢、見物みなく、はらくとさせて置いて「劍も劍、斬り手も斬り手」で眞づ二つと思はれた六郎太夫が悠然として生死地を替へる、その機智的構想、それに所謂白づら、赤づら型の對照といふ定石、それ等を例の劇的義氣で貫いてゐる、この芝居の柱立は類型的の機構で來てゐるが、その主旨には大體に於て荒唐無稽の無理がなく、また複雑難解な因果物語りなども絡まらずに、さらりと來てゐて、さうして、たしかに見物に訴へる涙と義氣とを十分に持つてゐる。

芝居の感激が理に落ちてはならぬと同時に、無稽や假空から無理に強要されるものであつてもならぬことは勿論である。芝居の芝居らしい感激、もつと理想を言へば、その感激が一度淨化(勿論芝居的に)された感激であることが最も望

ましい。

「石切梶原」の構想と、その舞臺から受ける感激は、そのすがくしい點に於て、その爽明な點に於て、その類型的でありながら洗練され、緊張されてゐる點に於て、正に淨化された感激と言つてよい、この點では恰も今度一所に上演される「勸進帳」と好一對の特徴をもつてゐると言つてよい、即ち「勸進帳」が能の姉妹劇であり、一種の樂劇でありつゝ、尙その感激に芝居特有の感激、淨化された芝居らしい感激を十分に含蓄してゐるところが十八番の中に於て他の荒事型のものとの趣きを異にすると共に「石切梶原」と一脈相通するものがあるのである。

「石切梶原」の所謂淨化された感激は「石切梶原」といふ狂言そのものに於てのみならず、主演鷹治郎丈にとつても大に意義のあるところである。

鷹治郎丈の演出から生れる感激が多方面であることは前號にも書いたことであるが、而もそのいづれの面の感激であるにせよ、それが淨化されることの望ましさは改めて言ふまでもない、丈の期するところの、或ひは好むところの一種の國粹的義氣が一時は「助六」の新作のやうな方向に開展しかけた時であつたが、それ等から出る感激には、尙どうしても、「石切」の梶原に於て見得るやうな淨化の度は求め得られない、これは狂言の徳もあらうが、鷹治郎丈の梶原それ自身に

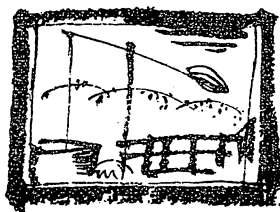
於て發するところの淨化である。

吉右衛門丈の「石切梶原」も先年觀たが、その時はまことに簡素な舞臺裝置で、溢い演出であつた。下け緒を巻く條りその他歌舞伎らしいけじめをはつきり大きく出しながらも溢い演出であつた、それにはまたそれとしての適はしさがあり、そこにはその淨化がたしかにあるが、鷹治郎丈の華やかで而も如月春寒の緊張を蒼蒼する特有の淨化的感激はまたそれとは別様である。

それは名劔よりも名手のために下け緒を巻かぬといふ風の形式の異同ではなくて、言はず持ち味の淨化發現である。鷹治郎丈の持味、その持味の一面が淨化されて表現されるとき獨壇の妙境が顯現するのである。

今度の「石切梶原」で尙興味を惹くのはその對役に好配を得てゐることである、幸四郎、延若兩丈の大庭と俣野を向ふに廻したのも面白い好敵手である、市藏丈の六郎太夫は常石として、我輩丈の梢、魁車丈の駒平、長三郎丈の四人呑助は三優三色に期待されるものがある、中心梶原を圍つて如何に映發する歟。

如月の中座には爽快な芝居が見られるであらう。



# 石切梶原の演技

高谷伸

俗に判官びいきといふ言葉があるが、いつも義経に對する同情から敵役に廻されてゐるのが梶原父子である。けじけじとまて言はれる梶原平三も立役になつてゐる芝居が全然ないかといへば、さうでもない。並木正三の「和布刈神事」と文耕堂千四合作の「三浦大助紅梅袴」では立派な立役である。

「三浦大助紅梅袴」は俗にいふ「石切梶原」を三段目の切とする淨瑠璃で、原作は享保十五年六月、和布刈神事の梶原が老年なのにひきかへ、これは壯年の平三景時、梶原での唯一のよい役で、古くは三世歌右衛門、七世團十郎（海老藏）先代左衛門、今では鷹治郎、羽左衛門、吉右衛門の得意とする所である。

舞臺は原作によれば星合寺である。吉右衛門は嘉永二年に海老藏の改めた型によつて鶴ヶ岡八幡宮の場で演じるが、原作によつて寺とするか、場面を好んで官とするか、それは演者の心次第に任せる。

紅白の釣技美しいのが今の舞臺であつて、これは紅梅袴の梅から出た解釋であらうが、本文には「時は彌生の」とあり、「星合寺の小松原」とあるから、櫻か松とも考へられるが、舞臺効果の點も考へてそれはどちらでもよろしとしよう。

さて、梶原の演技である。普通は向ふ揚幕から出るのだが、鷹治郎は舞臺正面から現れる。今では前半の梶原と大庭との間答を略して、六郎太夫が先きへ出るし、鷹治郎があの通りの立派な柄だから、破格な演出も一つの方法である。

刀の鑑定を頼まれ「たとへ誰人の所持なりとも文は鏡武は劍と二つに止まる日の本の神寶、粗かにはなりがたし」と、紙を叩へ刀を抜きかけ、膝の上へ柄を下にくつと刀を立て、鞘を上へ抜き取ると共に、左の袖の上で、いろいろ見て、「美事」と紙を落すと同時に膝を叩く所が、先づ梶原の仕所である。

次に、俣野を「無禮であらう」と、たしなめる所だが、羽左



衛門は合引にかけ兩手を袴にかけツケ入りの見得を俣野を睨んでするが、吉右衛門は坐つたま、左手の袖を突袖のやうに返して睨み、鷹治郎は更らに、さらりとしてゐる。

いよいよ試し斬りと決り、床の顔面をたむけて梶原も袂に露の、チリガン」と腹を見せる所は、羽左衛門の合引に掛けたま、ほろりとして右手をすべらせ、はつとしてその手を左の袖口に入れる型が、よくこの氣持を出してゐる。

試し斬りの「拜み打ち」の刀の振りかぶつた型は、誰のを見ても美しい繪である。吉右衛門は後へ下つて肩をぬぎ、刀の柄を巻き、悠々と刀を抜き、ドレと刀に水をかけさせ、水の滴る刀を右横に掲げたま、正面へ出て、獨特の線のうねりを見せて足を割り兩手を大きくひろげて振りかぶる。本釣が入る。花が散る（櫻のやうで變だが）えいと斬りつけると、押へつけるやうに腰を落し、そのまゝ上手へ寄り、大庭兄弟を一瞥し、右足を一つ踏んで「にがりきつたる」の刀を拭き上げた見得になる。羽左衛門も吉右衛門と大同小異だが、吉右衛門程にキツチリ乗らない。鷹治郎のもそれ以上絃につかない型で、刀を振りかぶり兩足を割つて腰を落し二つ胴に近寄り、氣合をはかつて一歩踏み直してえいと斬りつける。そして「にがりきつたる」の型が、あまりはつきり印象に残つてゐない。或は刀を拭はせたのではないか。今度見直したいと思つてゐる。

二つ胴を四人だけ斬つて六郎太夫を助けるのは、淨瑠璃らし

い技巧だが、斬られたと思つて茫然としてゐる六郎太夫は昔の三柳大五郎が巧かつたと傳へられてゐる。落膽して切腹しやうとする老人を制して、本心を明かす梶原の石橋山の物語は、各人各様の型どころか、文句まで變つてゐるが、鷹治郎では「首をか、んとせし所」で開いた扇の兩端を持つて頭の背後にあてる形が目につくし、羽左衛門は「白旗云々」の所で扇を逆に持ち片手を擧げた見得を仕所としてゐる。そして、吉右衛門は「平家の軍勢追かけ來り」で扇を口にあて、目で父子を制し、周圍を見廻す所が變つてゐる。

さて、問題の石切だが、鷹治郎羽左衛門は正面を向いて切ることが吉右衛門は背を見せて切る。手水鉢の向ふの狭い所で、ごそごそしては困るが、舞臺に餘裕のある限り、正面を向いて切るのを筆者は本格と信ずる。

吉右衛門が裏向きで切つたのは、二つ胴の切り方と變化を見せる用意からであることは察せられるが、二つ胴の時は、袴の兩肩を脱ぎ、石切の時は片方の肩を脱ぐといふ定式の變化がある以上、特に裏向きにする必要もなく、吉右衛門が手水鉢の一端に帛紗を置き、トン／＼とさがり足を割ると共に、飛びかゝつて切るのは、霸氣満々だが思慮不足のやうに見える。羽左衛門の石の割れ目から飛びだすのも軽々しい。といつて、鷹治郎の刀の脊で見當を計るやうな料があつて、刃をかへしてバツと切るのも細工じみる。さうなると、石切の難かしさが、よく判

るが、それらの型の長を取り短を捨てた演出がよいのであらう。それに父娘の姿を水鉢に映す水鏡の位置に、梶原が父子を並べて水鉢の横に立つ型と、父娘を水鉢の左右に別けて中央に立つ型とある。水鏡で二つ胴を利かせた作者の趣向から言へば並べて立たせるのが理窟であるが、畫面の効果から言へば左右に別けた方がよい。

石を切つた刀を見て、又こほれの無いのを確めた梶原の満足「劔も劔」「切り手も切り手」の感極まる場面。これも理窟を言ふと變にお世辭を言ひあふやうだが、語り物とした作者が書いた對句の妙、梶原と六郎太夫とに扮する俳優の呼吸で、充分面白い芝居のできる所である。

幕切は、鷹治郎のは大庭の家來が窺ひ寄つて刀の鐙を取るのを、そのま、錯であてボンと倒れるので父娘を顧み扇を開いて成駒家得意の笑ひで幕になる。

吉右衛門や羽左衛門は幕外がある。羽左衛門も大庭の家來を出す、當てるとすぐ花道七三へ来て刀を右手に持ち左手を突袖のやうにした見得をして幕を引く。あとは刀を左に持ちかへるだけで自分で持つて入る。吉右衛門は翳みを使はず「兩人來れ」で花道を行くと幕になる。刀は六郎太夫に持たせて、兩手でボンと袂の袴の鬘を叩くのが鳴物のか、りて、突袖のやうにした袖をかへして悠々と入る。この三者を較べると、鷹治郎のやうに幕外のないのは淋しいから、吉右衛門の引込が一番立

派な芝居になつてゐる。

しかし、鷹、羽、吉三人の石切梶原を較べると、それぞれ一得一失があるが、故人でもあながち名型ばかりを残してゐない海老藏などは、狗犬祈りといふ珍型を見せし、先代左團次は物語に肥前節の合方を使つたといふ事である。

殊に狗犬は滑稽だが、梶原一家はとかく水鉢に縁があつて水鉢を切つて刀を掘りだしたり、叩いてお金を出したりする。

この石切の梶原もよい役だが、六郎太夫もまた難役である。丸本全體から見れば寧ろ六郎太夫の方が重い所もある。娘梢のしほらしさもこの一段を彩る紅一點の花である。お定まりの伊豫染の着附に、きり、と裾をからけた姿も美しい。

大庭侯野の兄弟も梶原に劣らぬ程の貴族の俳優が演ることになつてゐるのは、文化の頃當時の嵐吉三郎が兄弟に扮する役者がわるいので梶原の役を斷つたといふ有名な話でも窺はれる。

猶、此頃では原作にない奴が出るが、相當なよい俳優が勤める。大阪では縋子奴だが、東京ではブツサキ羽織の若黨めいた拵へである。これも時代物だけに縋子奴の方がよい。

あの大きな石を切るといふ趣向が、既に歌舞伎らしい嘘である石切梶原といふ芝居は、細かい寫實詮義より大味の歌舞伎らしさ、それが表はされた時、充分の面白さが味はれるのである。

石切梶原の錦繪美

倉田啓明



を求められたが、まことに早春の歌舞  
 伎には、ふさはしき狂言といふべきで

就中、鷹治郎の出し物として、  
 こゝもと数年振て選ばれたのは、  
 得意の「石切梶原」とある。  
 この狂言について、本誌から感想

がなあらう。  
 日、ゆめはづれる氣づか  
 ひなしといふ、心算計策で

正月、中座の狂  
 言は、少し寂し過  
 ぎたといふ世評で  
 あつたが、それか  
 あらぬか、二月は  
 鷹治郎、延若等の  
 一座に、東京から  
 幸四郎等呼び迎  
 へ、狂言も折紙附  
 の、大物の、代表  
 的歌舞伎劇を、ず  
 らり陳列するさう

ある。これは鷹治郎以外に、東京では、羽左衛  
 門、吉右衛門も十八番として屢々演じて、そ  
 れぞれ名譽の世評を博してゐるけれども、そ  
 の形とか、心理表現とかの點では、或は鷹治  
 郎に優るものがあつても、錦繪美のやうな、  
 堂々たる風核、押出し、歌舞伎劇の精華と  
 もいふべき、その舞臺姿の立派さに至つて  
 は、誰が何といつても、やはり鷹治郎の獨壇  
 場である。これは梶原のみならず、盛綱や熊  
 谷においても、おなじことが言へよう。

だから、大地を打つ槌はは  
 づれるとも、この誠立ばか  
 りは、ゆめはづれる氣づか  
 ひなしといふ、心算計策で  
 がなあらう。  
 就中、鷹治郎の出し物として、  
 こゝもと数年振て選ばれたのは、  
 得意の「石切梶原」とある。  
 この狂言について、本誌から感想  
 がなあらう。  
 日、ゆめはづれる氣づか  
 ひなしといふ、心算計策で

わたしは鷹治郎の梶原を思ふと、いつも故  
 人梅玉の青貝師六郎太夫を想起し、また、故  
 人雀右衛門の娘梢を想出す。殊に、梅玉の六  
 郎太夫に至つては、おそらく空前絶後であら  
 わたしはう。昔大阪で一度と、先年東京の新  
 富座で一度、前後二度見たが、新富座のが最  
 後であつた。  
 この「石切梶原」といふ芝居は、もちろん  
 文相堂の淨瑠璃「三浦大助紅梅靱」の中の一  
 節であるが、従つて、あの星合寺の場一幕だ  
 けを見ると、一般の見物には何だかよく筋が  
 わかるまいと思ふ。何故六郎太夫が、名劍を  
 賣りに來るのか、一身を犠牲にしてまで賣ら

ねばならない理由は何處にあるのか、姫梢といふのは何者なのか。

唯漠然と見てゐると、氣がつかないが、少し考へると要領を得ないところが多々ある。然しこれは淨瑠璃の全曲を讀めば、仔細にわかること、今その筋を話すと長くなるから省略するが、とにかく六郎太夫の娘梢には、眞田といふ良人があつて、その良人のために名刀を賣るのだ。

即ち梢は貞婦であり、六郎太夫は誓のため、一命をも捨てようといふ、天晴れ義心の勇なのである。

それはそれとして、もう一つこの作で面白いのは、他のどの芝居にも敵役に取扱はれてゐる、梶原平三景時が、この作に限つて、沈着にして思慮あり、仁義に篤い武士道の権化のやうに描かれてゐることである。そしていつもの景時らしい役を大庭三郎景親が演じてゐるわけだ。

また、俣野五郎景久といふ役も、歌舞伎にはよく出て来る役柄だが性急で憎々しいうち、ユーモラスなところのある、面白い人物だ。

この梶原、大庭、俣野の三人が、舞臺に並んだところは、宛然、古い版畫の豐潤さをおもはせ、豊國、國貞あたりの大首の錦繪美を見る心地がして愉快である。

だが、この芝居が出ると、梶原方、大庭方の織物の金ピカ上下の多勢の侍が、舞臺で一時間あまりも無言の行をしなければならぬのは、相當の名題俳優にとつては、甚だ辛いことだらうとおもはれる。

いづれにせよ、錦繪美ゆたかに、人情味に富んだ、この劇で、鷹治郎が堂を壓するばかりの、風格をもつて、悠容迫らざる寛達な腹藝に、名刀の切れ味を見せてくれるにちがひない。

その上、幸四郎が大庭を、延若が俣野をつき合つてくれれば、更に錦上華を點するものがあらう。——今少し纏まつたことを書かるとおもつたが、新春以來風邪のため臨床のためにたゞおもひつくすまゝを、そこはかとなく書きつけた。讀之。

# 「ギブス」固煉齒磨

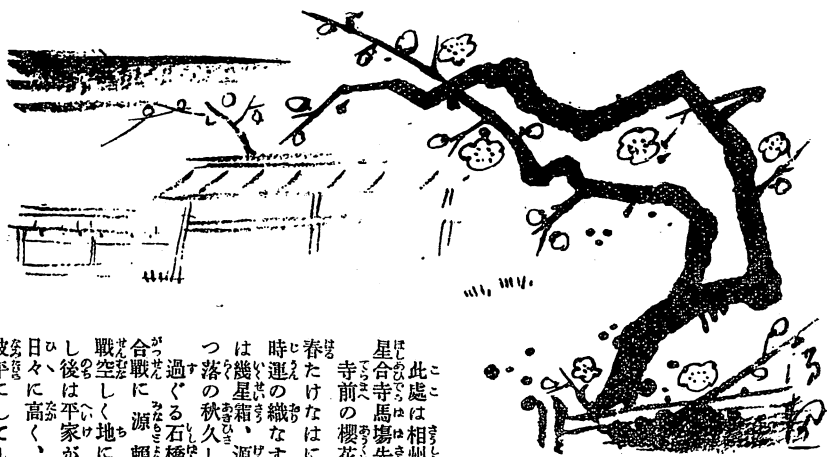


本品を使用すれば、幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのだからです。毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、すれば氣分は爽快になられます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店薬店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹圓 金七拾錢 大形中味 壹圓 金六拾錢  
小形 壹圓 金四拾五錢

ロンドン、パリ、ブリスベン、  
ライオン、デトロイト、  
日本代理店 株式 横山商店  
東京豊後町三番地



此處は相州鎌倉  
 星合寺馬場先  
 寺前の櫻花正に  
 春たけなはにして  
 時運の織なす華紋  
 は幾星霜、源家ほ  
 つ落の秋久し  
 過ぐる石橋山の  
 合戦に源頼朝一  
 戦空しく地に敗れ  
 し後は平家が隆勢  
 ひ々に高く、四海  
 波平にして。

中座・二月上演

# 梶原平三試名劍

大和撫子

東國に威を振る大庭三郎景親、舍弟侯野  
 五郎景久、黒戸、錦野、大島等、今日は掛  
 弓に打興じんものとして星合寺にさしかゝ  
 る。

彼等武人の常として、過般石橋山の合戦  
 に武功の花を咲かし、持参のさゝ筒の口を  
 切つて酒盛となる。

世の中のとへに洩れぬ身の上や、寶  
 は時のさしあはせ、惜しまぬも亦娘故  
 老が一途の思ひ川、深き心は眞焼の刀  
 たずさへ二人づれ。

向ふより青貝師六郎太夫、娘の櫛出で來  
 る。

「ハイ、恐れ乍らお殿様へお訴申上ま  
 する。此親爺めは、帷子が辻に住居いた

す、青貝師六郎太夫と申す者、御所望下さ  
 れし所持の刀急に金子の入用が御座りまし  
 て参りました。刀を召し下され様なれば、  
 有難う存じまする。」

ト手をづかへいんぎんに頼み入る。  
 それと見るより大庭三郎、其請を入れ刀  
 を求めんとす。だが舍弟の侯野五郎は兄の  
 早計をさとし、一應刀の鑑定をためさん事  
 を言上する。大場も成程と合點にて弱くう  
 なづく。

此時梶原平三景時下郎肩平をいざなひ通  
 りかゝる。此の儀に暫し誘はるゝまゝに立  
 居して六郎太夫が所持の刀の鑑定を所望さ  
 れる。

梶原一度は辭したれど、再三の頼みに今

芝居物語

は辭もならず、乞はるゝまゝに紫光一閃その無名の銘刀の鑑定をなす。

「見事！」

「梶原も覺えず知らず打まもり、と梶原平三が及ばず漏らす賞嘆の聲に、詞のはぎも、さすがの目利き、大場も殆んど機嫌の體。

梶原刀を元の鞘に納める。

「御自分が左程迄に御賞美あれば確かな道具、某も大慶く、コリヤ親爺、其方が願に任せて刀は求めてくれる、して價は如何程なるぞ」

と大庭の言葉に、

「コハ勿體ないお詞、先程も申しました通り急に入用の仔細あつて金子の望みは、のう娘」

つじまる金の三百兩。

「おゝ三百兩とは真い出やう、コリヤ家來共彼の者へ金子をとらせ。」

「はアーと答へて近習の、六耶太夫の前に差出す百兩包三つ。」

「娘よるこべ願は叶ふた」

「とゝさん」

「えゝ有難う」

「存じます」

「納めんとするを俣野五郎、

と、五郎は梶原の目利きに、一も二もなく買取らんとする兄の心安立が意に染まらず、試きぬ内は如何なる物の眞疑も分らずと兄に注言する。大庭も五郎の言葉尤もなりと、これにて囚人二人を斬り試さん事を主張する。

六耶太夫は氣の毒顔に、身にかゝりたる刃物の云ひ譚。

「イヤ俣野様、憚りながら切味の善悪は見分けにもあるべき事、その上に此刀二つ胴に敷腕は豆腐切るよりいとやすしと申傳へた我家の重寶」

「ヤア黙れ老ぼれ、おのれ三百兩の金子ほしさに見せつけりきらの拵へもの買かぶりそうでな、のぶとい奴め。

「呵りつけて云ひ破れば道も程なき牢役人繩附一人引立て、大庭の前に手を

つかへ、

「ハツ、大庭様へ申上ます、牢内多勢の内帳面吟味致せし所、死罪極まる科人は只一人、今一人の試し斬りは如何計らひませう」

牢役人石垣堅藏の申立て、大場も二つ胴の試し斬りてなければとて、親娘の詞も入れず

「サア父さま立たさんせ、とても叶はぬ此場の願ひ、よしな事を云ふて迄、妾が今の所へな——今の處へ奉公に行きさへすれば望みの金はツイ調ふ、苦に病まずと早ふ行つて話し合きめて下さなせいなア。

「勇むも親の氣を休め、衆行見えてあはれなり、六耶太夫は最前よりさしうつ

むいてゐたりしが、はたと手を打ち、

「おゝ夫れよ、大事の事を忘れてゐた」

と十年以前伊藤入道に此刀を見せた時、こゝろみ試せし二つ胴切りの極めの證文、娘婿は父の言葉に浮立ちていそぐと我家に急ぎ行く。後見送り老の目に。そして今一人を此の親爺奴にと、大場の前にいいぢり寄る。

「やい老ぼれ、うぬら空迷ふたか——試されては命がないぞ」

嘲り笑ふ大場の聲に、

千萬の寶より重きは人の命なり。されど義に捨つるはまた塵芥よりも尙輕し。義理に迫つた娘の雄儀、まじくと見ては居ら

芝 居 物 語

れず賣代なす刀は親の慈悲。伊藤の證文ありと云へるは皆偽り、娘が傍にあつては見殺しにはすまい此命、さすれば事の妨げと何を云ふても三百の金をやりたいばかりの親心、梶原の胸にすがるの愛しの情。  
 〆詞を盡し理をつくし、餘儀なく願ふぞ不憫なる。

大場も事の仔細に打うなづき二つ胴さへ切れたれば、娘の爲に悪しくはせじの誓言に、いざや、ともなふ死出三途。

目利きのそしり梶原が又も柄とる六郎太夫が試し斬り。

〆涙をかくす笑ひ願ふ心の内ぞいぢらし、娘の梢は極めの證文有處知れねばうろうろと此場のしぎを見るよりも。と梢は此場に走り出て、驚き魂消く矢來の竹。

「やア是りや父さまを誰が縛つた、何の科で——ござんすぞいなア」

〆情なや悲しやと垣にすがつて泣きわめく、六郎太夫は頭ふり上げ、親の慈愛の言葉の節に梢はそれと、さては妾の身につまる金のさいか、親の身に一つ身うけて刃の下梢は梶原に父の命乞ひに身

も輪廻業の深きに大庭侯野二人が梶原に迫る興味の縁の糸。玉も飛び散る流れの光に下ろす梶原の、あわやと見せて、六郎太夫がいましめの繩はほぐれてばつたりと二つに成りしは囚人の、六郎太夫親娘はあきれ暫し目もきよとく。

梶原平三景時	鷹治郎
大庭三郎景親	幸四郎
侯野五郎景久	延若
奴駒平	魁車
囚人吞助	長三郎
青貝師六郎太夫	市藏
娘梢	我童

深き情の梶原の、厚き心もそむかれて、大場兄弟居並ぶ武輩のともがら、そしり、面罵を後にして立去る愚人の後影。親娘が共に相抱き、泣めどもつきぬ梶原の胸の血の情は積もりて今も猶。刀にしろせし八幡八幡——ゆかしき源家の香り名と、問ふに答へ無む梢親娘。

石橋山の合戦に佐渡僅に七騎落ち、臥木のかげに隠れしも梶原が目さへぎりしやひそかに希ふ源家の武運。源家かたんの梶原景時、六郎太夫も梢も今更梶原のそれと計らぬ胸の内。とけて見合す互の意中。

〆二人を寫す影ぼうし、厚き尺餘の御影石丁と打てばどつきりと。ふりかぶりたる平三が下に手水鉢二つとなりて、親子伴ひ立ち出づる、家の苗字も矢はづの紋、今に其名を……

幕

# 九段目漫筆

西尾福三郎

假名手本忠臣藏九段目、畧して忠九と云ふ。單に九段目と云つただけでも、それは山科閑居の場だと云ふ事が通じる、事程左様にこの狂言は有名である。そして十段目と云へば、天川屋儀平忠義の場であるが、これは左程有名ではない。十段目と云ふと矢張り太閤記の尼ヶ崎の段に限られてゐる。太閤は秀吉の事、義士は赤穂の四十七人だけと昔の人も今の人も殆んど左様に思ひ込んでゐる。それ程有名な忠臣藏だから昔より甲論乙駁、今さら考證も研究も氣がさしてやる氣になれない。と云つてしまつたらそれ迄の話である。

近來舞臺で見る忠臣藏は、大抵七段目の茶屋場までであつてこの九段目は別に獨り立ての狂言として上演される事が多

の腹を見せるための一場である。鎌倉から京三界まで文字通り見物の前に腹の中まで割つて見せに來た本藏であるが、この場面の組立てには餘りにカラクリがあり過ぎて本ゾウに感心はいたし兼ねる。とは云ふもの、この一場に盛られた注意深い色彩美に到つては、數ある歌舞伎舞臺の中でも、恐らく絶妙の境地を示したものと謂へる。

〆風雅でもなく洒落でなく、と胃腸の床が語る通り、この有名な起句が九段目全體の氣韻を切實に暗示してゐる。

〆花に遊ば、祇園あたりの色ぞろへ云々の起句で始まる七段目が、これ亦心憎い程茶屋場全體の花やかな氣分を巧みに捕へてゐるが、その絢爛な場と、道行きの煽情的な風景詩と



の二つの浮きくした場面の後へ、風雅でもなく洒落でもない、癡つた好みの溢い一場を用意した作者の靈腕には、今更ら乍ら感嘆の言葉を發せざるを得ない。珍珠嘉香に満腹してから、お茶漬一杯戴くやうなサラリとした後味である。

全背景を白一色に塗りつぶす。その中に侘びしい茶室があつて、石刷り襖の黒地が強く印象されるが、それも地紙の代緒色で適度に調和されてゐる。雪持ち笹と洗はれたやうな竹の幹の鮮やかな感覺、其處へ純白の衣裳をきた小浪と、淺黄の衣裳をきた戸無瀬が表れる。芝居が進むに従つて、戸無瀬は金襴の襦となり又それが眞紅の紋付に變化する。お石の黒紋付が表はれると間もなく、本藏の鼠地の袷と寄せ切れ模様の着付、それから力彌の翡翠色、由良之助の茶色と、色彩の變化は人物の動きと筋の發展に連れて巧みに操られて、最後に正面の障子を明け放つと、雪の廣場に肅然として立つ二基の石塔の今迄様々な色彩の交錯に恍惚となつてゐた見物の眼は、突然この肅條とした光景の展開を見て一度に心を寒くするであらう。ト、撓んだ大竹が雪をはね返し障子を外すに到つて、その線と白の對照に、疲れた眼は最後の安息の色を見出してホツとした所で幕となる。

微妙に行き届いた色彩の配置が、渾然と統一されて運動し

てゐる快さ。それが無限に變化發展して、遂に枯淡清淨の極致に昇華させてしまふ技巧の素晴らしさよ。

筋の不合理も内容の空虚も、暫しは忘れ果て、心行くまで陶酔を恣にしたくなつてくる歌舞伎美の眞髓は、こうした色相の妙にあるのではないだらうか。

一篇の戯曲としてみた九段目のテーマには、前にも書いたやうに可なり批難の餘地もあるが、本藏由良之助戸無瀬小浪とこの四人の主要人物にそれぞれ程度の意味を持たせて本藏の尺八や袷袢天蓋を有効に使用した點、殊に「御無用」の掛聲で小浪の危期と本藏の出鼻を支配した技巧はうまいものである。

それから本藏が手負になつて述懐する中に「……か程の家來を持ちながら了簡もあるべきにあさのたくみの鹽谷殿」と云ふ科白がある。これは淺野内匠頭を當てこんだ科白で、作者はこゝに到つて大平記の世界を借りて當代を諷した物である事を明かにした譯である。同様な暗示と思はれる句が、前の八段目にもあつて「母の思ひは山科の聲の力彌をちからにて」と力彌即ち主税である事を知らせてゐる。

尚今回も慣例通り多分端折る事になるだらうと思ふが、九

段目の前のきり、即ち例の風雅でもなく洒落でもなく云々の語り出して由良之助が雪こかしさせ乍ら廓から戻つてくる條りがある。この場は茶屋場の賑やかな餘韻をまだ曳いてゐて、九段目の幕明きとしては應はしいものである。この情景には可なりエロチックな文句や所作がある。後段では晋の豫讓に比較される天晴れ由良之助も、こゝでは「伊勢蝦と盃、穴の稻荷は……云々」等と怪しからん猥談をするのみか、こぶら返りがしたと云つては妻に足指を押へさせ、權太が花道で小せんにするやうなちやらくゝをやるのである。

□  
エロチックと云へば、九段目へ續く道行きの中のエロは今斯界で可なり問題になつてゐる。それは例のし、きがんからの歌である。

「し、きがんかうがかいれにうきう」

これを西蔵學者の河口慧海師は「御照覽下さい、總てに誓ふた戀の望みを早くする因にして下さい。」

と譯した。從來の解釋では梵語の陀羅尼か何かだらうと云ふ事だつたが、河口師のこの新解釋をみた淨瑠璃世界の石井琴水氏は猛烈な横槍を入れてきた。

□  
その説によると、し、きは紫色で、それ以下の文句を漢字

に直すと、とても怪しからん文句になる。だからこれは斷じてそんな西蔵語の願文のやうな高尚なものではなく、本當にあの時の小浪の心持を端的に露骨に云ひ表はした作者は惡落ちだと云ふのである。

□  
兩氏の論争は今尙盛んに行はれてゐるが、この歌に就いて繪本忠臣蔵の筆者集義堂主人が次のやうに云つてゐる。

「し、きがんかうが、いにうきうと拜まんせては甚だしき詞なれども、語るものは更なり、聴くものも心づかざるは如何にぞや。おのがさまに批評すれども、かゝる文字に辨なきは、耳を塞いで鈴を盗むといふたとへの如し云々」  
以上にて分る通り、この文句は、恐らく淨瑠璃の中でも尤も甚だしい猥文である。これは少し和印の本を讀んだ人なら大たい察しがつくだらうと思ふ。

□  
山科閑居の遺跡に就いては、去る十二月の顔見世號に書いておいたから御参照願ひたい。その節大石を引取つた進藤源四郎を良雄の相聲と書いたが、後で調べた所によると源四郎は良雄の叔父である。右一寸訂正しておく。

# 山科閑居

忠臣蔵九段目  
(おほほむ石)



由良 イヤ申し本藏どの  
君子はその罪をにくん  
でその人をにくまずと  
申しますれば、縁は縁  
恨みは恨み、と格別の  
沙汰と、嘆お恨みに思  
召ませふが、所詮此世  
を去る由良之助、親子  
が底意を明けてお目に

かけませふ、それ力彌。

力彌 ハツ。

〽末前を察し奥庭の障子さらりとあ  
くれば雪をつねて石塔の五輪の形  
ちを二つ迄、造り立しは大星が成  
行果をあらわせり。

〽涙も涙にせき上ぐる、本藏あつき  
涙をおさへ、

本藏 ハツア、嬉しや本望や、吳王をいさめ  
て誅せられはづかしめを笑ひし吳子胥が忠  
義はとるに足らず、忠臣の鑑とは唐土の豫  
讓、日本の大星昔が今に至るまで、唐と  
日本にたつた二人、その一人を親に持つ力  
彌が妻に成たるは女御更衣に備はるより百  
倍まさつてそちが身は武士の娘の手柄者、  
てがらな娘の智殿へ御引の目録進上いたす

〽懐中より取り出し、  
屋敷の繪圖を出す、力彌受取り

力彌 ハツ。

〽力彌取つて押しいたゞき、聞きみ  
ればこは如何に目録ならぬ師直が  
屋敷の案内一々に玄關長屋、侍  
部屋、水門、物置、柴部屋迄、繪  
圖にくわしく書附たり、由良之

助ハツト押しいたゞき、  
由良 ハ、ア恭けなし有難し、徒黨の人数は  
揃へ共、敵地案内しれざるゆへ、發足も延  
引せり、此繪圖こそは孫吳が秘書、我爲の  
六踏三略、兼て夜討と定められたれば繩梯子に  
て塀を越へ忍び入るには縁側傳ひ。

力彌 雨戸はすせば直ぐに居るか。  
由良 爰を仕切つてこう。

力彌 攻むれば、  
〽親子が悦び、手負ながらもぬから  
ぬ本藏。

由良 イヤ、それはひがことなり、用心に  
きびしい高野師直、障子ふすまは皆釘ぎし  
雨戸には合せん合イくる、こちてははづれ  
ず、又かけやごこぼりました時には音がし  
て用意を致しませうが、その時は何となき  
りますかへ。

由良 さすがは本藏、ふしんは尤も、併しこ  
つては思案にあたねず、かねて工夫はいた  
しおきましたるが御合點參るまい、雨戸をは  
づす我が工夫、ちよとこれにてお目にかけ  
ん、力彌それ。

力彌 ハツ。(庭下駄をはき竹にかゝりより  
しくある。

九段目を白木へ語りませぬ

竹下土佐太夫

「假名手本忠臣蔵」は、竹田出雲の傑作であつて、世にもてはやされるほどあつて、どの幕もクズはありませんが、殊に九段目山科の段は、仕組みといひ、文句といひ、莊重な氣品のあるものに出來てゐますから、太夫が語るにも手強いのです。書下しの時の太夫を始め、世々の名人上手といはれる太夫や三味線弾が工夫をこらし、心血をそ、いで、入念に節附をこしらへてゐますから、どこからどこまでキツシリと充實した節附になつてゐまして、新工夫などは容易に加へられぬやうになつてゐます。

今度私が文樂座の初春興行に、九段目といふ大役を課せられて語りましたについて、思ひ出のかすくを述べて見ますれば、私が九段目を教へられたのは明治廿七年で師匠は初代團平師で

す、迎も語れるものではないが九段目を覚えて置くくと大變徳に成る、他の淨瑠璃がはやく解るのであるからと云はれました、そして覚えて置いて語らぬ様にと申されましたが、其時はどういふ譯か解りませんでした、それが修業を重ねるに連れて追々と解つて來ました、それから元師匠大隅太夫の素湯を汲んでゐる間は幾何度となく、耳に蛸が出来る程も聞いて居りますが語るといふ氣には成りませんでした。聞く度に如何にも面白いものぢや、淨瑠璃中の淨瑠璃といふ程有つて外のものよりも聞き應へがあると思つて、夫を聞くのを樂しみにして素湯を汲んで居りました。

往時の長門太夫とか若太夫とか湊太夫とか春太夫とかは知りませんが、其名人達を弾かれた團平師から自分も稽古を受け、

大隅師に語らして弾かれたのも聞いて居りますから、自然に其型があたまたに這入つてをりまして、今度之を語るについても何となく心丈夫に思はれました。

私の知つて居る師匠達の九段目は大隅師の外では先づ攝津大掾、この人は四十一歳か二歳かで絨下に成られたから其時分から九段目を語つて最後に語られたのはたしか七十三歳であつたと思ひます。其時大掾師は私にあの尋常に座をしめ手を合はせの處がはじめて語れたと云はれました、そんな所は誰れも氣をつけて聞いてはるまいと思ひ私も左まで重きを置かなかつたのです。處が今度自分が語る様に成つてよくわかつたのです。

「ふり上げる刃の下から尋常に」にうつる節の工合、聲のつかひ方が實にむつかしいのです。これだから何事も實地にやつて見ないと呼吸が分らないのです。

師匠の恩は忘れられません。今度の九段目の型は地合は大抵大掾師の型をたどつて演じました。詞や其他の意氣合ひなどはともに大隅師の型を用ひました、それは其筈です大隅師には永くついでるたから自然と其型に囚はれるのです。恒大夫師も中々よかつた、ですから、此人の型もちよいちよい交せてをります。

私も此歳ですから何か變つた自分の工夫を入れる積りで練習致しましたが逆もくそんな事は出来ませんでした。外の者なら随分工夫も出来ませんが此淨瑠璃ばかりはそこに偉大なちから

がこもつてゐるのです。

大隅師の型は昔からの型で有つて、詞に至つては殊によかつたのです。私も下手ながら夫を巡つて見ました。近頃の文樂は新しいお客方が多いのですが其新しいお客の耳が實に恐ろしいのです。第一好き嫌ひはなし、素より依估はありません、實實さへよかつたらよるこんで聞いて頂けますが悪るかつたら忌憚なく排斥されます。處が今度の九段目は一時間と三十三分といふ長いのですが夫れをじつと靜かに聞いて頂いたのは有難いことで毎日喜んでをりました。これも全く九段目といふものがうまく出来てゐるためであつて、私の手柄といふのではありません。

聞く處によりますと二月の中座では文樂同様旅路嫁入から九段目迄が出来ますような、殊に、延若さんが由良之助を勤めなさるそうですが、由良之助は先づ四段目に重きを置きますが、七ツ目の由良之助もむつかしいが九段目の由良之助は此所といふ仕ぐさもなく、もうける所もありません。唯貫目持の役ですから押し出しと耻さへ具はつてゐればよいとおもひます。九段目の由良之助は全くむつかしい役です。淨瑠璃と歌舞伎とは全然調子がちがひますから我にからかれこれいふ事は出来ませんが今度私も拜見したいと存じてをります。九段目につきましてはまだお話がタントありますが差當り先づこれだけ申上げておきます。

# 芥川さんの

## 『お富の貞操』

森田信義

あるひは、「演出者の言葉」とか、「演出のテキスト」とか、題して述ぶべきであるかも知れないが、私はこの際、そんな風な議論（もしくは議論めいた）ことを述べ立てる氣はない。さうしたくない。

と云ふのは、よしんば假に、此處に私が立派に編まれた議論乃至は抱負——と云つた風なものを叙述することによつて巧みに各位を傾倒させ、満足させ、もしくは瞞着しおうせたとして、演出の實際が、各位がまさしく御覧になる舞臺の演出の分野に屬する爲事の出来栄が、よくなかつたとしたら、なんになるか？——要するに議論は不要、懸かつて、實際の爲事の成功不成功にある——と考へるからである。

で、私は些も議論がましい文字は、弄したくない。しかし本誌の編輯者が私に、何か書かせる積りで、明けて

芥川さんとは生前、わづかに二三度しか面接したことはない。

置いて呉れたスペースを、真逆にブランクにする譯にも行くまい。

い。それも、甚だ覺束ない面接ではない。一度は、私の居た學校での小集會の席上で他の一度は小島政二郎さんの家の二階で、そして、他の一度は、其頃私が世話になつてゐた池の端仲通の蕪蔭堂と云ふ東洋美術店の陳列室に於てであつたそんな具合だから、勿論入魂など、云ふ間柄ではなかつたばかりか、實は長時間に亘つて親しく談話を交したこともさへもなかつた。（何しろ、私達にとつては大先輩であつたから）

一口に云ふなら、顔を見識つて貰つてゐるに過ぎなかつた。しかし、それにも拘らず、私はある理由のもとに、可成り詳しく——（例せば、趣味生活、嗜好、生活態度生活様式、家庭的事情までも……）等芥川さんのことは知つてゐた。事

によつたら、私の知つてゐたことのなかには、親交のあつた

人達でさへ知らなかつた——或ひは同氏が意識的に知らさなかつた——事柄に屬するものさへもあるかも知れない。

そのある理由と云ふのは、かうである。  
芥川さんの實弟で新原得二君（昨年物故、晩年佛門に入り、法號を日宣）と云ふがあつた。

それが、私とは綺堂先生のもとで同門でもあり、親友であつた。——かう云へば、お判りになつたらうと思ふが、芥川さんの事の色々は、この得二君の口から傳聞したのである。その得二君が何かの時に、こんな事を云つた。

「兄貴はとても、芝居が好きだ」

芥川さんが芝居が好きだつたことは、屢々發表された「觀劇記」でも承知してゐたし、遂に執筆發表されなかつたが、屢々戯曲の腹案を立てられ、これを得二君から傳へて知つてゐるが、私はその時、同君の言葉を、演劇愛好者——芝居好きと、こんな風な意味でなく採つた。即ち、こんな風な意味に採つた。

小説作家としての芥川さんは、その作品の上で、演劇趣味者である——と。

云ひ換へれば、芥川さんの作品には、演劇的要素、もしくは、演劇的手法が、甚だ多分に含まれてゐる——と。そして現在も私は、同氏の作品に對してこの見解を持してゐる。

『お富の貞操』——こんど脚色されて、脚光を浴びるこの佳

作こそは、その典型的な一つである。脚色者の食満南北さんが、この作に目をつけられた理由の一つは、確かに其處にあつたらうと考へられる。

餘談すこし——この作品の女主角の心理的動搖に、重大な契機をなしてゐるのは、一匹の「猫」である。芥川さんはこの「猫」と云ふ動物を愛されたらしい。尠くとも、他の動物にも増して關心を有つてをられた。

それは、同氏の雜記類のうちに、屢々「猫」に就いて書いて居られるのを、發見するからである。自然、猫に就いての描寫が實に、微細を極めてゐる。

私は演出の上で、この問題を解決するのに、尠からず苦慮した。幸に、かつて綺堂氏の「賴家」で鼠をあやつつて鮮やかな手腕を見せた結城孫三郎氏を獲て、解決することが出來た。

舞臺——この作の事件の舞臺をなしてゐる、下谷町二丁目角の小間物店、古河屋政兵衛の家と云ふのは、もしかしたら、前述の小島さんのもとの家が、モデルになつてゐるのではなからうか。尠くとも、私は讀みながら、同家を想起しすにはゐられなかつた。何故なら、「古河屋」の備へてゐる諸條件が、あまりにも、同家と酷似してゐるから。

で、私は、そのいきて、舞臺装置者の松田種次氏に、デザインを依頼した。



# 勸進帳に就て

松本幸四郎

歌舞伎十八番の勸進帳は既に知られてゐる通り、従来の勸進帳にあきたらなかつた七代目團十郎が天保十一年三月河原崎座に於て上場したものは、能の本行に形どり歌舞伎劇との融合を計り成功した曲で有ります。

この本行を取り入れるに就ての七代目の苦心として、種々の逸話が傳へられて

居ます。その頃は御存じの如く能は武家の式樂で、平民まして俳優など泥りに隙見さへ許されませんが、其處で植木屋に頼み込みその職人に姿を變じてお庭掃除といふ様なことで觀世の舞臺に近付き、その床下に忍んで足拍子を聞きながら、此處では斯うやつて居るんだな、此の足拍子では何をして居る所だと悟つたといふ事です。然し是は少し眉つばもので如何に七代目が傑物で有つたにしても左様は參らなかつたでせう、是には必ず御師匠番が有り手引をするものが有つたに違ひありません、併し是も前申した様な譯で俳優などに教へたり見せたりしたとあつては、何れ切腹ものであつたでせうから、その云譯の爲と又一つには七代目が如何ほど苦心をしたかと云ふ興業師の作戦上の宣傳で有つた。でせう。その時觀世の床下に辨當を使つた重箱を忘れ、今も觀世の家に残つてゐると云ひます。

九代目團十郎の師匠番は金剛流の某でした、元來勸進帳の



「瀧流し」は能では小書の方で本來は「延年」だけのものであつて、それを兩方演るのは金剛流に限るのだと聞きます。それに大口の附方も觀世では一文字、金剛では富士形に附けます。この九代目の頃になつて、もう誰某に教へられたと公然と云へるやうな時代ではあつたけれど、本行そのまゝに演つては勿論本行の方の人には到底勝ることは出来るものではない、顔に扮装などをほどこしては居りましたが、いよく本行風に改められて行く處が多くなりました。四天王の輕袴を大口に改めたのもその一つの例です、ある。興行（明治十二年）などは能に做つて素顔地頭で演じたことも有ります。又番卒の拵へもその頃までは大概、鬘金地に二引のある廣袖の着附（みつぐみ）と云つてゐます）に輕袴で有りましたが、今の能式の掛素袍狂言袴に改められました。

私が十七の年でした、まだ若輩では有りましたが、師匠の情で無理に四天王の役を勤めさせて呉れました。その時師匠の辨慶の凡その順序を頭に入れて置きました。その後、後見を勤めた時でした。自分には一生許さるべきものではないとは思つて居りましたが、芝居を打出して家に歸ると、家人も凡そは寢靜まつた暗い舞臺で、辨慶を一通りやつて見ました、然し眼で見えてゐる大抵分つて居るつもりでも、いざ自分で演つて見るとなると、舞の件ではつたり支へて了ひました、又その翌日舞臺を

一生懸命に見て来て、又前夜の如く始めました、然し未だ一二ヶ所手順の分らない處が有りました、さうして三日目には何うやら初めて全體の手順を演り合せました。そんな工合で自分で演る時が有らうとは考へませんでした、下手の方の後見の仕事——辨慶、義經、四天王の合引を掛けるとか、何處を見計つて汗を拭かせるとか、その間には笈の紐の長短を計つて直して置くとか云ふ様な注意を配りながら、師匠の舞臺を熱心に見て居りましたが、後見も三日目位になると柿の袴の膝が摺れて眞白になり、それと同時に眼は充血して眞赤になります、それを薬で補ひ、休むことなく仕立て居りました。後年私も宗家から許されて辨慶を勤め兎に角毀譽を云々されるやうになりました、斯うした後見の賜物で有つたと思ひます。

その後、殆んど九代目の勸進帳には後見をするか四天王を勤めるかしてか、したことは有りませんでした、師匠はその度に毎に精進の跡が見え改良を加へて行くといふ風が見えました、師匠が一代の記念ともすべし明治二十年四月、時の外務大臣井上伯邸に於ける勸進帳天覽の時にも、本行に依り改められた點がありました。

降つて私が是を許される様になつてからも色々劇評家並びに専門家の注意もあり、その尤もだと思はれる點は取入れて——

例へば装束の附方、持物の扱方、科白の漢音吳音の遣い處、  
 謡曲による發音法等改めた所も有りました。處が一度宗家から  
 大分私が我儘で我流になつたといふ注意を受けました、それに  
 九代目の晩年中茅ヶ崎に居りました時、次に勸進帳を演る時  
 には斯うやつて見度といふ抱負を洩らされたといふ事を令嬢  
 實子さんから伺ひましたので、自分に出来るものなら先行の  
 遺志を少しなりと継ぎ度いと存じ、其お話を伺ひ、旁々叱正を  
 受けに實子さんの處へ三日程伺ひ、口三味線で辨慶を演りまし  
 た。併し前申した通り、師匠は絶へず改良を加へて居りまたや  
 うで、演る度毎に違つた處が見え、演り方は同じでも意氣の異  
 つた點もありましたので、その何れを探るべきで有らうかと種  
 々替へてお目に掛けました處、其處は晩年の時の方がよい。何  
 處は前の時の方が良いといふやうな御助言だけで有つたので、  
 まづ私も先行をひどく恥しめる事が無かつたのを秘かに喜びま  
 した。その時の事でした「腕もしびる、如く覺え候、あら勿躰  
 なや勿躰なや」の處へ参りますと、同じその席に居られた九代  
 目未亡人が、その在當時を思ひ出して、其處が良かつたのだ  
 もう一度演つて見せてくれと申されます、私は馬力をかけて繰  
 返しました、すると未亡人は涙を流して、もう一度聞かせて呉  
 れといふ御注文で、三度繰返してお目にかれましたが大變なお  
 喜びでした。私もこれには思はず涙を催しました。これは今か  
 ら四回前の勸進帳の時でした。

大野醫學博士  
 實験 推定  
 乳兒に一番良  
 パーオムールイ  
**松竹不二齋**

つれく日記

明和四年亥年の部に

三好正慶尼色々之事  
一 三好正慶尼が来由にて大阪長堀茂左衛門町に木津屋茂左衛門といふ人あり



これは二月中座上場中「延享五人男」の文敵の一部です。このお芝居を見る上にも、また、本誌本號掲載の脚本と對比して御覧になると、更に興味深いものがあると思ひますので、特に大森痴雪氏に請ふて、茲に掲載いたしました。

しが其人の養子娘にておまちといひし女なり、よつて木津屋の家相續のため他家より養子掣を呼いれておまちに

妻合さんとすれども、おまち男を撰びて婚姻せず、依て是非なく離縁の事に及ぶ事度々なりければ後には養子に來

る人としてはなかりし也、其内に茂左衛門は病死せられて茂左衛門の後家色々に養子掣を求むれども兎角におまちは婚せす、殊におまちは生付賤しからず器量よければ心をよする人も多かりけれど、生とく心剛にしてかり初めの男は氣に叶はざるに稍もすれば養子のさえこれあるをきらひて所詮われ女のと、うせし取掣のせんさくうたてけれど、自ら尋ねる風情に取つくるひ晝中にさもいかつなる體して往來するによつて終に世人これを名づけてやつこの小まんといへる、素より所々にて口論など致しけるにもあらくれ男を取て投ぐなどのこともありし也、また其頃鰻谷にも一人の女子だてありて終に此女と一やうに出たちていかにも華なる女姿なりしが其頃芝居にもとり組てやつこの小まんとして女子だての藝をしけるが、芝居に致せし如く尺八は指さねども其餘の出立ほふかふり等に至つてはいかにもやつこの小まんとして大に世上に沙汰なりし、依て其母持て餘しよるべをもとめて堂上の内小川坊城家に物なれさせんがために奉公にさし出しけ

る、然るに其頃東海道の邊に於て濱島庄兵衛といふ者盜賊の張本として異名を日本左衛門といひしが常に此坊城家に身を寄せて居たりけると也、其後此のもの、行衛人相書してお尋ねきびしくありしかは、自から京都の奉行所に名乗出で其罪をあらはしける故、關東へ遣されしが後參河の國において刑せられる、此庄兵衛坊城家にありし内おまちに通しけるよし然るに庄兵衛相果し後おまちは名残をおしみて剃髮しけるよしはおまちが口より誰にも毎々物がたることなり 云々

### 乍恐以書付奉願上候

一 遠州豊田郡向笠中村三右衛門、喜八申上候、當國見付町中泉村上新居村去る子年より他國盜人大勢入込候而、右盜人に當國惡る者組合案内仕所々へ入込金銀衣類大小等取申に付、國中の歎き町在方共に至極難儀仕候其次第盜人共不殘大小帶し人數三四十人或は五六十人程つ、徒黨仕挑燈を燈し町在不限其門々に番人を附又は隣家の門々へも番人を差置き、心懸申候家へ入込、

家内の男女等しばり金銀衣類不殘押取申候盜人の頭領本名濱嶋重右衛門とも又は庄兵衛とも申、異名を中間にて日本左衛門と申候、手下の者共、見付町、中泉村、上新居村の内徘徊仕、勿論宿も右三ヶ所の内御座候由承之候事  
右押込に被取候者數多御座候得共、遠方の儀は具に不奉存近所の分有増左に書上申候。

一金千兩并衣類、大池村惣右衛門、同十  
一兩并錢衣類向笠村甚七郎同六十兩餘  
并衣類向坂西村大珍寺同千兩餘山崎村  
牛之助、質物衣類土藏一ヶ所有切山梨  
村才三郎、金四百兩程、片瀬村、同三  
十兩程狩廣村小右衛門同十兩程并衣類  
野部村一雲齋、同三十兩并錢、平松村  
忠四郎、同三十兩并衣類、寺谷村權十  
郎同五兩程并衣類氣賀村治兵衛御年貢  
金三兩并衣類、赤地村源左衛門同十兩  
程并衣類、深見村金右衛門同一兩二分  
并衣類小嶋半平郎衣類二櫃小嶋村平十  
郎右の外村々にて被取候もの數多難書  
盡御座候

一 右國々惡る者共の儀、御地頭様へ御  
訴申上度奉存候ても盜人類賊親類等數

多御座候へば此者共より内通仕闇打又は如何様の怨可仕も難計人々恐れ國本にては御訴難申上御座候、依之御地頭様方御役人中御改にて御證議にても無御座候、依之見付町池田村中泉村袋井町の内不斷日本左衛門并手下の者共構結なる衣類を着し大小帶白晝に不惶のん氣に遊びありき申候往還通誰知らぬ者も無御座候へば、武家方より何の御咎も無御座候に盜人共大分金子遺捨申に付其所の勝手に成候故差置候やうに奉存候、日本左衛門儀至極智惠深威勢強人を手なづけ候、徒黨仕、武家方を不恐徘徊仕候間此末如何様の工可仕も難計乍恐奉存候去る子の年より三年前の儀に御座候へば次第に募り段々悪る者共大勢徒黨仕只今にては旅盜人大小を帶村方の小前の百姓家へも押込申候間、毎夜寐すの番差置屋敷の内廻らせ申候に付翌日草臥出畑耕作も間をかき、勿論有明ヶ燈し、不用の衣食を給或は人雇賃、諸事費夥敷、百姓ひしとつづれ申候様に罷成迷惑至極仕候事

一 右國の盜人勝手能存候ゆへ案内仕庄屋家へ押込、御年貢金等押取仕候間、斯様候は、當秋出來申候間、寛代替金

納にて三分差上候も不罷成、その上大勢盜人御座候へば、時々郷藏御年貢米權柄押取可仕哉と安堵不成人々難儀仕候事に御座候、尤御役人様より被仰渡村々申合、盜人入候は、鐘太鼓打村々の人を進め追散し申様に被仰付候故其通兼而村々申合置候へども一軒へ入候へば近所七八間の表裏へ盜人ども二三人づ、當を付、勿論其家道筋にも番人四五人づ、刀拔身にてかまへ居申候に付何程かね太鼓た、き申候ても、人の身の上命を捨て懸り申事いらざるものと知らぬふりにて出合申人無御座候盜人は存分に取申候、渡り盜人の儀何れも劍術達者の由、專風説仕候故人々恐れ白晝に逢申候てもあたりをよけ通し申事御座候へば、隠れ申杯と申事は少無御座候事

一 達州盜人強動の儀、三年以來の儀御座候へば、遠州御拜領被成候御大名様御家來中盜人并宿等委敷御證議被成候に付其知行所には宿仕候者も無御座候由承り候へども、是は御知行所の内計の御吟味に御座候へば、外に御代官所の内方、御旗本様分郷の在所徘徊御仕候由及承候、日本左衛門并手下の者の

武藝勝れ申候由、殊に大勢に御座候へば御旗本様御國の御手勢計にては搦御取候事難成、勿論盜人所々大勢罷在候はずと沙汰有之候へば逃し可申様に奉存候、乍恐御大名方御同勢にて跡方一日にばた／＼と御捕被遊、在方百姓相助り候様に御吟味の上仰付被下置候は、ま難有奉存候事

一 去る子年十月、三右衛門從弟大池村惣右衛門盜人に大金被取去丑年三月三右衛門養子甚七と申すものも盜人押込に金子衣類被取無念に奉存候故、其砌御地頭様へ可願出と奉存候へども國本にては願申事は下役人仲間等の耳に入はづと相知れ候へば足輕仲間の内、若國盜人とも縁者も御座候へば、願の趣知れ候而闇打にあひ可申も無心元、其上大勢の人を指し申事故差控罷有候處段々盜人仲間大勢に罷成、國中方々へ押込取候につき、人夜を不寐難儀至極仕候、右の趣被爲聞召分、遠州百姓御救、悪人等不殘御召捕被遊候様に願奉上候、猶御尋の趣、口演に可申上候

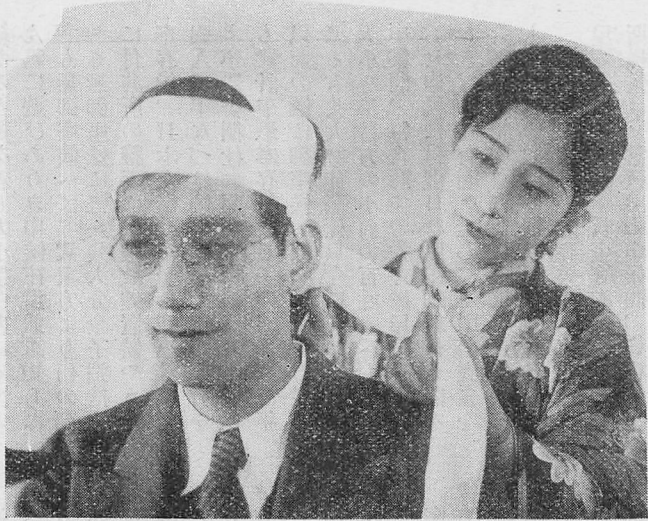
延享三丙寅年九月日

以上

# 銀

## 田 蒲 竹 松

原 脚 監 撮  
作 色 督 影  
加 村 清 佐



【解説】 東京日々、大阪毎日に約半歳に亘つて連載され、所謂壓倒的人氣に新聞界を風靡した加藤武雄氏の畢生の傑作である蒲田が他社に先んじてその映畫化獨專權を得たもので、本年劈頭に發表される純文藝映畫である。猶ほ劇中には加藤武雄作詞、福田蘭童作曲及び日暮一夫作詞、稿六郎作曲の二種の歌が挿入されてある。ロケーションは上州水上温泉方面。

【略筋】 道子は實業家寺尾健之助の愛嬢だった。秘書の長島は彼女を戀してゐた、しかし彼女には畫家の關が愛人として許されてゐた。關の亡父は健之助の恩人だった。關は寺尾家に寄留してゐた、長島には關の存在が不満でならなかつた。寺尾の家には道子と乳姉妹の照枝がゐたが、一日道子へ置手紙して家出した。「お嬢さまに合はせる顔がない」の一節は道子に或る惱みを與へずにはをかなかつた。兄卓爾のためだ。道子は直感した、卓爾はこの頃たしかに遊蕩だつたから。照枝は兄莊一の下宿に歸つてゐた。莊一も曾ては寺尾の家にゐたが故あつて出てしまつた。

道子は莊一の下宿を訪ねた、莊一は彼の一家が健之助のために餘りにも慘酷な迫害を受けた事を憤慨した。

道子が莊一の家へ行つたと聞かや、關は己れが秘してゐた淺ましき行跡の一切を告白した。「ではあなたが照枝を……」關は氣遣ひをしげに見まもつてゐる、道子は狂的な笑ひを續けてゐたが、いつか彼女の眸は涙に濕んでゐた。やがて彼女は關に自分との破

約を言ひ渡し、照枝と結婚する事を強いた。卓爾は關の秘密を知つてゐたが彼のため今日まで隠してゐた、それを告白したので關を詰つた。關が一通の書を道子に残して寺尾家を去つてから三月が夢のやうに流れた。そして道子には恐るべき日が來た。彼女は今、こみあげて來る嘔吐を懸命に耐へて、自動車あ夕暮の街を莊一の下宿へと急いだ、しかし莊一は不在だつた。入るか、去るか、思案の末遂に彼女は呼びかへず莊一の聲を後にして立ち去つた。

莊一は下宿で石像の如く佇立してゐた。照枝は道子の胸も、亦兄の心情もよく察知された。道子は病床の人となつた、義母は相手の男を誰だと訊ねたが道子は唯だ黙つてゐた。入つて來た父健之助は長島の告白に依つて娘の男は長島だと獨り極みにしてゐた。義母は微笑み乍ら「それで漸やく關の家出の理由も判つたといふのですわね！」健之助は世間の手前もあるとの理由で道子と長島との結婚目を早く定めんと焦つた。一つの取引として長島が健之助の女婿となつた事は成功として、彼は華々しく事業界に乗り出し、朝日製綱所を引き受けた。

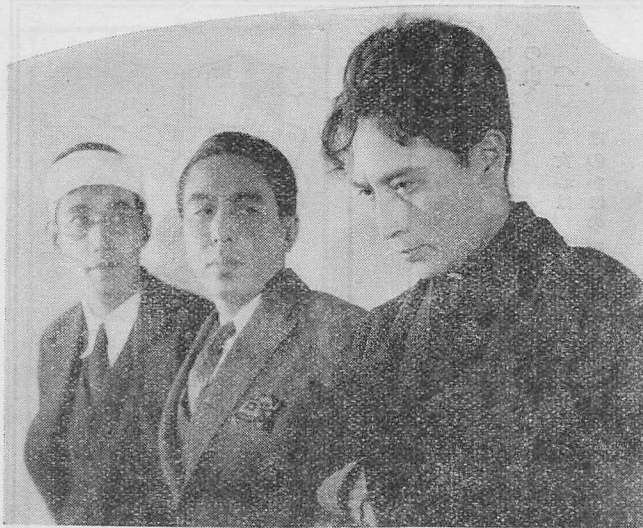
### 配 役

實業家寺尾健之助 藤野秀夫  
後妻 頼子 吉川満子  
その息 卓爾 毛利輝夫  
その妹 道子 八雲恵美子  
秘書長島英作 奈良眞養

# 河

## 春期待作

藤上 水々  
 武徳 三宏  
 雄郎 太木



心容れぬ結婚、跋ばかり嫁いた道子は放縦な生活で常に夫長島と離れてゐた。その頃、莊一は病氣だつた、照枝はキヤパレーの女給となつた、卓爾は彼に幾何かの紙幣を與へて云つた「口説く量見ぢやないから黙つて取つてお置き、お見舞ひのしるしだ」彼女は心から感謝した。酒井の下宿に女給喜美子が訪ねて來たのは深更だつた、酒井は卓爾の友人で文士だつた、素直な喜美子を一夜不良少年の手から救つた酒井は彼女を妹の如く愛撫したがし今夜の彼女は何故か自墮落な事を云ひながら出て行つた。莊一は入院した、多額な一日の入院費はベツトの内の彼をして惱ませた。或る日道子はバラの鉢を見舞に届けた、しかし彼女は莊一に巴れの來訪を秘して歸つた。莊一は妹から酒井の名を聞いた。懊惱の中にもやがて莊一の身は恢復に近づいて來た。親友の黒田から會社の險惡なる近狀を聞いた時、俠氣の莊一はベツトを蹴つて戶外へ飛び出した。

工場内に去來する暗雲、幾百の職工は莊一の鮮やかな指揮のもとに整然として運動をした。卓爾は莊一の手腕人格を敬慕せずにはゐられなかつた。空虚、虚飾、遊戯のブルジョア生活の己れ等に淺ましい最後が近づいて來るやうに思はれた、彼は怖しくなつた。卓爾はこの後、道子に頼んで三千圓の小切手を貰つた、彼は京子と結婚するかも知れぬと云つた、道子はそれを喜んで褒めた京子——彼女は曾て父の會社のタイ職工峰岸莊一その妹 照枝 高田 稔 高岡 菊子 花岡 菊子 齋藤 達一 日守 新一 齋藤 達一 山縣 直雄 女給喜美子 卓爾友人酒井繁 若水 照子 石田 良吉 莊一同志黒田 山縣 直雄 若水 照子 山縣 直雄 若水 照子 山縣 直雄 若水 照子

ピストだつた、身分の相違に健之助が反對した哀れな娘だつた。今は横濱チャパ屋に血を吐きつゝ働いてゐるといふ、彼女の生命は哀れにも危ふかつた。道子の子新一は都離れた某地の百姓家に育てられてゐた。時折抱きにくく事が今の道子には唯一の楽しみだつた。朝日製綱會社對職工の爭議は日に熾烈となつた、莊一は代表として二三の同志と長島の邸を訪ねた、そして折柄病床にゐた道子と對面したが、莊一は彼女に對して挑戦出來なかつた、彼は爭議團本部へ引返して脱退を申出た。資金缺乏、軟化者續出遂に爭議は従業員側の慘敗となつた。莊一の脱退は、照枝を極度に喜ばせた。彼女は何處までも道子を愛慕してゐたのであつた。道子は長島に離婚を申出たのはその頃であつた。卓爾と京子とは盡きつめた生の最善を今宵の乾杯に託して堅く相抱き微笑みつゝ死んだ。莊一も死んだ、彼も亦せめては満足であつたらう、大紅蓮の中に決死の身を投げ入れて道子を救ひ心からなる愛の言葉を交はし得た事によつて……(朝日座二月封切)



蒲田

▽野村組「燃ゆる花びら」セット撮影中。  
 ▽池田組「日本女性の歌」撮影中、猶挿入される主題歌は時雨音羽作歌、佐々紅華作曲の由。

(一) 乙女心は きりしまさつき  
 ほのかほのかの 春の唄よ  
 春の唄よ

フジヤマ サクラ 日本乙女

(二) 女心は ふとこる鏡  
 窓に待つ夜の 愛の唄よ  
 愛の唄よ

フジヤマ サクラ 日本乙女

(三) 母の心は わが子の夜に

とけて流れる 子守唄よ  
 子守唄よ

フジヤマ サクラ 日本乙女

(四) 照る日曇る日 花咲くこの日  
 のぼる朝日に 姿うつせ  
 姿うつせ

フジヤマ サクラ 日本乙女

▽島津組「愛よ人類と共にあれ」撮影中。

▽清水組「エロ一番槍」「銀河」撮影中、猶ほ「銀河」の配役中花岡菊子の役は川崎弘子と變更した由。セット四十八杯堂々二十巻の蒲田超特作品である。

▽重宗組「尖端に立つ女」撮影中。

▽五所組「夜ひらく」撮影中、セット内に使用する小道具は特に厳選し監督愛用の寫樂

の名畫、珍奇なる古代ランプ等を使用の由

▽齋藤組 病臥中。

▽佐々木組「君戀し金戀し」完成。

▽小津組「淑女と髯」完成。

▽西尾組 次回作品準備中。

▽野村(員)組 同上。

▽成瀬組「ねえ〜興奮しちゃいやよ」完成

▽石川組 次回作品準備中。

▽松竹ニユース第四十二輯 海軍觀兵式、山陽線列車顛落、退院の濱口首相、ダ格拉斯

日本訪問、蒲田訪問、命がけの仕事とは？ 蒲田撮影所昇格式。

下加茂

▽井上組 月形龍之介主演「南國太平記」前



篇)を完成後休養の傍ら高田浩吉の次回作品にかゝるべく準備中。

▽星組 林長二郎の「吹雪に叫ぶ狼」に次ぐ作品として目下福岡日日新聞連載中の大衆小説を映画化するべく鋭意脚色中。

▽瀬川組 月形龍之介主演「赤垣源藏」を完成、引續き月形主演にて長谷川伸氏作「河童の又介」を映画化することに決定。脚色悪麗之助、撮影も岡清、月形は本映画に於て二役演出の筈。

▽犬塚組 高田浩吉主演「忠次初草鞋」を製作中である。

▽衣笠組 兼ねてより絶大なる期待裡にその製作の開始を待たれつゝあつた「黎明以前」は準備全く成り此程愈々製作に着手した。原作大佛次郎氏、脚色黎明社同人、撮影杉山公平決定された一部のキャストは左の如し。

浪人三宅平六(林長二郎)別木庄左衛門(月形龍之介)石橋源右衛門(堀正夫)旅から歸つた男(高田浩吉)大家甚兵衛(關操)湯女梅野(森静子)田舎家の婆(中川芳江)乳母(環歌子)花魁道中(浦波須磨子その他一同)

### 銀河の唄

日暮 一夫作詞  
境 六郎作曲



(一)  
戀しい胸のエプロンに  
包んだ戀も純なのよ  
リキウルグラスに盛つた戀  
こぼしてしまや露と消ゆ

(二)  
弱い男がうらめしい  
お酒酌んだら飲んで欲し  
リキウルグラスに盛つた戀  
こぼしてしまや露と消ゆ

(三)  
捧げたげらの花びらの  
あせた顔にも血がのぼる  
女心のかなしさは  
情い入ゆゑなほ戀し

(四)  
今日も燈燵に火が燃える  
プロレタリアの血が燃える  
母の呪ひのいきごほり  
戀も嵐の夜に荒ぶ

(松竹キネマ海田レコード第四巻)

### 帝キネ

▽並木組 雲井龍之助主演、岩見重太郎「天ノ橋立血陣譚」を此程完成した  
▽高見組 歌川八重子、高津慶子主演 群司次郎正原作「マダム・ニッポン」を愈よ完成、引續き次回作品準備中  
▽松本組 鈴木勝彦主演、キング二月號所載児童映画「親」を完成、次回作品を選定中。

▽印南組 丸山珠枝主演「京都行進曲」の撮影に着手。因に同映画には英百合子が特別助演の由。

▽曾根組 ドル映画「女給」完我後、脚本選擇中の處、浪花座正月興行新興成美園上演、好評だつた堀江六人斬「妻吉物語」を新に山内英三の脚色にて、森静子入社第一回作品として撮影に着手。

▽薺々喜多組 市川百々之助主演、山路文字時代劇進出第一回作品、同氏原作脚色影法師姉妹篇「巷の木鼠」の撮影に着手。

▽木村組 砂田駒子入社第一回作品同氏原作脚色「春色梅曆」改題「女社長閣下」を此程漸く完成。

# 日向葵夫人

(リよスラダ・ラテス)

帝キネ現代劇部  
特作映畫



【梗概】 煤煙と機械と職

工の多い煤けた町の娘たか子は夢をもつてゐた。その夢が現實となつた時、彼女は若く教養ある技師の妻となつてゐた、且つて手の届かなかつた生活が目の前にくると、美しい着物、ホテル、麻雀、ダンスホールが彼女を誘惑した、幸福が彼女を訪れたやうに思へた。

彼女は日向葵のやうにこの

世界で華が開いたが、幸福がこの裏で舌を出してゐる事に気がつかなくなつた、この思は、夫の憲三を淋しくし、失望させた、すでに二人の間に生れた娘、圭子の將來のためにも案ぜられたので、會社の推薦を得て、東京の本社へ轉任して、新しい生活をする事にしたが、たか子はそれを拒んだ、小さな町の女王らしき生活を捨てる氣にならなかつたのと、よき遊び友達の運轉手山村がゐるからだつた、夫と妻とは不自然な別生活が始まつた、しかしこの愚かしい妻子も子に對する愛情は倫らなかつた、圭子は母の許に美しく健やかに育てられたが或る時、上京して父の家に美しい夫人のゐることを知り母のために、それを悲しんだ、その夫人は憲三が年若い頃の戀人で憲三の父が事業の失敗で自殺したのを恥じて交渉をたつた水澤徳子だつた、或る夏、たか子は娘を連れて海水浴場に行つた歸りに、偶然その車中で、圭子の友達の言葉に依り、自分の下等な愚しい趣味を嘲笑し、そのために娘

監督 印南 弘  
脚色 前田 孤泉  
撮影 二宮 義曉

配役

大原 英 百合子  
同 憲二 松本 泰輔  
同 圭子 近衛 公子  
水澤 徳子 川上 龍子  
徹 小川 秀麿  
山村 鐵太郎 小宮 一晃

がその愛人との戀の成長をたゞれてゐることを知り、はじめて十七年の間夫と圭子がそのために、どんなにか苦しんでゐたことを知つて、凡てを娘の幸福のためにかけて、恥をし、愛着の絆をたつて、圭子を父と父の古き戀人に托して娘を愛すればこそ男と行方をくらます圭子は母に裏切られた事を悲しんだが、その母が圭子の結婚式の夜、雪の中に立ちつくして涙ながら見入つてゐたことを知つてゐたのは優しき徳子だけであつた。

(辨天座 二月封切)

本誌愛讀者諸兄姉へ！

本誌誌上より、讀者から讀者への「喫煙室」と云ふページを新設致しましたから、讀者諸兄姉の親睦のために今後どしどし御投稿、御交驩下さる様希望します。と同時に次號から更に讀者のページト云ふのを新設することに致しました。此の欄は、讀者の自由天地、演劇、映畫の批評、印象、俳優の讚美詩でも歌でも何でも結構、世にも嬉しい誌上俱樂部としたいので、これまた、振つて御投稿を願ひます締切は毎月二十五日です。

掲載の分には薄謝を呈しますが取捨は當方にお委せ下さい。

投稿規定

○一篇、四百字詰原稿用紙三枚以内。  
○宛名は『道頓堀』編輯部讀者のページ係。



寫眞は英百合子のたか子と

近衛公子の圭子

黎明以前

原作 大佛次郎氏

監督 衣笠貞之助

撮影 杉山公平

主演 林長二郎

月形龍之介

高田浩吉

昭和六年春季映畫街の巨篇  
松竹キネマ京都撮影所製作

品作チッビル・トスルエ

# ムハト・マロ

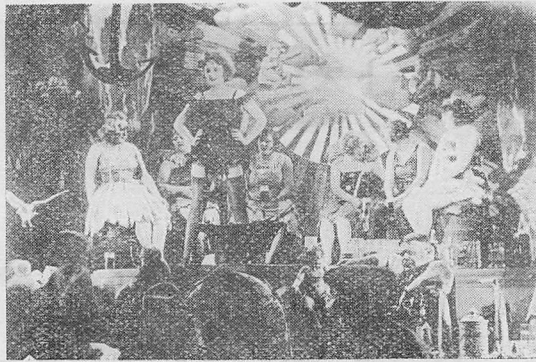


ジヤネット・マクドナルド嬢主演  
パラマウント 春季特作品



のき嘆

ムボヒツリエ  
・ンオフ・フセヨジ  
リ・ータシユギ



【映畫物語】 早春。朝。嚴格で氣むづかしやで通つてゐるウンラート教授の家、太い鐵條の目鏡を掛けた教授は今朝ばかり不思議に鳴かない鳥籠の中を覗いてゐる。鳥は赤い足を硬らせて死んでゐる。學校の始業の鐘が鳴り終へる。ウンラート教授の受持學科は英文學だ。笥のやうに肯丈の延びた色氣のつき出した中學生がずらりと並らんでゐる。

放課。學校の表門を磔の様に飛び出す生徒達の一人。物につまづいてばつたり倒れた。とたん鞆の中からばらり四五葉の寫眞が故つた。通り掛つたウンラート教授は親切氣からそれを拾ひ上げてやつた。で、何氣なくその寫眞に視線を集めると美しい女だ、まるで淫獸だ、眞白なむつちりとした奇麗な身體だ、一絲をまとわず何かの香ひのしさうな寫眞である。

教授は顔をそ向けた。早速その學生を呼びつけて詰問すると大變な事實を告白する。

その夜、謹嚴で通り者のウンラート教授の姿がキャバレーの入口を通つた。案内された室がローラといふ踊り子の部屋。自分を淑女の様に尊敬して眞面目な顔で話す教授。ローラは教授に御茶を入れてやつた。家政婦の毎朝入れるお茶は、いつ

も熱すぎるか、ぬる過ぎるかする。だのにローラのお茶は丁度飲み頃である……

ローラは鏡に向つてお化粧をする。おかしさうに笑ふ。可愛い糸切齒がちかつかつと光る。紅い唇をちよつと噛むの、教授は不思議相に見守つてゐる。翌朝、いつもの通りのいつもの英語教室。變つたのはウンラートと教授。不機嫌さうだ。

次の朝いつもよりもつとむづかしい顔をして教室に入つて來た教授。黑板には、ローラの名前が女の足を抱いてゐる教授の顔、ローラの名前が。

學生達は、せき止めた水が飛び出した様にわつと騒ぎ出した。校長が來た。學生達を連れて出た。

その後、前のウンラート教授がキャバレーの踊り子ローラと結婚したといふ耳珍らしい噂を残して、巡業の旅に出てしまつた。

打續く不運に今では尾羽打ち枯らしたウンラートが、盛場に人目を避けて、吾が妻の裸體寫眞を賣り歩いてゐる。

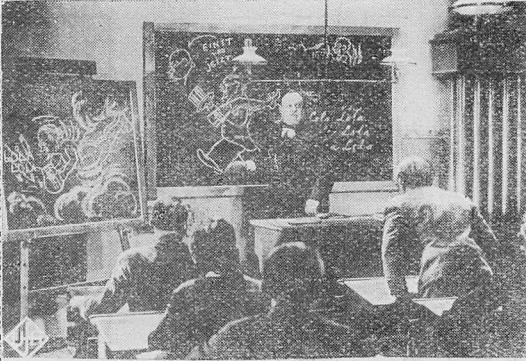
教授の元居た町。キャバレーでウンラート前教授が道化役者に扮装してお見得する。町の人は待ち構えてゐた。泣きたい、わめき出したい心をじつと押へて教授は己の顔に白粉を塗つた。犬の様な今の自分を見て、昔の教授振りを想ひ出す。

# 天使

指揮總氏—マ

監督氏ク—バンタス

影撮氏ウ—トツ



可笑しい。嘲つてやりたい。そんな事を見物人が考へてゐると想ふと、今にも飛び出して行きたい。ローラはローラで浮氣男と接吻を交はしてゐる。ウンラートの心は遂に狂つた。世にも物凄ごい鳴泣の聲を残して、教授は幽霊の様に、たよりなく一人ぼつちで、昔の中學校への通を歩いて行つた。夜は明けた、昔の教壇に覆ひかぶさる様にしてウンラート前教授は幽明のかすかな意識のうちに學校の寄宿舎の起床の鐘の音を聞きながら死んで行つた。

(松座竹二月封切)

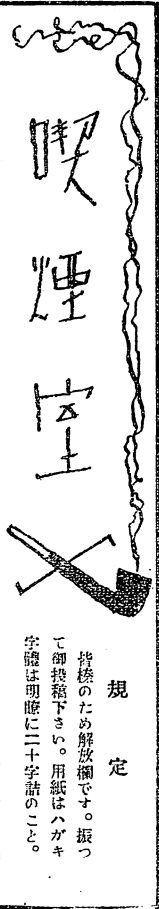
## — 配 役 —

ウンラート教授 エミール・ヤニングス氏  
 ローラ・ローラ マレーヌ・デイトリツヒ嬢  
 魔窟の主婦 ローザ・バレッツテイ夫人  
 サークスの團長 エミール・ラミユツ氏

## ◀◀ • 説 解 • ▶▶

「嘆きの天使」は、トッキーのために米國を去つたエミール・ヤニングスが、彼の藝術の故郷ウィリアム社へ歸つての第一作品で英獨語混合の全發聲映畫、原作はハインリッヒマンの小説「ウンラート教授」で、それはヤニングス獨特の演出で映畫化したものである。日本での封切は近日松竹座チェインで一齊になされる豫定であるが、一教育家が墮落の道を進む徑路には實に吾等の肺腑を衝くものがある。——寫眞(左上)教授は「嘆きの天使」で通つてゐるローラの美しさに魂を奪はれ、その夜自分の家へ歸ることをすっかり忘れてしまつた。——その翌朝である。何時もの様にとりつくろつた教授が教室に出ると、女の足を大切さうに擔いつてゐる教授の漫畫が黒板に描いてあつた。——(寫眞右上)場末のキャバレーの舞臺で哀しい唄を歌ふ、「嘆きの天使」ローラの實に魅惑にみちゝた場面。

読 者 か ら 読 者



規定

皆様のため解放欄です。振つて御投稿下さい。用紙はハガキ。字幅は明瞭に二十字詰のこと。

◆初投書ですが宜敷お願ひします。

私は大の新聲劇ファンです、辻野良一さんや山口俊雄さんのプロマイドをお持ちの方はお願ひ下さいませんでせうか、來月の本欄で御返事下さいませう様お願ひいたします。(天下茶屋 奴葉)

◆大の長二郎ファンよ「吹雪に叫ぶ狼」の素晴らしい演技にすっかり参つてしまひましたの、長二郎黨の皆様！何卒本欄で御交際を。(芦屋八重子)

◆僕、松竹ガクゲキ部のスター飛鳥明子君が大好きなんだ。満天下飛鳥黨の諸兄姉！大いに本欄で御交際下さい。(京都 布谷生)

◆妾先日辨天座で「女給」を観てすっかり泣かされてしまひましたの、それにしても水原玲子姉様のあの素

適な演技！若し水原様のサイン入りプロマイドでもお持ちの方がありましたら、是非お願ひ下さいませ。(船場 明美)

◆私は大の第一劇場黨だつたのです。此度坂東壽三郎氏が再起されると聞いて自分のことのやうに喜んでをります。本誌愛讀者諸氏に提議します。坂東壽三郎後援會を組織しては如何でせう？御賛成の方は來月號の本欄でお知らせ下さい。(高津 藤田生)

◆自分は大の成美團ファンだ、石河薫、伊志井寛のコンビネーションが堪らなく好きだ。(神戸 S S 生)

◆私の好きな市川右太衛門さまは、遂々大江美智子さまと結婚をなすつたさうですが、本當でせうか？あゝ私失戀しちやつたわ。(道頓堀 くれない)

◆新聲劇のビッグスリー辻野、山口、伊川を支持する諸兄姉よ大いに本欄で共鳴をしやうではありませんか。(住吉 良太郎)

下加茂特別通信

◆……映畫を單なる娛樂機關又は産業文化に止まらせず更にこの近代藝術の能力を擴大してこれに依つて國民文化の正しき建設と大衆教導にすることは映畫自體の文化的意義をより以上高揚するものである。即ち松竹京都撮影所では所長白井信太郎氏の所信に依つて早くより文化史映畫の製作が企圖され、すでに昨年度に於て第一作「劍道見世物師」が發表され、充分の効果をあげたが、本年度に於ては衣笠貞之助歸朝第一回作品「黎明以前」の製作を機とし、以後年二本乃至三本の割合で國民の文化の正しき教導に資すべき「文化映畫」の製作が行はれることになつた。

目下製作中の「黎明以前」は文化史價値を立派に備へた大作として莫大な費用と數ヶ月にわたる製作時日を與へられて日本映畫界に一大エゴックを招來すべく衣笠監督以下必死の努力を以てその仕事に没頭してゐる。

◆……長二郎主演の「美丈夫左京」着手、林長二郎が「吹雪に叫ぶ狼」に次ぐ作品として此の程製作に着手した「美丈夫左京」は徳川時代秘密の國と云はれた薩摩を背景に描かれ



◆妾大河内傳次郎なんか大嫌ひなんです。その代り林長二郎様は迎も好きなのよ。本誌愛讀の長二郎黨の方にお願ひをします。本欄での御交際を。(桃谷 みゆき)

◆わたしのすきな志賀廼家淡海一座が道頓堀に現れないのは淋しいことです。皆様のうちで一座の消息を御存じの方がありませんたら御手数ながら來月の本欄でお知らせ下さいまし

僅々三圓三十錢で面白い『道頓堀』が一ケ年讀める

皆様の御聲援と御支持とに依つて益々隆昌に赴きつゝある本誌は、昭和六年を期して茲に新なる飛躍をせんとしてをります。

就きましては、此際皆様の御愛顧を賜つて一層の發展を遂げたく本誌は大大的に豫約年極の愛讀者を募集することになりました。本誌を御支持下さる皆様は是非振つて御加入下さることを伏して御願ひ致します。

特に左記のやうな年極の讀者特典を設けてありますからなるべく小爲弊の書留にて御拂込み下さいまし。

## 道頓堀 豫約 讀者 募集

豫約者 一ケ年分 —— 金三圓三十錢也  
同 半ケ年分 —— 金一圓六十五錢也  
(郵券代用一割増)

特典 豫約にはすべて送料が免除してあります。豫約讀者は本誌主催の凡ゆる會合催し物に無料若しくは割引を以つて出席することが出来ます。特別號も特に普通値段の割になつてをります。その他皆様の御満足せられる幾多の企てが澤山あります。

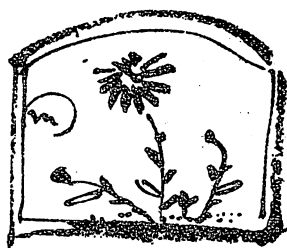
本誌愛讀者は一人残らず豫約者になつて下さい

◆國民座へ行つてゐた春日惠美子君が、家庭劇に復座してゐるので、僕大變に嬉しくなりました。吾等惠美子黨のために、その健在を祈ります。(鳥之内 幸陽生)

(難波 菊吉)  
◆私、大の成駒家黨なの、日本一の名優成駒家品貞の皆様へ——今後大いに本欄で談じさせて頂かうではありませんか(道頓堀 M子)

の愉快な穩密物語りで林長二郎の扮する竹中左京が幕府からの巡遣使として單身そこへ乗込み表面遊蕩兒と見せかけて秘密をさぐらうとすると、一方薩摩方にも智者あり強者あつて、智と腕と秘密をめぐつて萬華鏡の如く展開される事件の連續、大衆映畫として必ずや興味多い映畫である。原作は福岡日々新聞に目下連載中の水足蘭秋氏の「火焔錠子」監督は此の種の映畫に得意の手腕を持つ星哲六、主役竹中左京に扮する林長二郎は踊りをおどつたり三味線をひいたり、大いに遊蕩兒振りを見せてゐる。

◆……松竹下加茂には、蒲田の大久保忠素氏が舊臘撮影部長に就任、今校の映畫製作にあつては何を作つて誰に主演さるまで全部企畫部、監督部などが集つて合議する新しいシステムを採り、從來のやうに勝手にプランを立て、撮ることが出来なくなつたので、新しい轉向を見せるだらうと見られてをり、新歸朝の衣笠貞之助監督も既報の如く「黎明以前」に舊臘から着手し、三月頃完成の豫定であるが、これはすばらしいモンタージュになる作品といふから、かうしたあたりから下加茂の時代劇も新しい魅力を生むのではないかと見られてゐる。



# さて新聲劇は？

徳田純宏

その可否は扱置いて、新聲劇ほど歴史を保つてゆく劇團は珍らしい。今時に、新聲劇ほど俳優のメンバーを狂はしてゆく劇團も稀だ。それでゐる新聲劇は根強い存在性を有つてゐる。

不思議な劇團だ、妙な存在だと劇道家達にも噂をされてゐる。今時に一種焦燥的な意味で進歩を促がされてゐる。

當事者は、それを強く感じてゐる。決して退嬰的な氣持ちに胃されてゐるのではない。一步でも半歩でも進みたいと希つてゐる。又それが劇場人の有つ意氣であることも知つてゐる。

然し不思議にも新聲劇と云ふ劇團は、左様した事を痛切に感じた時とか、一つの過渡期に際した場合、必らず幹部俳優の一二變動を見せるのが常である。全く以て奇妙な劇團ではある。

今度も中田クンが脱退して仕舞つた。そして山口辻野の兩クンが堅い結束を見せた。而してその結果は何うかと云ふにボス

ターバリユーは扱て置いて、直接的な舞臺には何んの寂寥も與へず別種の朗らかさを見せてゐる。そしてフアンの聲は些かの變動も見せず押し寄せて來てゐる。要するに新聲劇と云ふ一個の偶像に永年の間に固着した表皮である。

我々劇團員に執つてはこのフアンの表皮は最も尊い表皮なのである。然し又最も恐ろしい表皮でもあるのである。

何故なれば、劇團員は兎もすると此表皮の爲めに血管の流通を害されてゐることがある。寒暑の刺激に依つて血行を良くせしめなければならぬ本體を、後天的な表皮に依つて寒暑の練習を避けんとするが如き場合がなきにしもあらずなのである。

最も恐ろしい事は、これらの刺激に對する逃避的行動である。それは取りも直さず劇壇に於る退歩を培ふものと云ひ得やう。況して新聲劇と云ふ變型兒はそれらの表皮に依つて包まれて

る許りか松竹と云ふ大きな資本家の母に依つて暖衣胞食に育  
くまれてゐる劇團である。何んと恵まれた劇團ではないか、何  
んと云ふ結構な次男坊ではあるまいか。

然し右の如き淺薄な歡びと力に依つて將來の劇界に果して活  
躍を見せ得られるであらうか。あまやかされて育つた奇型兒は  
時代の潮流に敢然掉を差し得られるであらうか。

老舗に附隨した華客は限られてゐるやう。  
今後の演劇には勤くとも華客の範圍を擴める必要があらうと  
思ふ。私が新聲劇に對して抱く危懼は絶えずそれ而已である。

時代に順應してゆく可きには、現下の劇團として脚本にイデ  
オロギツシユを有てよとは、よく聞かされる處である。だが私  
をして謂はしむれば、先づ劇團その物に、確固たるイデオロギ  
ーを把握してゐなければ嘘なのではあるまいかと思ふ。

舞臺の統一、脚本の選定、俳優の訓練、演出の左右悉く、  
劇團が有つ處のイデオロギーの發露でなくて何の價值があらう  
而も劇團にイデオロギーを有つと云ふは、決して傾向的に墮  
ちると云ふ事ではなく、俳優の智的向上を導く因ともなるので

ある。單に生活する爲めの舞臺人、單に名聲を保持するがため  
の舞臺人がありとすれば、それらは已に現代の劇界には必要を  
認めない人物だと云ひ切る事が出来やう。

演劇に従事する者は、絶えず演劇のための開拓者であり、創  
造家でなければならぬと思ふ。其處に始めて、大きな生活と

強い名聲が産れるのではあるまいか。況んや時代に生きてゆく  
劇團に於ておやと云ひたい。私は毎も左様思ふ――。

僅か許りの名聲と、陳腐な藝を有つた俳優に代へるに特異な  
創造性を有つた無名俳優を活躍せしめ、これに對して演劇マネ  
ージャーが易々として、前者に對する丈の經費を交換的に逆  
用して貰ひたいと――。これらの事は出来得可からざる事のや  
うで、最も容易く行ひ得る事と思ふのである。

要するに、映畫界に於て行ひつゝあるスターの抜擢法を、よ  
り善的に、より効果的に舞臺劇へも盛んに流用して貰ひたい一  
事である。何等の目的意識もなく、たゞ漫然と過去の夢を追ふ  
者の足跡は絶えず亂れがちである。

それをよく知る者が劇場人でなくてはならない。それを知る  
者が一演出者に止まつては不可ない。又一俳優のみでもな  
い。と云つて演劇マネージャーの力のみでもない。獨り劇團全員  
の精神でなければならぬ。

だから私をして極端に云はしむれば、劇團をして新く社會的  
存在價值を高める爲めには、それらの障害と見なす可き缺陷は  
容赦なく改造してゆかなければならぬ。

それらの改造を躊躇なく行ひ得ずして何んぞ劇團の向上を圖  
り得られやうぞと云ひたい。

然し亦最も至難な事であるかも知れないと想像する時、私は  
因習的な劇場空氣に依つて息づまる感を抱かせられる。

大阪毎日新聞連載  
直木三十五原作  
佐々木金象脚色

(二月・角座上場)

# 南國太平記

全五幕  
十三場

和田哲

- 第一の一 三田四國町の往来
- 第一の二 仙波八郎太の座敷
- 第一の三 夜半の三田薩摩邸
- 第一の四 同邸内重役の詰所

時は天保五年、冬から早春へかけての出来事である……。  
眞つ晝間、三田四國町の往来で、南國の雄藩島津齊興公の愛妾となつたお由羅のお蔭で、今は立身出世をした兄岡田小藤次は、窮屈まぎれの退屈しのぎに、スリの庄吉に、一つ鮮やかな手際を賞嘆したいと申し出た。

「ちやア、印籠が拘れたら一兩ですかい、——印籠と一兩か、こいつあしめたな」

燕のやうな庄吉が早速と仕事に掛らうとした。が、その相手が悪かつた。仙波家でも殊更腕の立つ仙波小太郎、見事右手首を折られて了つた「からなりやどうとも勝手にしやがれ」

## 大阪歌舞伎座の新築に寄せる

大阪名物の一つとして、久しくその巨體を千日前の一角に誇つてゐた樂天地も遂に昭和五年十一月三十日を限り休館、堂々二ヶ年間の工事豫定にて此度新裝歌舞伎座の建築に着手するに就て、松竹本社は此の新劇場に對し、左記項目に依り新時代の劇場としての百パーセントの理想的設置をしたい存念から各方面の忌憚なき御意見なり御希望なりを求めました處、歳末匆忙の折にも不拘早速懇切なる御回答を賜りましたる段、茲に厚く御禮を申上る次第です。

- (一) 大劇場としての萬般の設備を如何にすべきか。
- (二) レウユー及び映畫劇場として如何に萬全を期すべきか。
- (三) 社交機關として如何なる附屬設備をなすべきか。
- (四) 大衆娛樂場として如何なる附屬設備をなすべきか。
- (五) サイヴイス萬般に就て如何なる方法を講ずべきか。
- (六) 其他新劇場に對する種々なる御示教を。

——到着順——

野村得庵

東京の歌舞伎座の形で私は満足します、後から出来る東劇もソニーヤルルームもスモーキングルームも賣店も手洗室も餘りに取り方が理智に過ぎて其處に休憩らしい休憩が與へられてゐない、(餘りシートを



瀬は大殿齊興公の御幼君寛之助の乳母だったが、寛之助は何者かの調伏にかゝつてか怪しくも逝去された。涙と共に屋敷に下つた七瀬はその場の怪氣を具さに述べたが聞入れられなかつた。小太郎と従兄益満は不審に堪えず、示し合して、二人は三田薩摩邸へ出かける事にした。深夜、覆面した二人の武士、それは小太郎と益満とである。さうして、亡き寛之助の病間の床下から掘り出したものは、一尺に五寸位の白木の箱だつた。「開けてみやうか」

「いや、さうしらずとも、梵字が書いてある以上、調伏ぢや、それに相違ない、呪咀の箱だ」  
二人は寛之助の確證をあげ得たと、喜び急いで引揚げて行つた。此事遂一言上に及ばんと、小太郎の父仙波八郎太は件の箱を小脇に、重役の詰所に行き、大殿齊興公に申上げんとした。けれども、あたまからそれは加ねつけられた。  
「申すに事をかいて、手遊び人形一つを楯に調伏だの、何かのと、家中

自分をおつぼり出したの強氣の弱氣、しかし、庄吉は今更どうする事も出来なかつた。小藤次は、庄吉に約束した口裏もある。だから、庄吉には、きつと復讐してやると誓つた小太郎の父仙波八郎太と云ふのは、島津公の裁許掛を務め、妻の七瀬の如何者かの調伏

欲張り過ぎたか？

第一あのエレベーターは無茶である、而も最大の食堂は五階にある僅かの時間にあのエレベーターの押合の苦勞をせねば食堂へは行かれぬ、之の場合ステヤシーを五階迄昇ることは更に難事である、而も階段の取り方が少しも聯絡がない、スペースの都合があつたと思ふが東劇のラウンドは一言にして無茶である、統制に慣れぬ大阪の觀衆を容れる新劇場を觀劇の際に與へる食事と休憩の設備にどうか十二分の考慮を拂つて欲しい。

明治座や帝劇や新橋演舞場のシートの數では芝居を安く見せ得ないであらう——歌舞伎が丁度と思ふ、尤もあとで西側の設備を加へた丈の贅澤さはあるが、あれをも少し經濟的に考へた形が私は一番よいと思ふ。

藤 澤 清 造

質問(一)に對しては、舞臺の間口や奥行それに上の方を、出来るだけ高く、深く、廣くして貰ひたい。大道具は左右へ引取り、引出すやうにして貰ひたい。背景の如きは、忘れても上の方へ引上げ、舞臺の方へ引下げるやうにして貰ひたい、照明の設備も十二分に整へて貰ひたい。客席、廊下、休憩室の様式は、思ひきり清楚にして貰ひたい客席の椅子の配置は、少し餘裕を持たして貰ひたい。前列と後列との間隔距離は、觀客が一人座席を占めて居ても、其の前を他の觀客が、些の支障なく通行出来るやうにして貰ひたい。本来なら、觀客といふ觀客は、閉幕前に着席し、閉幕後に離席すれば結構だけれど、當分の

に紛擾を起す事が心得ある武士の所作か、無禮者、退れ、閉門申しつゝる……」

第二の一 安養院の横不動堂

第二の二 目黒の料亭あかね

第二の三 お長家仙波の玄關

第二の四 大磯海濱の松並木

地びたに叩きつける横しぶきの雨の中を、深雪は兄の小太郎を探しに供も連れず、ひとり安養院横の不動堂に來た。雨やみを待たうと、不動堂の軒先きにしがやがんでゐたスリの庄吉は、美しい深雪を見て商賣柄にも似ず、羞しい程の心の時めきを覺えた。

「お嬢さん……」

「……」

「仙波の小太さんを捜しておいでなんでしょうか」

「え？」

「御一緒に捜してあげやせう」

やさしくて、それで、どつか鋭い双物のやうな男の態度に、深雪は直ぐにも戻りたかつた。

「御心配なさらねえて下せえやし、矢張り人間なんですか



間、さう言ふことは観らるべくもないから、此の椅と椅子との間隔距離は、是非さうして貰ひたい。それと、何を措いても、先づ一個の演出者さへ得ることが出来れば、演劇に就いての事は、残らず出来るものだから、先づこれから前に當つて貰ひたい。但僕は、此の大劇場なる物は採らない。何故と言へば、これ纏て、演劇其の物を根本から破壊する虞があるからである。

質問(二)に對しては、(一)に準じて貰ひたい。

質問(三)に對しては、和洋と支那と西洋との料理を置いて貰ひたい。バーとカフェーとを置いて貰ひたい。舞踏室を置いて貰ひたい。囲碁、將棋、麻雀、トランプ、撞球も置いて貰ひたい。ポート、遊泳場、乗馬、ゴルフ、メスボールも置いて貰ひたい。此の中、飲食する室と舞踏室とは、それぞれ設備や裝飾に意を用ひて貰ひたいと言ふのは、清楚だけではいけず、華美だけではいけないからである。いや、舞踏室は、金色燦爛たる物であつて好いかも知れない。兎に角、其處のところを能く考へて、設備宜しきを得た物にして貰ひたい。

質問(四)に對しては、木馬、射的場、魚釣り、覗き眼鏡、安來節義太夫、浪花節、長唄、講談、落語、奇術等を置いて貰ひたい。

質問(五)に對しては、言ふまでもなく、丁寧親切をモットーとして貰ひたい。今これを分けて言へば、料理部や舞踏場に使用する人間は、少年少女にして貰ひたい。此の率は、少女十人に對する、少年三人位の割にして貰ひたい。男女を混合するのは、女は男を、男は女をサービスするのが、もうセックスの上からして、格好に出来て居るからである。又大劇場をはじめ、レビューや映畫の案内人は、これまた少年少女を併用して貰ひたい。そして、少年は女の観客に、少女は男の観客に當るのは言ふまでもない。服装は、舞踏室にゐる使用人だけ

ら。處で仙波の小太さんにお嬢さんの様な御立派な方があらうたあ思ひもよりやせんでした」

ちやうど、三田四國町の往來で、小太郎に手首を折られた時、小藤次から不意をかけられ、彼の畫策で、仙波一家に或る復讐はしたものの、小太郎にこんな美しい妹がある事を知つては、庄吉の心は今更の如く動哭した。

道々話してゐるうち、純真な深雪の心の中にすつかり自分のわるいこ

とが悔やまれてきた。ぶ

つゝり今日からスリは改

めよう、そして、仙波一

家の爲に働かう、いゝや

深雪さんのために精根限

り盡さうと決心した。小

藤次のとつた復讐と云ふ

のは、お由良から齊興へ

言上して、島津のお長家

にゐる仙波一家を浪人さ

せ追拂ふ事だつた。命は

下つた。八郎太は妻七瀬を寛之助看護疎漏にかこつけて、七瀬を離別し

た。けれども、八郎太の心腹は別にある。

「七瀬、綱手と一緒に國へ戻れ、途中大阪藏屋敷に立寄り、元兇調所突

左衛門を探つてその様子をわしに知らせてくれ」

「……はい」

八郎太の積りでは深雪は江戸に止めて、常盤津の師匠富土春の手から小藤次を通じ、島津公へ腰元として入り込ませる腹だつた。八郎太を中



は別として、此處にゐる者は、可憐清楚にして貰ひたい。無論これらは、何れも和装でなく、洋装にして貰ひたい。そして、何よりも入場料を思ひきり低廉にして貰ひたい。同時に、これが演劇なら、此の演出時間を、思ひきり短時間であるがやうにして貰ひたい。要するに、此の時間の事と、入場料とが、客をサービスする上には、一等大切だから、これは是非とも實行して貰ひたい。

内 藤 濯

(一) 東京の劇場、殊に歌舞伎、明治、東劇、帝劇などの劇場にはいつても思ふことは、謂ふところのフォワイエ、幕間に息を入れる溜りが窮屈なうへに、何の味はひも感じられない事である。中央どころに幾人分かに仕立つたソファを据ゑ、その周圍を絨氈で取り巻く、そしてそこへ植木鉢をおく、それが何處でも観られるやり方だが、それが一番頭痛の種子である。全體が東京で六七十圓なみの貸家を持つてゐる庭をも超えない廣さなので、折角の圓柱も引き立たない、無論息を入れるには大いに足りない。そこで「日本の代表的大劇場」の持つべきフォワイエは、巴里の大オペラに於けるのとそっくり其の儘でありたいのだが、そこまで望めなければ、せめては今の食堂くらゐの廣さはこの方へ割かれんことを強要する。今のフォワイエは、どこかの社交クラブへはひつた以上の印象は與へてくれない。劇場は何といつても藝術の殿堂である。舞臺に面して名優の藝に酔はされた感じが、フォワイエの散文的な設備で稀薄にされるのは甚だ願はしくない。壁面を大きなフレスクで塗り込めるもいゝ、大理石の彫像を惜し

に、右と左に別れてゆく人々の眼に涙があふれた。その場に居合せた淵達な益満でさへもが、人知れず目頭があつくなくなつてくるのを覺えた。

第三の一 大阪藏屋敷の一室

第三の二 四明嶽薩摩壇附近

第三の三 比叡山林中の庵室

南國の大藩島津の藩主齊興には家督を譲るべき人物が二人あつた。一つは齊彬と異母弟の久光とである。久光の母お由羅は久光を立てんものと、大阪語家老調所笑左衛門と兵道家牧仲太郎を誣らひ、久光擁立を畫策した。だが、牧は自分の修得せる呪法を大成せん心積りてゐた折も折、お由羅の調伏の話に、これ幸ひとその鹽に乗つたので、牧はお由羅のくわいらいとなるのではないが、それでも、牧は寛之助暗殺の呪法者と見なされてゐた。大阪へ下つた七瀬は、綱手と共に目指す敵調所笑左衛門方へ訪づれ、調所を欺かんとしたが、見破られてしまつた。スリの庄吉は調所の館へ忍び込み、調所の唯一の重要書類を盗んで了つた。それと知つて調所は追はんとしたが、彼を討たんと忍び寄つた七瀬を一刀のもとに斬り斃して了つた。牧の一千百瀬月丸は、七瀬の死をみて狼狽なすところを知らなかつた。綱手を、一旦は憎く斬らうとしたが、毒は變じて薬と、月丸は綱手を籠絡すべく持ちかけた。さうとも知らず綱手は心のうちに益満を思ひ乍らも、月丸に身をまかせて了つた。牧は行法修練を期して四明ヶ嶽へ籠つて修業してゐた。さうと知つた仙波親子に死装束勇ましく比叡山麓に出かけた。護衛の侍は二人を見て矢庭に聲を飛ばした。忽ち起る亂闘、白刃は四明の山中に閃めき血はほとばしつた。八郎太は遂に倒され、小太郎は再舉を期して命を長らへ落のびるのであつた。後を見送つた牧は斷末魔の八郎太を抱き起し、自

まず列べるもいふ、要は藝術の殿堂の一部であることを忘れない事だ  
(二) 舞臺の框をもつと高くすること。今日のまゝでは、四階五階の観客の視線を壓迫するレヴェーの場合、さらぬだに小さい日本俳優を更に小さく見せる、顔までもびしやんにする。

(三) 帝劇と東京會館との關係を持つてゐるくらゐの設備があつたら澤山だと思ふ。劇場には劇場としての設備があれば事足りである。

(四) これも劇場とは全然分離して考ふべき問題であらう。大劇場の場合に殊に。

(五) 座席への案内をもつと淑やかにして貰ひたいと思ふほか現狀で満足。

小屋が出来上つて後の注文となれば數限りない。それは更めて言はせて頂けるであらうが、中でも、晝夜二部制といふのを、一週間の前半と後半とに振りかへて夜興行にするなどは如何。

宇野 四郎

(二) 舞臺を出来る限り廣くとり、水壓式の昇降舞臺を設備しては如何。

(三)(四) アスレチック、クラブ(體育俱樂部)を御設けになつては如何。プール、體操室(勿論この中には排球、籠球などの設備も含まれます)、柔剣道場、拳闘道場、ベビーゴルフ場、テニスコート(屋上)附屬物として浴場、飲食場、映畫場、音樂會場、それからダンスホール等、等。



分の心をわびるのであつた。命を危くおとさんとしたのを比叡の僧義觀に救はれた小太郎は、益満と庄吉との顔を見て、うれしなまに涙が溢れ出てきた。さて、かうして顔を見合はせると、小太郎には父の死が恨めしかつた。

「目ざす牧を逸した上、父を死なした小太郎は同志に合はせる顔がないだが、大死はならぬ、一旦の怒み怒りて必らず大死はならぬと父はさう云つた。眼前父が殺されても、牧を刺す見込みがなくば、圍みを衝いて逃げる、さうして二の手段を取れと……」

聞き入る一同も貰ひ泣きをした。はからず訃ね合した綱手も暗涙にむせんだ。時、程経た濃に怪しき人影、益満は素早く短銃を放つた。轟聲一發、あつと倒れた人の顔を見て、綱手は愕然とした。それは己が身をまかせた月丸ではないか。月丸が仇敵牧の一子であると聞かされ、綱手の心のうちは張り裂ける許りであつた。益満は彼を一と刺しに刺さうとした。

「お、突け、突け、牧仲太郎が血を享けた百瀬だ、綱手を籠絡した月丸だ、計る事が破れた以上、命は要らぬ、サア突けツ、首を刎ねエ」

「ウム、貴様は、貴様は……」  
小太郎は病床上に呻吟しながら刀を抜かんとした。傷が痛む、綱手はもう矢も楯もたまらなかつた。思ひつめた彼女はいきなり我と我が胸を突いた。だが綱手は……心の幻に描いてゐた戀しい益満に、己が不淨な身體と欺かれた事を云ひ得ず、死に導かれて行くのだつた。  
「許して……許して……益満さま……」

第四の一 江戸薩摩邸の庭園  
大詰 同邸書院の大廊下

小藤次からお由羅へ——初めの思ひ通りお由羅の側女となつた深雪はお由羅一味の陰謀を探らんものと神妙に仕へた。だが、一日調所出仕の際八郎太の最後を聞かされ、思はず口を滑らした深雪は、八郎太の娘である事を知られ、むごい折檻を受けた。だがお由羅の弟小藤次の口添へて命を救はれた。調所出仕の用向きは大政齊興公は秘密書類を盗まれた事を言上した上、自刃せん覺悟だつた、お由羅との對面半ば服毒した調所は遂に吐血した、それとみた一同はおどろき齊興に告げた、調所は苦しげに喘ぎ、言上した。

「笑左衛門が死は武士らしく……茶坊主上りと謳はれたうは御座りませぬ——これを……これを御披見下されませう、ウム、……さうして藩中の軋轢融和のために……何……何卒お情に……笑左衛門の死をお役立て下さらば本望に存じます」

「ウム、密貿易の書類を盗まれし責めと……藩の和平を計るために木曾川工事以來疲弊せし島津家を舊に復した功績、あの其方は、尙ほ斯くまで心勞してくれたか、忝けないぞ、笑左衛門——心苦しく共、身が膝を枕に心安らかに死んでくれい——」

調所は満足氣に頷いた。一同は愁然とした。  
一轉小太郎と益満は渡り廊下で牧をたゞ一と刺しに突き刺した、齊興のおなり、齊興は牧をみて、再び暗然  
「今日限り余は隱居致し家督は齊彬に譲る事にした、……かくして南國の大藩島津家の家騒動も幾多の波瀾に波瀾を重ね、目出度く落着するのであつた。」



# 劇壇往來

## 東西大歌舞伎

中 座

一月三十一日初日  
午後二時開幕

【狂言】一番目「假名手本忠臣藏、道行より山科まで・中幕」梶原平三試名劍、星合寺。新作「お富の貞操」二幕・歌舞伎十八番の内「勸進帳」一幕・二番目「延享五人男」三場。大喜利新歌舞伎十八番の内「紅葉狩」一幕。

【役割】梶原平三、富樫左衛門(鷹治郎)、妻戸無瀬、判官義經、藤井右門(福助)、奴關助、南郷力丸(右團次)、大星力彌、囚人呑助、山神(長三郎)、扇藤浪、龜井六郎、仲間勘藏、從者運平(吉三郎)、露拂の侍、伊勢三郎、荷持作介、從者八内(駒之助)、露拂の侍、馬丁一松(八百藏)妻お石、奴駒平、女中お富、奴小萬本名おまぢ(魁車)、女小姓花野(章景)、先箱の仲間錦部九郎、僧廓念(廓正)、先箱の仲間新門辰五郎、片岡八郎、百性甚八(九團次)、仲間角平、石垣堅藏、番卒軍内(箱登羅)、下女おりん(延女)、青具師六郎太夫(市藏)、大星由良之助、俣野五郎、乞食新六、實八村上新三郎、日本左衛門、實八濱島庄兵衛(延若)娘小浪、赤星十三郎(扇雀)、扇山吹、心蓮尼、侍女望月(成太郎)、太刀持、侍女松代(延太郎)松川三十郎、常陸坊海尊、庄屋三右衛門(大吉)、原藤次、忠信利平(壽三郎)、娘梢、辨天小僧、將軍惟茂(我童)侍女田毎(ひとし)加古川本藏、大庭三郎、武藏坊辨慶、息女更科姫實八鬼女(幸四郎)。

新喜劇  
家庭劇 お目見得  
浪花座

二月一日初日  
正午 二回開演  
五時半

【狂言】第一「女人禁制」一場・第二「目と耳と口」三場・第三「榮光の蔭に泣く」三場・第四「白い手の指輪」一場・第五「風車」三場  
【配役】大工惣吉、實業家濱口、風車屋福三(十吾)、高橋彦次郎、按摩三輪、投手中川、船員酒井(天外)、手塚治作、八百屋鏡公、原爺與兵衛(十次郎)、伯父安兵衛、笛屋國松(三樂)、金貨原田、母お仙(天照)、酒屋半吉、學生武田(三郎)、荒物屋金助、若者清七(一郎)蘭問屋松本、案内人(致雄)講中の人、近所の男、番頭政市(富士島)、記者松澤、若者喜作(鏡彌)、事務員波野、團長大村、友人吉川(賀川)、魚屋新太、實業家小田(小織)、妹初子、姉八重梅、藝妓小奴(石井)、案内係おしま、仲居お喜代、奥様風の女(春日)、姪おすみ、妻さよ子(村)

〔壇 劇 の 月 二〕

田、女將おなを、妻おきよ(守住)仕立屋おなつおます、女中おつる(濱地)茶屋女おきぬ、お花、藝妓秀香(如月)妻お節、女房お辰、女主人およし(春野)

新聲劇

お目見得

角座

二月一日初日  
正午 二回開演  
五時半

【狂言】第一正木不如丘原作、御所山人脚色「木賊の秋三場・第二大阪毎日新聞連載直木三十五原作、佐々木金象脚色並ニ演出「南國太平記」五幕十三場

【配役】益滿休之助(辻野)、大目附名越左源太、庵主義親(新田)、村人太吉、巾着切庄吉(小波)、村人宗太、家老碓山將曹、百瀬(吉田)、村人伊太、横目附四ツ木(横田)、馬吉の父寅之助、仙波八郎太、家老調所笑左衛門(伊川)、祐筆袋持、齊興の次男久光(武澤)、村人利八、伊集院伊織、仙波の小者文藏(山本)薩摩藩主島津齊興(芝田)、村

長村井信造、牧仲太郎(藤本)、村人馬吉、仙波小太郎(山口)、愛妾お由羅の方(和歌浦)、常磐津師匠富士春(音地)、雇婆おため老女梅野(中村)、仙波の妹娘深雪(福岡)侍女(吉岡)村長娘おきぬ、仙波の姉娘綱手(小松)、老女玉城(金剛)仙波の妻女七瀬(澤井)馬吉の妹お六(富士野)、

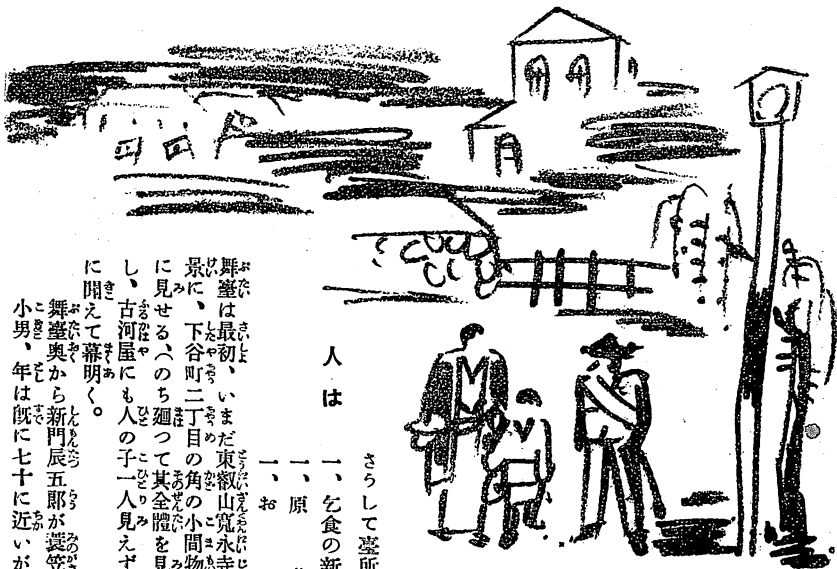
文樂座二月本格興行

二月一日初日  
午後三時開幕

【狂言】前「一谷嫩軍記」陣門より陣屋の段まで、中「新版歌祭文」油屋の段、切「鶴山古跡松」中將姫雪責の段隣山の段  
【太夫三味線劇】前「一谷嫩軍記」陣門の段(直實、和泉、貴鳳、平山、長尾、鏡、直家町、敦盛富、綾、糸剛六、歌助、芳之助)組打の段(口源路、糸猿太郎、文、糸友衛門、奥大隅、糸道八)陣屋の段(中相生

糸可鳥、糸猿糸、つばめ、糸仙糸、切津、糸友次郎)中「新版歌祭文」油屋の段(中駒糸重造、文字、糸勝平、切古叔糸清六)切「鶴山古跡松」中將姫雪責の段(中鏡、糸新左衛門切土佐、糸吉兵衛、胡弓新之助、市松)鶴山の段)中將姫南部、嘉藤太、猿相生、鳥つばめ(毎日替り)岩根御前辰、桐ヶ谷長子、浮舟陸路、播路、糸吉彌、友造、露太郎、友平、綱右衛門、友若、清二郎、友二(吉左)

【人形劇】妻相模、中將姫(文五郎)右大臣豊成公(玉次郎)平山武者所、山字屋佐四郎(玉幸)梶原平次景時、鈴木彌忠太(門造)無官太夫敦盛、奴角力(紋太郎)乳母お庄、岩根御前(小兵吉)熊谷直家、油屋お勝(政龜)源義經、浮舟(玉七)玉織姫、娘お染(扇太郎)石屋彌陀六、油紋勘六(玉松)熊谷直實、手代小助(榮三)藤の局、桐ヶ谷(紋十郎)



食満 南北脚色・森田信義演出  
芥川龍之介原作・松田種次舞臺裝置

# お富の貞操 全二場

(中座二月興行上演)

## 第一場

時は 慶應四年五月十四日、  
午過ぎから夕方まで。  
處は 下谷町二丁目小間物屋  
古河屋政兵衛の表と、

さうして臺所と中の間と茶の間を見た處と。

人は 一、乞食の新公(實は村上新三郎)

一、原 藤 次 一、新門辰五郎  
一、お 富

舞臺は最初、いまだ東叡山寛永寺の堂宇が立派に現存してゐた頃の景に、下谷町二丁目の角の小間物屋、古河屋政兵衛の店の入口を上手に見せる(のち廻つて其全體を見せる)五月雨降りしきつて通行人なし、古河屋にも人の子一人見えず、舞臺は全くの空虚、兩音のみ靜かに開いて幕明く。

舞臺奥から新門辰五郎が襦袢に身をつみ出る。(辰五郎は色白の小男、年は既に七十に近いがなほ嬰孩たるものがある。(着附は角

切輪つなぎの廣袖に緋のちりめん

ちばんといふこしらへ)花道(或は

下手から)上野彰義隊の一員原藤次

が、これも小倉の袴、袖の着附朱

の大小、高下駄傘をもつて出る、行

きあふ。

新門 オツ、原の旦那ですかい。

原 誰だ、(すかして見て)何だ、新門か。

新門

原 降るのに何處へ行くのだ。

新門 ヘイ、あすはいよいよ、上野の總攻撃と

官軍から云つて来たといふぢやありませんか。

上野界隈の町家へ立退くやうに云つ

て来いと、天野様の仰有りつけて、かたツ

ばしから觸れて行つたのですが、官軍の方

でチャンと言ひ渡し濟んでゐると見えて

人の子一人見えねえので辰五郎も手持無沙汰で引けえす處ですぜ。

原 さうか、きんぎれも莫迦に出来ないね

大變すばしい事やるぢやアないか。

新門 旦那、旦那はこの雨に何處へ出かけるのです。

原 ハハ、、、。

笑つて答へない、新門何か其中から

心のうちをよむやうに、

新門 へへ、、、旦那妙な噂を出て聞いてゐますぜ。

原 何を？

新門 へへ、、、旦那、隠したつて駄目だ、ア此處ですれ。

小間物屋の店を隠してしゃくつて間ふ

原 何がさ？

原 はいよくとぼける。

新門 へへ、、、ちよいと流皮のむけてゐる

つて噂ですぜ。

原 變な奴だな。

新門 もうけふが名残だ、つらを一目見に来

た、なんて寸法ですかね。

新門は妙にこだわる原は妙な顔をし

て、何か間違つてゐやアしないか。

新門 間違ふもんですか、小間物屋の古河屋

政兵衛、ちげえねえ此處だ、原の旦那、お

富とか云ひましたね。

原 ハハ、、、莫迦、何を云ふのだ。

云ふうちに心の中をよまれた

と云ふ耻かしさが看出される。

新門 若いんですつてね。

原 莫迦、そんな事よりあすは一働きする

のだ、薩摩や長州や、土州の田舎者にこの

江戸をあらさせたくはないからな。

新門 さうですとも、錦ぎれの奴め、いゝ事

にして、このお江戸を踏みあらしやアがる

むていに癪にさわつてならねえのだ、この

辰五郎も一生一度だ、あすは働きますぜ。

原 小氣味のいゝ奴だ。

新門 旦那、山へけえりませう、どこやら

こゝのうちもがらんだらうのやうですぜ。

原 ハハ、、、山へかへつて名残の盃で

もくむか。

新門 さうなさいまし、天野の旦那だつてま

つてらつしやいませうよ。

新門、

原 へい、お前も將軍家には大分御ひいきになつ

てゐるやうだな。

新門 へい、(涙をやけにぬぐふて)水戸へお

出でなすつたのでガツカリ力がぬけたやう

でムいますよ。

原 さうか。

歩きながら、

新門 わつしやア勝の旦那のやり口がわから

ねえ、やうに思ふのでムいます、

原 まあ、そんな事を云ふな、房州殿には

又房州殿の考へもおありなさるのだらう。

新門 さうですかね、さう云やア、公方様も

勝、勝といつも勝になすつてゐらつしやつ

たやうだ。

原 其處に房州殿のえらいところがあるの

だ。

こんな話をしながら二人、下手か又

は引かへして上手へ這入る。雨、ひ

としきり、きつ降る、猫の啼き聲

が聞えて道具を半がへしにして下手

が古河屋の水口、腰高障子、壺所の

用具、中の間、上手に茶の間の丸まどなど見せたる體。

猫にやん／＼と啼いてゐる、突然、舞臺奥から腰高障子をガラリツとあ

ける、猫びつくりして三寶荒神の棚へ逃る、あけた障子から乞食の新公

孤だけが新しくあとはぼろ／＼の着附年三十位、人品賤しからねど、ひ

げぼろ／＼とはやしたる男、今しがたの猫の聲を聞きつけた體で障子の

きわで、新公 三毛／＼。ソツと呼ぶ、さうして新公は髪

の水を切つたり顔の滴をぬぐつたりしながら、

三毛、再び呼ぶ、酒むしろをぬいで上りに腰を下るす、三毛はソロ／＼聞き

おぼえのある人の聲に下りて来る、新公の傍へツクネんと座る。

新公 オツ、三毛公、どうした。なで、四邊を見て、

誰もゐない處を見ると貴様だけ置き去りを

食はされたな、ハハ、ハハ、。

笑ひながらふところ、から短銃、明日の戦争につかふ）を取出してジツと見る。

三毛公、あすになると、この界限へも雨のやうに鐵砲玉がふつて来るぞ、そいつに當ると死んぢまふから、明日はどんな騒ぎがあつても、一日様の下にかくれてゐるよ、お前とも長いお馴染だ、が、けふが別れ

だぞ、明日はお前にも、大厄日だ、おれも明日は死ぬかも知れない、よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一緒に、掃だめあさりはしないつもりだ、さうすれば、お前も大喜びだらう。

云ひながら雨音がだん／＼はげしくなるに聞耳立て短銃に玉をこめ出す

三公、それとも名残だけは惜しんでくれるか、イヤ猫といふ奴は三年の恩も忘れると云ふから、お前も當にはならなさうだが、マア、そんな事はどうでもいゝや、唯

おれも居ないとすると、

こゝまで云ふた時、きつく傘に雨の當る音聞えて、突然紅葉傘をすぼめ

てガラリツと水口の腰高障子をあける、一しよに顔見合し。

お富 アツ……

お富 双方で駭く。新公は手はしかく短銃をかくす、それには氣がつかぬが、びつくりして這入つて來かけたお富は一度往來へ引かへしかけてよく／＼すかし見て

何だい、お前新公ぢやアないか。可なりツンケンドンに云ふ、木綿着の小さつぱりとした風俗、新公はお富と解つて、イヤに落つてニヤニヤしながら、

新公 どうも相済みません、あんまり降りがきついでんだから、ツイお留守へはひこみました

かへた譯でもないんです。お富 驚かせるよ、本當にいくら明き巢狙ひぢやないと云つたつて岡々しいにも程がある。立つたまゝで傘のしづくを切つてゐる。

サア、こつちへ出ておくれよ、わたしは家へ這入るんだから、

云つてもまだ外にゐる。

新公 ヘイ出ます、出ると仰有らないでも出ますがね、姐さんまだ立退かなかつたんですかい。

お富 立ち退いたのさ、立ち退いたんだけれども……そんな事はどうでもいゝぢやアないか。

新公 スルト何か忘れ物でもしたんですね、マアこつちへお這入んなさい。其處では雨がかります。

かういふて新公は水がめから水をくんで足を洗ひ出す。

新公 この驟ぎの中を取りに歸るのぢや何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は、之姐さんお富さん。

お富 何だつていゝぢやないか、それより、さつさと出て行つておくれ。

いよ／＼ツンケンドンに、しかもブツキラ棒にいひ切る、フツト氣がついて、やゝ語氣をゆるめて、  
ね新公お前うちの三毛を知らないかい。

新公 三毛、三毛は今此處に……

見廻し、

オヤ、何處へ行きやアがつたらう。

キヨロ／＼見廻した、お富もさがし出す二人の目に三寶荒神にのつてゐる三毛が目につく。

新公 猫ですかい、フン忘れ物といふのは？

お富 猫ぢやア悪いのかい、三毛、三毛、サア下りといで、

呼ぶ。

新公 ハハ、ハハ、

突然笑ひ出す、お富はキツと見返つて、

お富 何がおかしいんだい、家のお上さんは三毛を忘れて来たつて、氣違ひのやうになつてゐるんぢやアないか、三毛が殺されたらどうしやうつて、泣き通しに泣いてゐるんぢやアないか、わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざ／＼歸つて来たんぢやアないか。

新公 ようござんすよ、もう笑ひはしませんよ、もう笑ひはしませんがね。

なほも笑ひを無理に、かみしめて、

マア考へて御覽なさい、あすには職さが始まらふと云ふのに、高が猫の一匹や二匹、これはどう考へたつておかしいのに違ひありませんや、お前さんの前だけれども、一體こゝのお上さん位いわからずやのしみつたれはありませぬぜ、第一あの三毛公をさがしに、

いふをかぶせて、

お富 おだまりよ、お上さんの讒訴などは聞きたくないよ。

いよ／＼ツンとするこの雨の中を使ひによこしたお上さんが憎くなる、しかし、新公は笑ひ聲でなほつゞける。

新公 第一あの三毛をさがしによこすでもわかつてゐますア、ねえ、さうぢやアありませんか、今ぢやもう上野界限立退かない家はありませんか、シテ見れば町家は並んでゐても人の居ない野原と同じ事だ、まさか狼も出ますまいけれど、どんな危ない目に逢ふかも知れないとまづ云つたものぢやアありませんか。

お富 そんな餘計な心配をするより、サツサ

と猫をとつておくれよ……これがいくさでも始まりやアしまいし、何が危ない事があるものかね。

新公 冗談云つちやいけません、若い女の一人歩きが、かう云ふ時に危なくなけりや、危ないと言ふ事はありませんや、早い話が此處にゐるのはお前さんと私と二人ツきりだ。

妙に傍へよつて、

萬一、私が、妙な氣でも出したら姐さん、お前さんはどうしなさるね。

お富 何だい新公……お前わたしを嚇さうかつて云ふのかい。

新公 嚇かす、嚇かすだけならいゝぢやありませんか、肩にきん切れなんぞくつつけてゐたつて、風の悪い奴らも多し世の中だ、ましてわたしは乞食ですぜ、嚇かすばかりとは限りませんや、もし本當に妙な氣を出したら、

まだ云ひ切らぬうちお富は持つてゐた紅葉傘で新公の頭を叩く、さうしてお富は傘をもつて立つて身がまへする。

お富 生意氣な事をお云ひでないよ。

又打ちおろす、新公はかわさうとして又うたれる、猫はこの騒ぎに三寶荒神の松の植えたのをひつくりかへす、ひるんでゐる新公を傘でビシ／＼うちながら、

お富 コン畜生／＼。

打つてけたのを身をひいて傘をひつたくつて傘をほうり出してお富に飛びかゝる。

お富も争ふ。

新公 この阿覽。

つきのけられて水口の方に、うしろに障子を楯にして新公は身がまへるお富は帯の間にはさんである双物を逆手にもつてゐる。

新公はデツと見てゐたがニヤツと笑つて、

新公 サアいくらでもジタバタして見る。短銃を出す。

お富は口惜しさうに新公の顔を見つめてゐる。

新公 いゝかい、お富さん。

じらすやうに笑ひをふくんだ聲でいふ。

この短銃がドンと云ふてあの猫が逆縁にころげ落ちるんだ、お前さんにしても同じことだぜ、そらいゝかい。

お富 新公。

お富は結叫する。

いけないよ、うつちやいけない。

この聲で新公の眼はお富の方に向いたが、

新公 いけないのはしれた事だ。

お富 打つちや可哀想だよ、三毛だけは助けやつておくれ。

お富はホツと安心した顔色になる。新公 ちやア、猫は助けてやらう、その代り横柄に云ひ放つ。

その代りお前さんはいゝだらうな。

ニタ／＼してゐる、お富は憎しみ、怒り、嫌悪、悲哀、その外いろ／＼の感情がごつたに燃える、さうしてやはりだまつて坐つてゐる、新公はシツと見てゐたが、うしろを通過つて茶の間の方へ行き、ガラリツと障子



を開け放して、お富のうしろからジツと見下す、お富はねぢるやうに横む。

お富 いけないよ、いけないつては、

両手に新公をとめた時、短銃をバツタリ床の間へ落す。

新公 いけなきア茶室へおいで、

ニタ／＼してゐる。

お富 いけすかない。

つぶやいて突然立ちあがつて、ふてくされたやうにサツサと茶の間へ這入る。

しばらく、雨の音

新公は茶室へは入りかけて、ジツと一間を見てゐるが、苦しみに笑ひ出す。

新公 ハハ……冗談だ、冗談だよ、もう、こ

つちへ出て来ておくんさい。

しばらく無言。

やがてお富は妙な顔をして出て来て新公は三毛をよんで抱きとりだまつてお富の顔を見ぬやうに渡す、さうしてお富は下駄を穿いて出やうとし

た手へ雨傘を渡して一切無言、この内お富は猫を抱き雨傘をもつて出て行かうとする。

新公 ちよいと姐さん。

顔を見ぬやうに呼びとめる。

お富 エツ。

お富はちよつとギョツとする。

新公 姐さん、私は少しお前さんに訊きたい

事があるんですがね。

お富 何をさ、

新公 何をつて事もないんですがね、マア兎も角、女の一生の内ちやア大變な事だね、それをお前さんはその猫の命とかけがえに……こいつどうもお前さんにしちや亂暴すぎるちやアありませんか。

新公は小言で問ふ、お富はふところ

の猫をあやしなげだまつてゐる。

新公 そんなに猫が可愛いんですかい。

お富 そりやア猫も可愛い、しね。

あとが言へない。

新公 それとも又お前さんは近所でも評判の主人思ひだ、三毛が殺されたとなつた日にや、このうちのお上さんに申わけがない……

……といふ心配もあつたんですか。

お富 ア、三毛も可愛いしね、お上さんも大事にや違ひないんだよ、けれどもわたしはね。

云ひ流して。

何と云へばよいのだらう、唯あの時はあゝ、しないと何だかすまない氣がしたのさ、新公大きに。

スタ／＼出て行つてしまふ。

新公は見送つてガタリツと障子をと

ぎしてこつちへ来る。

上野の鐘が一つゴーンとひびく、びつくりして見上げ、水がめのひしやくに水をくみあげてガブ／＼とのんで。

新公 村上新三郎源の繁芳、イヤ今日だけ

は一本やられたな。

又、水をのむ。

暗転

## 第二場

時は 明治二十三年三月二十六日。  
處は 上野竹の臺、第三回内國博覽會

人は

場附近。

一、村上 新三郎

一、原 藤 次

一、前田 正義

一、田口 卯三郎

一、澁澤 榮二

一、岡 倉 覺 藏

一、原の長男 藤吉

一、同長女 おとき

一、同次男 敬二

一、原の妻 お富

其頃の風俗したる仕出し

(暗転のうち)

(上野戦争の砲聲など聞かし)

(やゝ舞臺出来た頃より)

(明治二十三年頃の樂隊)

舞臺、は竹の臺の第三回内國博覽會開會式當日、その附近の光景。

その頃の風俗をあらはす仕出し行きすぎると開會式より戻る一行前田正義、田口卯三郎、澁澤榮二、岡倉覺藏等出る。

前田 イヤ皆様の御盡力で大變立派に開會式

を舉行しまして満足です。

澁澤 さすがに第二回よりすべてが順る進歩しましたやうですな。

田口 當然かもしれませんが、近いうちに萬國博覽會をも開會したいものですな。

岡倉 二十三年前には、彰義隊と官軍がこの上野に戦つて、たつた一日ですが激戦でしたね、あの輪奐の美を極めた忍岡の堂宇も一夕にして煙と化した事は、何だか今昔の感にうたれるやうですな。

前田 岡倉さん、世の中も二十有餘年經つと大分に變りますな。

澁澤 明治維新の大業の前には幾多の犠牲は止むを得ませんね。

岡倉 さうです〜。今日の盛典を祝するため、どうです精養軒でも。

田口 いゝでせう、お供ませう。

一同去る。

二十三年後の原藤次は五つになる次男敬二を抱き、長男藤吉と共に出る

うしろより、お富、長女おときの手をひいて何か其頃の流行の玩具を持たせ出る。

原 何か買つてやつたのかい。

お富 ハイ、おときがこれが欲しいといふもので、

原 さうか、大變人が出るね。

お富 けふは博覽會の開會式なのでせう。

原 さうさ、式も終つたらしいね。

お富 入場出来るのでせうか。

原 聖駕が還幸になれば一般の入場を許すだらう。

云ひながら来る。

村上 新三郎、例の駝鳥の羽根の前立て、殿めしい金モールのかざりつけ

ある洋服、小さきサールベルで出る、思はず原と出逢ふ、双方すかさやうにして、

原 オツ、村上さんちやありませんか。

村上 オツ、原君かね。

原 ハイ。

村上 妙な處で逢ふね、君この邊ちやアなかつたかね、さうさ丁度二十三年前だつたね

君は彰義隊の一員、僕は官軍の一兵として

原 さうです〜、たつた一日でしたのは

げしい職さでしたな。

村上 ハハ……時に君の子供達かね。  
 原 ハイ……あの頃から知り合のこの山下の古河屋政兵衛のうちにゐた親類の者でね、當時下女のやうに同家に居つたのを、妻にして、御覽下さい、こんなに大勢出来てしまつたのですよ、ハハ……かうなつては徳川の恩祿だの、何のと、もうそんな事を云つておられませんか、ハハ……。

この内心づき、

村上 エツ、お富さんですか。  
 お富 エツ。  
 村上 オツ、お富さんでしたね。  
 お富 エツ。  
 ジツと見て。  
 アツ新。  
 云ひかけて、  
 アツ、やつぱりえらい方でしたね。  
 原 知つてゐるのかね。  
 お富 ハア。  
 あきれてゐる。  
 村上 お富さん、イヤア思ひ出しますね、大變な雨でしたな。  
 お富 エ、。

村上 さうく、あのいんごうなお上さんは達者ですかね。  
 お富 エ、  
 村上 三毛はどうしました。  
 お富 猫。  
 當時を思ひうかべて改めて新公のかほを見る、原は手持無沙汰に二人を見る。  
 村上 猫は恐らく死んだでせうな、ハハ……

……。

お富 ホホ……  
 お富も心から晴々しく笑ふ、原もつりこまれて、  
 原 ハハ……  
 笑ふ、新公の村上は心からおかしくウワハハ……  
 大きく笑ふ。

——幕——

◇ 刷印的踏高……匠意るな新斬……案文るな秀優 ◇

# 米田號印刷所

大 阪 市 西 區 本 田 一  
 電 西 五 六 三 〇 九 二 〇 〇 番

（カ）  
 御下命次第送呈（見本）

大森痴雪作

# 延享五人男 全三場

(中座 二月興行上演)



【時】 延享四年一月。

【處】 遠州中泉在。

【人】 濱島庄兵衛(異名日本左衛門)

おまうち(異名奴の小萬)

藤井右門

辨天小僧菊之助

南郷力丸

忠信利平

赤星十三郎

庄屋三右衛門

同 惣右衛門

百姓甚八  
下男作介  
心蓮尼念  
僧廓藏  
仲間勘藏

(船子數名)

(一) 佐夜の中山

舞臺中央に一株の老松、その傍に自然石の姫嫁塚、上手に半朽ちた小屋掛けの出茶屋の跡、登りの山道が花道の切穴から續き

出茶屋の前から迂回して爪先上りに上手へ延びてゐる、後は絶壁の體そのむかふに無間山の峰が見える。延享四年一月下旬、風疾く雨を孕んだ空模様。

辨天小僧菊之助、町娘の扮装、おこそ頭巾、若き尼僧心蓮を扶けて山道から出る。

菊之助 漸ふのことで夜泣松まで來ました、もう爰まで來れば大丈夫、安心をしなさがよい、したが無辛度かつたであらうな。心蓮尼 いゝえ、私よりもあなたこそ。

菊之助 何の私が草臥やう。途中でお前を知つた人に出逢ふても女連れの二人故、誰一人怪しむ者もなふて、心蓮さんどちらへなども、気軽に會釋して行く様子の面白さといふたら、はゝゝ。

心蓮尼 ども私は一足々々、お寺から遠のけばのく程、佛様やお師匠様に反く自分の行ひが段々恐ろしくなつて参ります。

菊之助 またしてもそんな氣の弱いことを、この間もお前は、頑はない時分に寺へ貰はれて、夢のやうな月日を送つて來たが、今になつて考へれば、何の爲に世を捨て、生甲斐のない一生を送らねばならぬのかと、沁々いふてゐなされたのではないか。

心蓮尼 はい、それは申しました、この間圖らずお目にかゝつた時、あの十三さんやあなた、意氣地なしぢやと、私のことをお笑ひなされたので、つい心の底に思ふてゐた本統のことを申してしまふたのでござります。

菊之助 それなればこそけふといけふ私の勧めに従ふて寺を抜け出して來たのではないか。一旦覺悟を極めて佛様の世界を飛出し

たからは、後ばかり振返るやうな未練らしい氣は出さぬがよい。心蓮さん……いえもうそんな佛臭い名は呼ばまい俗名はお雪さん……さうであつたな、お前に適はしい何といふよい名であらう。なアお雪さん、菊之助はそつと心蓮の手に觸れる。私には還俗してからのお前の美しさがはつきりと見へてゐる。

心蓮尼 まア滅相もない私のやうなもの……

菊之助 いえ、私は生れてけふ日まで、お前のやうな美しい人に出逢ふたことがない、お前ほど最愛しいと思ふた女子はない

心蓮尼 まア、あなたは……

菊之助 お雪さん、お前は私にこのやうに思はれることが迷惑かえ。

心蓮尼 いえ、嬉しう御座ります。

あゝの十三さんは、途中で待つておいでなさると仰しやりましたが、菊之助は幻想を破られてギクリとする。

菊之助 お前はあの男が戀しいのかえ。

心蓮尼 え、いえ、あのさういふ譯ではござりませぬけれど。

菊之助は嫉妬の表情、雲が興ひかかつた體で舞臺がほの暗くなる。

まア氣味の悪い雲が、思はず菊之助に寄添ふ、さつと雨の音。

あれ降つて参りました。

菊之助 幸ひ出茶屋のあの空小屋でお雪さん暫らく雨宿りをして行きませう。

手を取合ふて二人は空小屋へ入る舞臺空虚。

雨がしきり激しう降り、やがてだん／＼蕭らいて行く、小屋の内から二人の對話が漏れる。

心蓮尼 え、あなたは……

菊之助 夫もお前故き、吃驚するには及びはしない、落付いて私のいふ事をよく聞き。



山道から日笠村の庄屋三右衛門と百姓甚八、三右衛門の従弟大池村庄の屋惣右衛門、荷持作介の四人旅拵らへて出る。

三右衛門 悪い所で降られたな。

惣右衛門 でも大したこともないのでよろしう御座いました。

三右衛門 もう爰まで来れば在所へ歸つたも同じだ、いい鹽梅に雨も大方あがつたやうだから、爰で一憩みして行かう。

四人それく石へかける。三右衛門等は、糞入を取出す、それを見て作介は燧石を打つて火をすゝめる。

惣右衛門 だが叔父さん、今度の江戸下りほど上々首尾のことは滅多にありませんな。

三左衛門 さうとも、行きがけは随分ひやひやしたものだ、願書は早速お取上げて町奉行様直々にお取置しなかつたといふ次第だ。もうかうなりや日本左衛門も五人男もあつたものか。

甚八 早速急飛脚が京大阪へも飛んで、西と東とから挟み撃ちで、お召捕になるといふのだから、全く袋の鼠で御座いますよ。

惣右衛門 私などは押込みを喰つて千兩もやられたのだから口惜しくつてたまらない。おまけにその時の彼奴

等の云分が癪に障るおのれは強然非道な奴だ、小作人の生血を絞つた上に、貸金を名として他人の田地田畑から商賣までも奪ふなんぞと吐しやがつた。

三右衛門 俺の所へ押かけて来た時も同じことだ、然も滅多に知れさうな筈のない内證のことまで知つておやがるのだ。

作介 やつぱり内通をする奴があるので御座いますよ。

惣右衛門 さうに選ひない、何しろ見付、中泉、袋井は素より南郷村から掛川、金谷と

かけてはまるで彼奴等の縄張内も同様で、商人や貧乏人はいづれもお蔭を蒙つての

だから内通位はまだなこと、張番だの下見だのと子分同様に働くとはいふ噂だ。

三右衛門 そりやな、どうせ此方も無理はしてゐるさ、だが無理でもしなけりや金の貯る譯がない、それが當世だ、何も彼奴等の知つたことぢやない。

惣右衛門 さうだとも、兎に角度胸を据えて江戸表へ訴入れた私等のお蔭で、この遠州

一圓はいふに及ばず、東海道から中仙道、伊勢路へかけて七八ヶ國の金持は皆助かる

譯だから、私等の所へウンと禮金を持って来てでもいゝ譯さ、はムム……。

作介 だが噂によると、あの日本左衛門の云分と云ふのにも一理窟はあるのでが、すて何でもその、この頃のやうに世の中が不景氣で、何處も此處も貧乏人だらけになるのは、金持がドシ／＼金を抱込んでしまふよ、世の中が唯金持ちの天下になつて、民百姓は素より大名も侍も金と來ちやキウの音も出ないやうな始末だから、その世直しの爲に強慾な金持ちと見りや……。

三右衛門 これ、何を吐すのだ、向先を見て物を云へ。  
作介 へえ、

菊之助 小屋から菊之助が出る。

三右衛門 あゝ吃驚した、先刻から爰らにゐなすつたのか。

菊之助 はい、あすこで雨宿りをして居りましたので、

三右衛門 ふう……まア火ならおつけなさい。  
菊之助 有難う存じます。

秋から煙管でも取出すやうな様子

で近づき突如七首で刺す、三右衛門 門控となる。

惣右衛門 や、おのれ女の分際で、三人立上る。

菊之助 女ぢやねえ、日本左衛門の身内で辨天小僧の菊之助といつたら手前達も名前位は知つてるだらう。やい、よくも江戸へ訴人をしやがつたな。

三右衛門 敵を討つてくれ、相手は高が一人だ。

惣右衛門 甚八、作介ぬかるな。

惣右衛門と甚八は旅差しを抜いてかゝる、三右衛門も手を買ひ作ら脇差しをぬく。作介は下手へ逃去る。

とゞ三人とも谷底へ斬り落される小屋から心蓮が身を慄はしながら出る。

菊之助 お雪………。

心蓮尼 はい………。

菊之助 怖かつたのか。

心蓮尼 はい………。

菊之助 何もそんなに慄えることはない。さ

ア、こつちへ來るがいム。

心蓮尼 あなたは日本左衛門の………今聞いた通りだ。

菊之助 あの……十三郎さんも。

菊之助 赤星十三といつて彼奴も仲間の若造さ。

心蓮尼 えつ。

菊之助は又嫉妬を感じる體、おど／＼して身を退く心蓮の手を捉へる。

上手から南郷力丸と忠信利平が走つて出る。

力丸 菊之助、今の騒ぎはわれだつたのか。菊之助 思ひがけない、こんな所へ二人連れて何しに來たのだ。

利平 江戸へ訴人に出かけた向笠の三右衛門と甚八、大池の惣右衛門の三人がけふ在所へ歸つて來ると内々報らして來たものがあつたから、南郷と二人で一丁先の夜泣石で待構えてゐたのだ。

力丸 所が上で只ならぬ騒ぎが聞えたので駈付けたが、菊、どうしたのだ。

菊之助 こいつは近頃氣の毒だつたな、その

三人ならたつた今俺が片付けた。  
力丸 われ一人でか。

菊之助 出し抜いたのぢやない、圖らず爰で  
出ツくわしたのが彼奴等の因果だ、あの通  
りさ。

力丸 何につけても早い奴だな。

利平 どつちにしてもこれで當座の腹癒せは  
出来た。おい、菊、その尼さんはどうした  
んだ。

菊之助 これか、これは大事な俺の情婦だ。

利平 笑はせるな、は………。

力丸 それはさうと、江戸へ訴人をしたから  
は、此方も安閑としちやわられぬぞ。

菊之助 急飛脚が京大阪へも飛んだといつて  
ゐた、西と東で海道を斷ち切つて、八州方  
が向つて来るだらう。

力丸 てばいよく、高飛びだな。  
利平 どうせさうなりや別れくにもなるだ  
らうが、お前達は黙つて、この儘飛ぶつも  
りか。

力丸 そんな馬鹿なことがあるものか。菊、  
お前も、よもや泣癪入りはしなからうな。  
菊之助 頭だ兄弟分だと誓つた言葉の手前、

けふが日まで文句なしに動いて来たものゝ  
緊いだ手を放して一本立になると極まりや  
鬱憤、頭に云分があるのだ。

力丸 さうとも、第一、三年越頭任せのあの  
金はどうなるのだ。

利平 分つた。落合つたのが丁度幸ひだ、爰  
で相談を極めて置かう。

力丸 よからうとも、だが赤星一人ゐな  
いのが残念だな。

菊之助 どうせ彼奴は大きな夢ばかり見てゐ  
やアがるのだ、居てもゐなくつても同じこ  
とさ。

利平 おい、爰へ来てくれ。

力丸と菊之助が寄る時、心蓮は思  
ひ切つて迷やうとする。菊之助は  
素早くその手を捉へる。

菊之助 逃る氣か。  
心蓮尼 でも私は………。

法衣の袖を貫いて七首を夜泣松の  
幹に突刺す。

菊之助 これでおとなしく待つてらだらう。  
利平 こつちこそお待遠様だ。

三人笑ふて三鼎になる。  
風の音に乗つて山寺の鐘の音が響  
いて来る。

(二) 國分寺境内

舞臺の上手より正面へかけて、荒果た寢殿  
の建物、正面に崩れかゝつた階段、屋根は  
ゆるく波をうち、薛戸は大牛失はれて古障  
子と變つてゐる。下手の端に裾を板圖ひに  
した鼓樓、その正面の入口から僅に往昔を  
思ふ彩色の剝脱した扉などが見えてゐる、  
寢殿と鼓樓の中間の正面は關覽堂の一部、  
平舞臺のよき所に數個の礎石と朽ち残つた  
大木の根など。  
幕で間なき頃。

旅僧廓念が下手から出る。  
廓念 誰ぞおきつしやらぬかな、皆お留守か  
な。

上手から赤星十三が出る。  
十三 久圓寺の和尚か、何處へ行かつしやつ  
た。

廓念 濱松からの戻り道ぢやがお頭は、



十三 一昨日から留守ぢや。  
廓念 左様か、これ十三殿。

四邊を見廻してさゝやく、十三の顔色が動く。

十三 京都の所司代から、俺達を召捕りのためにといふのは確か。

廓念 (首肯いて見せ) 日頃の交誼に廻り道して報らせによりました、これ氣をつけさつしやれよ。

十三 忝けない、いづれこの禮は頭から。廓念 何の禮に及ぼう、こちらこそ日頃何の彼のと厄介になるお禮でござる、ては暮々も油斷さつしやるなよ。

廓念は下手へ去る。入違ひに下手から仲間勘藏が喘ぎながら出る。

勘藏 もし、忠信の利平さんはぬさつしやらないかな。

十三 利平は留守ぢやが、お前は誰だ。勘藏 横須賀の西尾隠岐守様の仲間て勘藏といふものですが、大變なことがあるので、利平さんの耳に入れやうと思つて、横つ飛びに飛んで來ましたので、

十三 大變とは、どうしたのだ。

勘藏 もし赤星さん。  
十三 なに……………。

勘藏 いえ、お前さんは御存じなくつても私の方やよく存じてゐますので、もしけふの日の暮に濱松の城番からお役人がやつて來て、日本左衛門一味を召捕る手筈だと云つて、……………

十三 これ、  
耳を指す、勘藏さゝやく。

よく報らせてくれた、利平へは私から傳へる。

勘藏 噂によると同じお使者が掛川の太田様の方へも行つてゐるとのこと、さうすると濱松の城番に大名が二頭、おまけに江戸から八州方が繰込むといふ騒動で。

十三 よし分つた、人目にかゝらぬうちに早く歸るがよい。

勘藏 へえ、有難ふございます、どうぞ利平さんに私が報らせに來ましたことをね、横須賀の勘藏でございます、お頼み申します。

十三 勘藏は下手へ去る。  
坊主が來る、大名の仲間が來る、可笑

しなものだ。  
だが、かうしては、……………腕を拭む。月が昇つた體で下手から月光がさす、寢殿の椽から奴の小萬のおまぢが出る。

小萬 お前は慥か赤星十三といふたな。  
十三 え、

小萬 今ちらと聞けば京都の所司代がどうとやら、日本左衛門を召捕のためとやら。

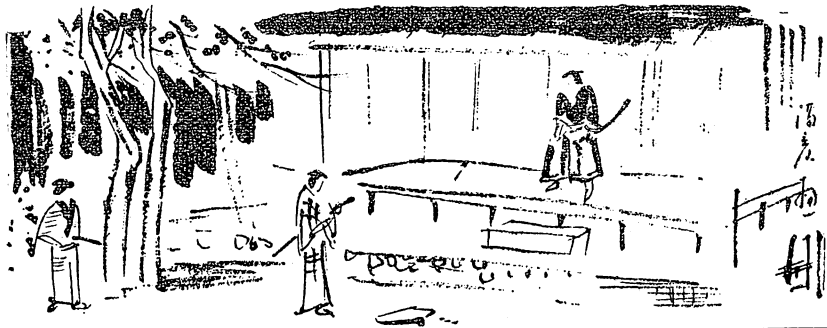
十三 そんなことお客人のお聞きなさることぢやございませんよ。

小萬 いえ私は客ではない、濱島庄兵衛の女房ぢやといふてゐるではないか。

十三 奴の小萬といふ大阪きつての女達衆の噂は遠州にも聞えてゐるが、その小萬と名告るお前さんが、お頭の女房だなどとはこれまでついぞ聞いたことがない。

小萬 聞いたことがあらうがならうが、女房の私がいふからは間違ひではない。これお前は庄兵衛殿の行先を知つてゐるのであらう。別れに暮して、三年越したより

もせぬ私が遙々遠州まで尋ねて來たのは、よく急な用事があればこそなのに、



おさむり 昨日早ふ出ていまだに戻られぬとは、気が急て〜  
 ぢりぢりするやうな全體頭の出先を大勢の者が誰一人  
 知らぬといふ法はない。これ、お前は本統に知らぬ  
 のか。

十三 頭の口から何所へ行くと聞いたことがない故知り  
 ませぬ、しかし推量をいへといふならいふて進せても  
 よふございませぬ。

小萬 て、その推量は、  
 十三 江戸からはいれる船を出迎ひのために、天龍の川尻  
 の掛塚か豊岡か、それとも駒場か袖ヶ浦か、いづれそ  
 の邊でござりませうよ。

小萬 今の噂といひ、時が遅れては折角来たのが水の泡  
 に……え、辛氣、責めてそこらまでこれ、草履を貸  
 しゃ。

十三へえ、  
 不平さうに有合す草履を階段に揃へる。小萬  
 は寢殿の内から脇指しを取出して出て指す、  
 十三は憧れの眼に成目る。

女の達衆か……お前さんは幾歳から達衆になられま  
 した。

小萬 小倅の分際でそんなこと問ふて何にする。  
 十三 今に見ろ、俺達の世の中が來たら、女達衆の三人  
 五人情婦に持つ位何でもないのだ。

小萬 白痴の氣狂奴。  
 十三 は、……  
 空想を樂しむ體で笑ふ。小萬は下  
 手へ去る。

鼓樓の後から辨天小僧が出て扉を  
 開き、中から心連を連れ出す、十  
 三は異しんで窺ふ。  
 辨天の兄貴ではないか。  
 菊之助 誰だ。

十三 私ぢや、十三ぢや。  
 心蓮尼 お十三さん。  
 取組らふとして泣倒れる。

十三 掛川のある尼寺にゐた……兄貴と  
 うく連れ出してしまつたのか。

心蓮尼 私はあなたのお使ひぢやと聞きまし  
 たので……。

十三 馬鹿なことを、誰が尼などを眼にかけ  
 る。

心蓮尼 え、てはあなたは……  
 十三 假にも、俺の眼をかける女と云ふたら  
 ……。

菊之助 ふん、十三なんぞに夜光の玉か石塊  
 か見分けがついてたまるものか。

心蓮はまた激しく泣く。

今更何を泣くのだお前はもう俺のものだ。一生涯俺のものだ。俺もまた命をかけて、

といつてゐるぢやないか。

十三 兄貴、お前は不思議な男だなア。

菊之助 黙つてる、貴様なんぞに俺の心が分るものか。

十三 そんなことはどうでもよいが兄貴、足許に火がついて来たぞ。

菊之助 なアに高の知れた木葉役人が三方四方網を張り廻そうとも脱ける道はいくらもある、それよりも肝腎なのは頭と仲間のいきさつだ。十三、手前にも相談がある、一緒に来い。

三人行きかける時、鼓楼の後から

日本左衛門の濱島庄兵衛が出る。

菊之助 お歸んなさいまし。

そのまゝ行きかける。

左衛門 待て。

十三 頭、頭の女房だといふ女中が大阪から

おいでにムリませう。

左衛門 なに、おまぢが来た………(意外の體)

十三 え、奴の小萬と仰しやいました。お歸りが遅いので、今そこらまで見にお出かけになりましたよ。

左衛門 さうか……。そこにゐるのは尼さんのやうだが、どうしなされた。

菊之助 こりや私の女で………

左衛門 お前に聞いてゐるのぢやない、これ尼さん、怖いことも何も無い、ありのままを真直にいひなさい。

心蓮尼 はい、私は掛川在南郷村の岩井寺の徒弟で心蓮と申しますが、いつぞやこのお二人がおいでなされて何が望みで出家をしてゐると………

菊之助 面倒だ、私がぶちまけてしまはうこのお雪が命にかけて好きだから女と化けて連出したのです。

左衛門 その通りか。

心蓮尼 はい、

左衛門 今から直ぐに寺へ歸れ。

心蓮尼 はい、

菊之助 頭、そりや………

左衛門 ならぬわ。何をぐづつ付けてゐる、歸れ。

心蓮尼 心蓮に向つて屹といふ。

心蓮尼 は………はい。恐れるやうに夢中で下手へ走り去る。

菊之助の追はうとするのを鋭く呼ぶ止める。

左衛門 待て、菊之助。

菊之助 彼奴は俺が命をかけた女なのだ

左衛門 馬鹿野郎女を盗むとは何たることだ

菊之助 さういふお前さんは何を盗んでゐなさるのだ。金を盗む。命を盗む。

左衛門 いゝや、俺は世の中の悪を盗んでゐるのだ。

菊之助 ふん、またお説教か、理窟は兎も角も、頭のいふ通りにすりや眞人間より尙窮風だ。

左衛門 當然よ、俺達には望みがある。

十三 さう頭が立派に云ひなさるなら、この

十三にも云ひ分がある。全體頭が望みの中の第一の望みだと初手にいつて聞せなすつ

た、腐れ果てた當世の立直しといふのは何時しなさるのだ。大名も侍も町人も百姓

も、日本國中の人間に貧乏といふ唾をかけた、骨抜きにしてまでも自分の天下を續け

やうとする徳川の政道を引繰返さなけりやならぬと云ひなすつた、その大仕事はどうなつたのだ。孟を取交してから今で満三年、平の盗人にも飽きくしましたぜ、然かも俺達の足許には、もう火がついて來てゐるんだ。

左衛門 二度と口外せぬ誓の約束も忘れて、一代の大事をべら／＼と饒舌るやうな白痴者が何か云へる。貴様達は約束を忘れたのか、誓いを破るのか。

十三 えッ。  
左衛門 俺は頭だぞ、貴様達は黙つて指圖通りに働いてゐる。

菊之助 ふん、人間思ふ事が思ふやうに出来ないくらゐなら、誰か命がけて働くものか左衛門 その思ふことを耐える所が人間だ。菊之助 袴をつけて鮫子張つてゐるのが人間かね、俺なんざ素裸體で生れて來たんだ。え、面倒臭え。十三行かう。南郷も忠信も待つてゐる。

二人は下手へ去る。  
日本左衛門はちつと腕を拱む。鼓樓の後から藤井右門が出る。

右門 濱島………

左衛門 藤井殿………

右門 今にして方向を轉換せぬと配下の心が離散するぞ、いつそこの機会に江戸へ乗出さぬか。

左衛門 然し元來彼等は市井のあぶれ者、山縣大貳先生や貴公に累を及ぼすやうなことがあつては、折角これまでに苦心せられた一大事が………

右門 さりとて離散せたら虎を野に放つより尚危うからう、山縣先生の謀略通り、江戸焼討ちを決行する。俺が來たら、彼等こそ究意の猛者ではないか。

左衛門 ふう……。日本左衛門一味を捕へやうとする、徳川の犬どもは既に爰數里の近くまで追つてゐる……。

右門 遠巡しては悔ひても及ばぬぞ。この右門も徳川の手が都に延びると知るより早く堂上の方々に累を及ぼさぬ爲め、從五位大和守の位をなげうつて京都を逐電した、濱島貴公も坊城大納言の家臣なら、如何なる場合にも、主家は素より都の方々に斷じて禍をかけぬ要領が肝要ぢやぞ。

忠信利平が鼓樓の後から姿を現はし二人の様子を窺ふ。

左衛門 それは重々心得てゐる。然し今はまだ私の江戸へ乗出す時ではあるまい。

右門 なせぢや。

左衛門 何より大切な軍用金がまだ足らぬ。

右門 さりとて捕方が迫つたら………  
左衛門 ナに、それを斬ぬけるくらゐの手段はいくらもある。所詮悪名を覚悟で金の手を引受けたからは、最後の最後までやり通さう。藤井殿、今夜のうちに手許に集めた金だけを引渡し申さう。

人の來る氣勢に右門を促して寢殿の内に忍ばせる。下手から小萬が出る、同時に利平は去る。

小萬 お、庄兵衛殿。  
左衛門 おまぢか、ちつと顔見合す。長き間小萬はそつと涙を拭ふて近づく。

小萬 昨夜からどのやうに待焦れたか。お前はまア日本左衛門など、淨瑠璃芝居にでもありさうな、あた阿呆らしい名をつけ

て……

左衛門 名のことなどはどうでもよい、三年

越したよりもせぬ、そちが不意に出て来な

用事は何ぢや、それからいへ。

小萬 お互に坊城家に御奉公中、身も心もゆるし合ふた時、何といふて約束したか、私や盗人を夫に持たうとは夢にも思ひませなんだ。

左衛門 それかそちには分らぬのか。

小萬 お國のためといふてのであらう、何がお國のため。先頃の藤井大和守殿の逐天といひ、お前の所業、竹内式部殿の新規な皇學の主唱と取合せて、都中は大騒動、分けてお前のが餘り圖離れた仕方ゆゑ、大納言様は二度までも所司代から内々の調べをお受けなされて、この上どんな御迷惑がかゝらうも知れませぬぞ。

左衛門 所司代風情が、二度までも大納言様を……。

小萬 それで濟めばよけれど、昔から俊基朝臣の東下りや、ついこの先の菊川で命を失はれた宗行朝臣のためにもある、私はそれが恐ろしい。庄兵衛殿、これまでいふたら

三年振りに出て来た私が何をいふ心か、何を勤める心かお前には……。

左衛門 分らないでか、西の都の御爲めになら濱島庄兵衛の命を何いとはふ。

小萬 え、庄兵衛殿。

辛うじて涙をこらへる。

左衛門 然し、東のことを思へば日本左衛門の命は惜しい。

小萬 何でもかう行き詰つては……。まだその上に所司代からお前を召捕の役人が濱松の城へ。

左衛門 それも聞いた。

小萬 掛川の太田備中守、横須賀の西尾隠岐守も人数を出して、三方四方からの國分寺を……。

左衛門 その上に、江戸からも八州方が繰出すと聞いた。太平といふ徳川の毒が利いて中風病み同様になつた木ツ葉大名や御家人どもが、何百何千寄せて来やうとも、びくともせぬ。然し……然し……。

煩悶の體。

寢殿から右門が出る。

小萬 お、お前様は。

右門 おまら殿、こなたの苦衷は察し、したが道窮まれば通ずといふたとへもあるぞ濱島、今から直に江戸へ乗出さう、いかなる幕府でも俺達さへ捕へぬ先に堂上方へ手をつける筈はない。

左衛門は尚ほ思ひわづらふ體。下手から忠信利平、辨天小僧、鼓樓の後から南樺力丸、赤星十三がたゞならぬ氣勢で出る。

右門はそれと見て寢殿に入る。日本左衛門は小萬と共に避けさせ、四人が寢殿目がけて斬込まうとするのを、階段に身構えて遮る。

左衛門 一足でもこの内へ踏込んだが最期命がないぞ。

菊之助 いゝや、彼奴を血祭りにした上で俺達はこの遺物を立退くのだ。

力丸 三年越し稼ぎ蓄めた何萬の金を、あんな奴にひつさらはれてたまるものか。

十三 頭、俺達は盃を返しに来たのだ。

左衛門 何だと、貴様達は響ひを破るのだな利平 破つたのは頭だ、五人の魂を一ツにして、我もなければ人もなく、物と云はず

金といはず一切五分々だと立派に云つた  
あの約束はどうなつたのだ、俺達は土偶ぢ  
やない、けふが日まで殺して来た魂が、  
今元通り生き返つたのだ。

菊之助 さア彼奴を出せ、彼奴を出せ。  
左衛門 いやならぬ、その代り返す盃は  
受けてやる。いや、此方からこそ盃を返  
してやる。

力丸 盃だけで済むものか、金はどうなる  
のだ。

左衛門 よし欲しくば残らず持つて行け。  
力丸 おい兄弟、受取らうぜ。

左衛門 日本左衛門は決心の體。  
左衛門 日本左衛門が秘密の金藏を引き渡さ  
う。

今夜丑三の鐘を合圖に、あの闇魔堂へ集ま  
れ、いひつけたぞ。

つと癡殿の中へ去る、三人が追は  
うとするのを利平が止める。

廻る——

(三) 闇 魔 堂

舞臺の中央の須彌壇に安置した巨大の闇魔  
像、左右に午頭女頭の木像と淨玻璃の鏡・  
香爐、花立など、下手に扉の出入、燈明が  
ほのかに點り、上手の蕨戸を透して斜に月  
光がさし込む。

鐘の音。  
下手の扉を開けて菊之助、力丸、  
十三、利平の四人が出る。やがて  
須彌壇の後から日本左衛門と小萬  
が出る。息詰まる様な沈黙が續く

左衛門 假初めにも三年の月日を生死を共に  
して一心同體の働きをして来た五人が、一  
朝にして心が乖離し、別れ／＼になると思  
へば遺に名残り惜しい、が、これも浮世の  
ならひで是非がない。貴めを誓ひを立てた  
あの時の例にならぶて、有合はした冷酒を  
飲み交はし、これを別れのしるしとしゃう  
おまち酒を出してくれ。

小萬は白丁を取出し、佛前の茶碗  
を把つて備める。

では俺から始めるぞ。

注がせて一息に飲む。  
小萬の隻手がそつと徳利の口を敲

力丸、年寄だから貴様にさう、それから  
利平、菊之助、十三と順に廻せ。  
四人は順々に飲む。

これで済んだ。この上は金藏をあけてやら  
う、分けるとも、どうするとも心任せにす  
るがよい。

左衛門は立上る、四人も立上る。  
人の來ぬやう入口の戸を閉めて置け。

十三が扉に門をかける。  
左衛門は須彌壇の板を外す、燈明  
を取つて小萬が中を照らす。

力丸 お、金だ……金だ……。  
四人して千兩箱、皮袋その他さま  
／＼の金を入れたる箱、袋の類を取  
出す、袋の口が解けてばら／＼と  
小判が濡れなどする。左衛門は刀  
を抜いて須彌壇の上に、小萬はそ  
の傍に立つて、ちつと見入る。

菊之助  
これが三年がりの四人の命の塊  
だ。

力丸 どうだ。この色は……この色は……。金を両手に揃ふてはバラ〜と瀧して見る。

十三 これをどうするのだ、どう分けるのだ。利平 こんな所で分けられるか、鎧々持てるだけ持つて天神の裏山まで引上げる。

それ〜金を身につけやうとする。そのうち力丸は少しく苦しくなつて来た體。續いて十三、菊之助、利平の順に毒が利いて来る、それでも心が急ぐ體で毒とも心附かず金を運び去らうと努める。

左衛門 待て、その金を持つて出る前に、これを見る、この闇覽大王の像を見る。

四人 何だと。左衛門 役人どもの手にかゝつた、噫、命の果まで大事を喰ひしる度胸のある奴は一人も居ぬと睨んだ故、闇覽の前で俺が裁きをつけてやつたのだ、所詮のがれぬ命と諦めて、一足先へ死んでくれ。

菊之助 おのれ、毒を吞ましやがつたな。十三 死ぬものか、山縣大貳先生の江戸の焼討を見ぬうちは死ぬものか。

小萬 私の手品に氣もつかず、飲んだも罪の報ひであらう。佛嬢ひの奴の小萬が、忌日命日を拜んであげる、安心して成佛をするがよい。

十三は小萬へ躍りかゝらうとして撞となる。力丸は金袋を脇につけた儘、逃去らうとして辛うじて門を外し、扉を開いたまゝ倒れる。

利平はよるめき寄つて抜き討ちに日本左衛門の小手に傷を負はす。小萬がその刀を奪ひ突倒す。心連尼が戸口から出て菊之助に組る。

心連尼 菊之助殿、菊之助殿………菊之助 お雪か。心連尼 あなたより外に、私はもう纏る佛も師匠もござりませぬ。

菊之助 お雪、あの世まで連れて行くぞ。心連尼 心連が胸を刺し折重なつて落入る。藤井右門が出る。

左衛門 藤井殿、庄兵衛は京へ上つて奉行所へ自首し、誓つて堂上方の禍を除きます。日本左衛門が命の籠つたこの金は貴殿の手

から同志の方々へ。右門 残念だが是非がない。

左衛門 手筈は、組子どもは、右門は入口に立つてさし招く、覆面した船手等が入口の外に現れる。利平が壇下にいざりよる。

左衛門 利平、健氣にも俺に手を買はせたな。本望か。利平 おのれも毒を……毒を……。

左衛門 四人ともよく聞け、日本左衛門は毒の代りに磔刑柱の上で、この胸から湧き出る血を飲むぞ。

小萬 庄兵衛殿。小萬は抱帯で左衛門の傷を包み、涙を呑む。

幕

編輯後記

◇前號でお約束した映畫欄が、燕雜ながら遂々本號から實現されました。號を逐ふて次第に皆様の御希望に添ふやう努力いたしませう。

◇讀者から讀者へのページ『喫煙室』も本號から始めて生れたページです。談論風發、大いに皆様の御使用を希望します。

◇別項記載の如く次號からは『喫煙室』と並んで更に讀者のページ欄をも設けることになりました。規定御熟讀の上奮つて御投稿下さい。

◇本號から愈々本誌も活躍期に入りましたので、皆様の『道頓堀』をよりよくするために、此際是非皆様の年極申込みを本欄でお願ひしておきます。

◇松竹座の年中行事、松竹ガクゲキ部出演、大レヴュウ『春のおどり』の鑑賞會やスタディオイオ見學等々讀者優待の計畫は逐次、次號から發表して行く豫定です。から御期待の程を。

◇とにかく皆様の御後援御支持を此際特にお願ひ致します。  
(大橋照夫)

◇中座の初日が珍らしく先月の卅一日に出た、にかかはらず本誌の發行が例月よりも一日二日遅れた。◇この遅れた理由を述べる前に先づ今月の本誌を見て戴けば、成程と御首肯下さる事と思ひます。

◇それ程内容の刷新と充實を計りました。口繪寫眞も、廿四頁にして、しかも、間に合せやお座なりでなく、實にニュースヴァリユウ百%ののばかりを選びました。

◇特別讀物として、大森、食滿兩先生の脚本を頂戴いたしました。これは何れも二月中の座上場中のものです。尙大森先生作の『延享五人男』に就いてはその文獻まで頂いて、讀者の興趣に備へました。  
(住田冬利)

昭和六年二月一日發行  
雑誌『道頓堀』第六年  
第五十三輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。  
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所  
大阪電報通信社  
大阪市北區中之倉三丁目

廣告の御用は電通または常編  
輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵五銭)

昭和六年一月三十一日印刷  
昭和六年二月一日發行  
大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹土地建物興業株式會社

編輯部 鳥江 鏡也  
發行所 大阪市東區船場南之町二丁目  
印刷者 北島竹次郎  
大阪市東區船場南之町一丁目  
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地  
松竹土地建物興業株式會社  
發行所 道頓堀編輯部  
電話(一六六四〇番)



茶

西區みどり茶

坐立半

電話號碼二六三三番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可  
昭和六年一月第一日印刷  
昭和六年二月一日發行

くきくよ番一にめ止レア

# ムーリク美ボディークラ

あなたのお顔  
にいつも青春  
の麗はしさを  
與へるクラブ  
美身クリーム



は粧化薄いし美くる明

# ンシビデラク

第六年二月號

一部金參拾錢